金正日略伝

朝鮮・平壌
チュチェ90（2001）

金正日略伝

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ90（2001）



『金正日略伝』の刊行によせて

1960 年代の初めから朝鮮労働党中央委員会で、金日成（キムイルソン）主席のもっとも近しい同志、忠実なアシスタントとして長いあいだ活動してきた金正日（キムジョンイル）総書記は、朝鮮の昨日と今日、そして明日を結ぶ歴史のリーダーとして登場している。

金正日総書記は、主席没後の複雑な内外情勢のなかで、帝国主義連合勢力の対共和国孤立・圧殺策動に断固立ち向かい、チュチェ思想を自主時代の指導理念としてさらに発展させ、チュチェの社会主義を固守し、民族大団結の理念にもとづく朝鮮の統一を確実に推進している。総書記は今日、先軍革命指導によって自衛的国防力をいっそう強化しつつ、社会主義強盛大国建設という雄大な目標を提示し、立ちはだかる難関と試練を乗り越え、その活路を開いている。

現在、朝鮮労働党総書記、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長、朝鮮人民軍最高司令官の重任を担っている。

本編集部は、1998 年版の『金正日略伝』につづいて、総書記の活動史にたいするより幅広い理解の一助として、今回『金正日略伝』を編集、刊行することにした。

チュチェ 90（2001）年 12 月

目　　次

一　1942 年 2 月～1964 年 3 月

1　白頭山の息子

金正日総書記は、1942 年 2 月 16 日、金日成主席と金正淑（キムジョンスク）女史の長子として、白頭山（ペクトウサン）密営（両江（リャンガン）道三池淵（サムジヨン）郡）で誕生した。

鮮やかな朝の国、朝鮮の北端にそびえ立つ白頭山は、朝鮮民族の魂と気概を宿す祖宗の山である。白雪を戴き天空を衝く白頭の霊峰が朝日に照り映えると、朝鮮の山河は精気にあふれ、万物は生の悦びに躍動する。白頭山の主峰—将軍（チャングン）峰に発する白頭山脈は南東方向に数里のびて正日（ジョンイル）峰をなし、そのふもとに小白水（ソベクス）のせせらぎが流れる。白頭山密営はこの小白水谷に位置している。白頭山密営は 1930 年代の後半期から 1940 年代の前半期にかけて、抗日大戦 の司令部が陣取っていた朝鮮革命の中軸をなす指導拠点であった。

1940 年代の初期は、ファシズムと軍国主義が第 2 次世界大戦を引き起こし、人類にはかりしれない災厄をもたらしていた時期である。日本帝国主義は侵略戦争をアジア全域に拡大するため、朝鮮人民革命軍にかつてない攻勢をかける一方、朝鮮人民にたいするファッショ的暴圧と略奪をいちだんと強化していた。この時期、金日成主席は革命の道に立ちはだかる難局を主動的に打開し、祖国解放の偉業を達成するため、日本帝国主義侵略者にたいする最後の攻撃作戦を準備する一方、数多くの小部隊とグループ、政治工作員を国内各地に派遣し、全民抗争の機を熟成させていった。

抗日の女性英雄―金正淑も、国内と長白地区の革命組織の活動の指導で多忙な日々を送っていた。

まさに祖国解放の曙光がさしてきたこの時期、金正日総書記の誕生は朝鮮人民にとって大きな慶事であった。

総書記の家系は、高祖父、曽祖父から祖父・金亨稷(キムヒョンジク)、祖母・康盤石(カンバンソク)、従祖父・金亨権(キムヒョングォン)、叔父・金哲柱(キムチョルチュ)、外伯父、外叔父の金基俊(キムギジュン)、金基松(キムギソン)にいたるまで、侵略者に抗し、国の独立と人民の自由と解放をめざす聖なる偉業にすべてをささげてたたかった。

父の金日成主席は、朝鮮人民が数千年の歴史上初めて戴いた偉大な領袖であり、「以民為天（人民を天のごとくみなす）」を座右の銘とし、祖国と人民のために全生涯をささげた。主席は不滅のチュチェ思想を創始し、歴史の新時代、チュチェの時代を切り開いた革命の英才であり、チュチェ思想の旗のもとに祖国解放と民族繁栄の大業をなし遂げ、長年にわたって後進性と貧困が支配していた朝鮮をチュチェの社会主義強国に変えた社会主義朝鮮の始祖である。

母の金正淑は早くから革命に身を投じ、主席の指導のもとに祖国の解放と人民の自由と幸福のために一生をささげた不屈の共産主義的革命闘士であった。

このように総書記は革命的家系の血統を受け継いだパルチザンの息子であった。

総書記は幼少のころから人並はずれた天稟を備えていた。とくに父への孝心は並々ならぬものであった。

1946 年の正月、母とともに万景台(マンギョンデ)を訪れたときのことである。曽祖父の金輔鉉(キムボヒョン)が筆と硯を取り出して、昔この墨でおじいさん

は「志遠」と書き、お父さんは「朝鮮独立」と書いたものだが、正日は何を書いてくれるかとたずねた。しばし考えていた正日少年は筆をとると、白紙に「金日成将軍万歳！」と一字一字鮮やかに書いた。曽祖父は、さすがに万景台の血統を継いでいる、と大満悦だった。

　総書記は観察力と洞察力、分析力がすぐれていた。幼少のころ、注意深い観察によって、鶏が水を飲むときくちばしを上に向ける理由や、数ある花のなかに黒い花がない理由を明らかにしたりした。ある年の中秋の月見のときには、月の中の桂の木の下でウサギが餅つきをしているというおとぎ話を聞いて、空高く飛ぶ飛行機が遠ざかるにつれだんだん小さくなり、しまいには消え去ってしまう例をあげ、あんなに遠い月の中のウサギが見えるはずはない、とおとぎ話を否定した。

　物事にたいする正日少年の観察力と創造的眼識は実に非凡なものであった。ひとかたまりの粘土にもうひとかたまりの粘土を合わせても二つではなく、一つになること、花びらに落ちた水玉が一つに合わさるのを見れば、一つに一つを足しても二つではなく、一つになる場合もあること、またそのときはもとのものと同じ一つのものではなく、もっと大きな一つのものになり、いくつも合わさって一つになるときは非常に大きな一つのものになることを見きわめた。

　総書記は幼いときから大きな胆力と雄志、熱烈な祖国愛と熱い人間愛、気さくな性格をもっていた。

　正日少年は新しい朝鮮のあらゆるものを愛護した。夏のある日、大同（テドン）江で人々が爆薬を用いて稚魚まで殺しながら魚捕りをしてい

るのを見ると、その日の晩、父にその非を告げた。

　正日少年は友愛心に富んでいた。めずらしいものが手に入ると友だちに分け与え、友人に悲しみや困難が生じると、わがことのように心配し助力した。

　1948 年 6 月、幼稚園の運動会のとき、三輪車競争に出た正日少年は、競争相手の友だちが途中で転倒すると、自分も三輪車を止めてその子を助け起こしてから、またペダルを踏みつづけ、人々の喝采を浴びた。正日少年は気さくな性格で、生活も質素だった。他の生徒と同じ普通の服にゴム靴姿で、風呂敷包みの学用品をもって徒歩で学校に通い、ときにかわった靴やカバンが供されると、友だちと同じものの方がよいといって使おうとしなかった。冬には教室のストーブの当番もきちんと果たした。

　正日少年のすぐれた資質は両親の革命的薫育と影響によってさらに磨かれていった。両親の細やかな教育は正日少年の心に熱烈な愛国心と人民愛を培わせ、敵にたいする憎悪心と強い階級意識を植えつけた。

　父の言いつけをよく守ることが、とりもなおさず国を富強にし、人民に幸せな暮らしをさせる道であるという母の言葉とその手本は、正日少年に代を継いで革命をつづける決心をかためさせた。ことに、祖国と人民のために不眠不休の労苦を重ねる父の革命活動と細心な教育は、正日少年のすぐれた資質をさらに磨きあげる糧となった。

　正日少年は新しい朝鮮建設にわき立つ現実のなかで、並はずれた資質をりっぱに育んでいった。両親とともに平壌（ピョンヤン）と清津（チョンジン）、南浦（ナンポ）一帯と先鋒（ソンボン）郡、大同郡などの各都市や農村、漁村を訪れた正日

少年は、新しい国づくりに立ち上がった人民の建国の熱意と奮闘ぶりを目のあたりにし、主席にしたがうかれらの熱い心と底知れない力、熱烈な愛国心を感得した。また普通(ポトン)江改修工事場や美林(ミリム)原に行っては、大人たちの働く姿を見て、祖国と人民に自己のすべてをささげる決心をかためた。

1949 年の秋、正日少年は思いがけない大きな悲しみを味わった。9 月 22 日、母が 32 歳を一期として帰らぬ人となったのである。牡丹(モラン)峰に葬られた母の墓を訪ねた正日少年は、日暮れどきまでその場を離れず、墓前で母の遺志を重々胸に刻みつけた。その日から、正日少年は母に代わって妹の面倒をみながら、父を喜ばせることに最大の努力を払った。

2　朝鮮のために学ぼう

戦争の試練のなかで

正日少年は朝鮮戦争が勃発（1950 年 6 月 25 日）すると父と別れ、妹の面倒を見ながら生活した。

戦火の日々、焦土と化した都市や村を目のあたりにしながら侵略者にたいする敵愾心を燃やし、『金日成将軍の歌』をうたいながら戦いに立ち上がった人民と人民軍将兵の姿を見て勝利の確信をかためていった。

正日少年は 1952 年 6 月に父のもとに来た。そして父とともに人民軍空軍の空中戦も観戦し、空軍部隊や平安(ピョンアン)北道内の各地を

見て回った。その過程で、楽元（ラクウォン）の10名の労働党員[1]の話も聞き、日夜戦時生産に励む後方人民の姿も目のあたりにした。

このころ、正日少年は父の健康と無事を願ってとりわけ気をつかった。主席の車がさる別れ道にさしかかったときだった。主席は車を止めさせ、ここからは大道を避けて小道に入るようにと真顔で指示した。小道は険しかった。大道にコースを取ることを事前に通報しておいた随員は狼狽し、難色を示した。これを見た正日少年は随員をたしなめた。

「お父さんが指示した方へ無条件に車を向けなくてはなりません。お父さんが行く道は絶対に正しい道です。早くこの道に車を向けなさい」

この言葉に心を打たれた随員は、一瞬であれ動揺したことを悔いて車を小道に向けた。車がしばらく走っているときだった。突如耳をつんざく爆音とともに敵機が来襲し、先刻車が通るはずだった大道に爆弾の雨を降らせた。後日判明したところによると、その日の爆撃はアメリカの雇われスパイらの凶悪な策略によるものであった。

正日少年は同年6月下旬から最高司令部で父と起居をともにした。最高司令部では昼夜を問わず息つく間もない日々がつづいた。父は毎日何回となく戦況報告を受け、新たな命令を下達する一方、党を強化し人民生活を安定させる方策を講じた。また科学者、技術者を呼んで勝利した後の復興建設を設計し、作家、芸術家に会っては戦争の勝利に寄与する作品の創作と芸術活動の方向を示した。党と国家、前線と後方の活動がすべてこの最高司令部に集中され、ここから指令されていた。

正日少年は作戦台の前で一晩中眠らずに作戦を練る父につきそ

って、戦況を見きわめ、敵の企図を砕く方法や攻撃、包囲掃滅の方法、対空、対戦車戦の方法など、父の卓抜な用兵術と革命的楽観主義、果敢な攻撃精神、不屈の意志、無比の胆力と軍事的手腕を一つひとつ体得していった。そして父にしたがって砲煙にけむる人民軍各部隊の火力陣地や岩水の滴る坑道工事現場にも入り、敵機の猛爆で燃えあがる平壌の市街や農村もつぶさに見た。こうして前線と後方の区別もない苛烈な戦争を体験する過程で、父の卓越した指導によって戦争の勝利と明日の繁栄が約束されていることを感得した。

正日少年は、こうした日々に体得した信念と意志をこめた歌『祖国のふところ』〔2〕を創作した。

1952 年 8 月中旬、正日少年は最高司令部の父のもとを離れて学習に打ち込んだ。そしてこの日々にも険しい前線への道を歩んでいる父の無事を念じてやまなかった。アメリカ帝国主義侵略軍の猛爆のニュースを聞くたびに、日夜前線と後方を駆けめぐる父の安否を気づかった。

正日少年は父に手紙を書いた。

「なつかしいお父さんへ。

お父さん、その後お変わりありませんか？

苛烈な祖国解放戦争でヤンキーを打ちのめすため、さぞご苦労のことと思います。

…

そしてなによりも大事なお願いとしてお父さんに申し上げたいことは、お父さんは自分お一人のお体ではなく、全朝鮮人民の領袖だということです。

…お父さんがお体に気をつけ、空襲に注意し、いつもお体をいたわってくださることは全朝鮮人民の幸せであり、またぼくたちの幸せです。

くれぐれもお体に気をつけてくださるよう遠くからお祈りいたします。

1953 年 6 月 1 日

金正日より」

父の万年長寿と無事を切々と祈る手紙を受け取った主席はたいそう喜び、最高司令部ではもちろん、危険な前線視察の途につくときにも、その手紙を肌身離さず持っていた。

正日少年はその後、その日の手紙の内容で『祝福の歌』〔3〕という歌をつくった。

それから 20 年を経たある日、金正日総書記は戦火の日々を感慨深く回想し、「祖国解放戦争はわたしの生活で忘れられない歴史的な時期でした」と述べている。

「金日成将軍の略伝研究サークル」

正日少年は人民学校（小学校）在学当時、学業に励むかたわら、少年団の組織生活に熱心に参加した。戦争の重荷を一身にになって日夜奮闘する主席に忠義を尽くすために自分が何をすべきかを深く考えた。そして主席について学ぶ「金日成将軍の略伝研究サークル」を組織することを発案した。この発案は教職員、生徒に大いに支持された。

正日少年は綿密な準備にもとづき、1953 年 2 月 10 日、「金日成

将軍の略伝研究サークル」を結成した。そして結成の集いで、略伝学習の重要性とサークル結成の目的、サークルの任務と活動方向について述べた。

サークルは週に一回運営され、その基本形式は略伝の会読と解説であった。また読書発表会もしばしば催し、主席の革命活動についてのアルバムをつくって学習に利用したりした。

正日少年は学内に限らず、サークル員とともに大人たちを訪ね、主席の革命活動を解説、宣伝した。サークル員たちは主席の革命活動路程を熱心に説明し、力点をおくところでは革命歌謡をうたったり詩を朗誦したりして、話を興味深く進めた。かれらの解説・宣伝を聞いたある老人は、正日少年の両手をとり、この困難なときに金日成将軍の話を聞かせてもらって力がわいてくる、おまえたちこそは金日成将軍の真の息子、娘たちだとほめたたえた。

日を追って活発に運営されてきたサークルは、1953 年 4 月 15 日を迎えて全校のクラスにもれなく組織された。この「金日成将軍の略伝研究サークル」は主席の革命思想と革命業績、高邁な徳性について学ぶ初の革命活動史研究サークルであった。

正日少年はこの研究サークルを活発に運営すると同時に、朝鮮革命に役立つ知識をより多く習得するために、「朝鮮のために学ぼう！」というスローガンを提唱した。このスローガンはその後全国に広まり、今日ではすべての学生少年に祖国と人民のために実際に役立つ知識を習得させるうえで大きなけん引力となっている。

篤学家、情熱家

正日少年は戦後、平壌第 4 人民学校を卒業し、1954 年 9 月、平壌第 1 中学校に入学した。中学に入学してからは学科の学習だけでなく、各分野の図書を読破するという高い目標を立てて勉強に励んだ。

ある日の晩、父から、今日の外信に重要な記事があったがどう思うかと問われた。正日少年はその日の午後、少年団分団総会の準備をしたうえ病中にある学友の見舞いに時間をとられ、つい外信に目を通すことができなかったので、父の問いに答えることができなかった。主席は、毎日情勢資料を研究するのは容易なことではないが、それを一日でも欠かしてはいけない、わたしは中学時代、革命のために、寒い部屋で食を抜くことがあっても本を手放したことはなかった、地下闘争のときも山中で戦うときもいつもそうだった、革命も情熱があってのことであり、学習も然りだと諭した。

正日少年は父の言葉を肝に銘じ、「情熱、それは偉大な創造の源である」と書いた紙をいつも目につく机のガラス板にはさんでおいた。数日後、これを目にした主席は、生活の指針となるよい言葉だとほめ、しかし決心することも大事だが、それを実践に移すことがもっと大事だと述べた。

それ以来、正日少年はさらなる情熱と類いなき探究心に燃えて学課を履修しただけでなく、国内外の社会・政治図書や文芸書を熱心に読むと同時に、『労働新聞』をはじめ各種の新聞、雑誌を

読み、国際情勢に関する資料の研究も深めた。そのころ正日少年の書棚には各分野の図書がずらりと並び、人類知性の宝庫を思わせるほどだった。

正日少年はいつも「僕は読書に没頭すると時間が経つのがわからない。読むべき本が多いのに時間があまりに早く過ぎていくのでいらいらすることもある。僕は学校で教わることだけでは満足できない」と言っていた。

正日少年は読書の時間を最大限に絞りだしただけでなく、いったん本を読みだすと、誰がそばに来たのか、いつ夜が明けたのかもわからないほどだった。そして読んだ内容を一つひとつ頭に刻んで分析的に掘り下げるだけでなく、感じたことを本の余白に書き込んだ。

社会科目とともに自然科目の学習も深め、どんな問題でも自分の手で直接実験してみたり、実際に証明してみてはじめて納得した。自動車のエンジンを分解してその原理を知り、映写機を分解しては光線の反射と屈折現象がどう作用するのかを習得したりした。いつも学んだこと、観察したことを実践に移して有用な知識にしなければ満足できない性分であったため、この時期にすでにカメラ、映写機、車はもちろん、テープ・レコーダー、タイプライター、ラジオ、旋盤などの作動原理を深く把握し、上手にこなした。

3　青少年学生の先頭に立って

白頭山革命戦跡地踏査コースの開拓

金正日総書記は、青少年学生に金日成主席の革命活動史を学ばせることに大きな力を注いだ。少年団員のあいだで主席の革命活動史を深く学習する活動を進めながら、1955 年 4 月には万景台と七谷（チルゴル）革命史跡地の参観をおこない、その経験を踏まえて白頭山革命戦跡地への踏査行軍を発案した。

総書記は主席に自分の考えを話した。主席はよいことを考えついたと大きくうなずき、朝鮮のことわざに「朝早く戸をあければ 5 福が来る」というのがあるが、革命戦跡の初踏査がまさにそれだ、初の出立だから決心して一度踏破してみるのがよいと励ました。

総書記はただちに白頭山革命戦跡地踏査団を組み、少年団の会合で踏査期間の活動内容について討議した。そして踏査行軍の目的は、金日成主席の歩んだ足跡をたどって行軍し、山も越え、主席の指導にしたがって抗日遊撃隊員がどんなに厳しい試練を経て今日の勝利をかちとったかを学ぶことにあると述べた。

こうして 1956 年 6 月 5 日、総書記は革命戦跡地踏査団を率いて平壌を出発した。これは朝鮮で初めての白頭山革命戦跡地踏査団であった。

地元の学生少年たちの歓迎を受けて恵山市に到着した踏査団は、抗日革命闘士・馬東熙（マドンヒ）〔4〕の墓にもうでた後、普天堡（ポチョンボ）へ行って普天堡戦跡地を参観し、三池淵を経て「甲茂（カンム）警備道路」を行軍し、鯉（リ）

明水(ミョンス)に至った。踏査団は予定の日程をことなくこなした。この期間に少年たちは多くのことを学びとった。

総書記は踏査の過程で、革命戦跡をもっと探し出して復元し、とくに三池淵一帯を革命伝統教育の場としてりっぱに整備し、踏査コースを普天堡から白頭山の頂上までのばす構想をあたためた。

革命戦跡の踏査を終えて帰ってきた総書記は主席に踏査団の活動について報告しながら、革命戦跡がそれ相応に整備されず、おざなりの復元であったり、放置されていること、そして案内解説員すらいない実態を話した。

金日成主席は回顧録でそのときのことをつぎのように回想している。

「そういうときに金正日同志が平壌第 1 中学校の生徒で革命戦跡踏査団を組み、白頭山地区の踏査に向かう勇断を下したのは、大きな意味を有することでした」

このように、総書記によって朝鮮で初めての白頭山革命戦跡地踏査コースが開かれ、革命戦跡と革命史跡をさらに発掘、整備し、党員と勤労者、新しい世代のあいだで生々しい史料による革命伝統教育がなされるようになったのである。

党の思想体系を確立しよう

1950 年代の中期に至り、朝鮮革命は大きな難関と試練に直面した。戦後、廃墟を払いのけ、3 カ年人民経済計画を繰り上げて完遂した朝鮮人民には、新たな 5 カ年人民経済計画を遂行すべき課題が提起されていた。しかし、資材も資金も不足していた。外

部からは帝国主義者とその手先たちが新たな戦争を引き起こそうと狂奔し、修正主義者の圧力がかかり、内部では反党・反革命分派分子が蠢動しはじめた。

総書記は内外の情勢が複雑かつ困難をきわめていた時期に、青少年学生のあいだで主体性と党の思想体系を確立するため精力的に活動した。

1956 年 5 月、平壌第 1 中学校では、朝鮮労働党第 3 回大会で示された第 1 次 5 カ年計画の展望についての講演があった。朝鮮で初めての 5 カ年計画であったので、講演は教員と生徒の大きな関心をひいた。講師をつとめた校長は、戦禍をいやしておらず食糧にも事欠いている現状にあって、国土が狭い朝鮮の実情では若干の軽工業部門の工場を建設し、自動車やトラクターなど各種の大型機械は自力で生産する必要がない、大型機械類は必要に応じて国内に豊富な地下資源やリンゴ、イカなどと引き換えに輸入すればよい、と説いた。

総書記の表情は険しくなった。社会主義建設に必要な自動車やトラクターなどを生産する大きな工場を建てなくてもよいというのはどういうことか、それはつまるところ重工業の核心をなす機械工業の発展に反対することであって、経済建設の基本路線に反する雑言ではないか。講演が終わると、総書記は講演者に異議を唱えた。

国内で自動車、トラクターを生産する必要がないというのは金日成元帥の思想とは全く違っている、金日成元帥は重工業を優先的に発展させながら、同時に軽工業と農業を発展させることを労働党の経済建設の基本路線として提示した、ところが機械類は

生産せずに外国から買い入れるという話だが、この問題についてもう一度正確に話してもらいたいと問いただした。
　理路整然とした断固たる論駁に講師は言葉につまり、釈明もそこそこにそそくさと演壇から立ち去ってしまった。総書記は学友たちを見回し、今日の講演は間違いもはなはだしい、誰の話であれ、それが金日成元帥の革命思想に照らして間違っているときにはその場でたたかうべきだと強調した。教員と生徒たちは、講師の話の狙いが何であったかを明確に知り、憤激と憎悪にかられた。
　ここから深刻な問題点をとらえた総書記は、青少年学生のあいだで労働党の路線と政策で呼吸し行動し、それに反するいっさいの思想要素と容赦なくたたかう革命的気風を確立するための思想教育活動に大きな力を注いだ。
　党の思想体系を確立することは、革命と建設にたいする主席の思想と指導を確固たるものにする根本問題であり、それは反党・反革命分派分子の策動のためいっそう切実な要求となっていた。
　金日成主席は朝鮮労働党中央委員会の 1956 年 8 月の総会で、長い来歴をもつ分派の弊害を一掃する断固たる措置をとり、1958 年 3 月の党代表者会議では分派の余毒を一掃する党内闘争状況を総括し、党の統一と団結を強化するための綱領的課題を提示した。
　総書記はこの方針にしたがい、青少年学生のあいだで党の思想体系を確立するために鋭意努力した。
　1958 年 9 月 16 日、学校民青総会での『民青員のあいだで党の思想体系を確立するための諸課題について』と題する演説のなかで、「青年のあいだで党の思想体系を確立しよう！」というスローガンを示し、党の思想体系確立の必要性と本質を明らかにした。

当時、少なからぬ人々は党の思想体系にたいする正しい認識をもっておらず、それを漠然と労働者階級の思想体系とのみ考えていた。そんなときに総書記は、党の思想体系はある種の抽象的な概念ではなく、主席の思想体系を意味すると、その本質を明快に指摘した。その時から、民青の活動は、学生のあいだに党の思想体系を確立することに集中されるようになった。

総書記は党の思想体系の確立を、学習と実践活動における主体性の確立と密接に結びつけて進めていった。主席の著作『思想活動において教条主義と形式主義を一掃し、主体性を確立するために』を深く研究し、それにもとづいて朝鮮労働党の政策と革命伝統、朝鮮の歴史の学習に第一義的な注目を払い、外国のものを教条主義的に模倣したり取り入れようとする傾向を徹底的に排撃した。

そして民青および少年団の会合でも主体性の確立について強調し、学友たちとの話し合いでもこのことに話題の焦点をしぼり、学習状況の評価においてもこれを基準とするようにした。

また党の思想体系の確立における革命伝統教育の重要性を推し量り、主席の誕生 47 周年を迎えて「朝鮮労働党歴史研究室」の設置を提起し、自ら研究室の図録パネルに掲示する数十枚の写真や幾冊もの資料集を提供し、学友たちとともに図録パネルに貼る文字を切り抜いたり、資料の配列まで手がけた。こうして 1959 年 4 月 15 日の祝日を迎えて「朝鮮労働党歴史研究室」が完成し、研究室の正面には主席の胸像がおかれた。

総書記は学友たちに、研究室を設けたことは党の思想体系確立における重要な成果だとし、研究室を拠点に主席の革命活動史を学ぶ活動を活発に進めていった。

こうした精力的な活動によって、生徒の思想生活には新たな転換がもたらされ、かれらのあいだに党の思想体系が確立されていった。

民青活動に活力を

総書記は 1956 年 12 月、朝鮮民主青年同盟に加盟した。そして 1957 年 9 月 1 日、平壌第 1 中学校の高級班（後に南山（ナムサン）高級中学校に改称）に進学し、学校の民青副委員長（委員長は教員）に選出された。

この時期は朝鮮で生産関係の社会主義的改造が完成間近になり、社会主義建設の各分野でチョンリマの大進軍がはじまっていた偉大な転換の時期であった。一方、党内では分派の悪影響を一掃し、党の統一と団結を強化する闘争がくりひろげられていた歴史的な時期であった。

こうした時期に、総書記は主席の青年運動思想を具現して新たな転換期に入った革命発展の要請に合わせて、青少年学生との活動を活発に進めていった。

学校民青組織の任務はすべての民青員を党と領袖に忠実な革命家、知識と能力を備えた頼もしい社会主義建設者に育てることであるとし、同盟員にたいする思想教育と同盟生活の指導、学習と少年団活動にたいする指導を民青組織の重要な任務として提示した。

総書記は思想教育活動を優先させながら、民青員の原則的な同志的団結のために大きな力を注いだ。何事であれそれを順調に進めるためには、それをする人たちの息が合わなくてはならない、

家庭の親和をはかるにしても家族の心が一つにならなくてはならないように、民青の活動を円滑に進めるためには民青員が一心同体にならなくてはならない、とくに原則的な同志的団結のためには同志間の友情を深め、それを大事にしなければならない、しかし友人が過ちを犯すのを見ても親しい間柄だからと目をつぶったりかばい合ったりしてはいけない、それは真の友情ではない、革命の時代に生きる青年は当然、革命的友情を大事にし、組織と集団、革命に利する友情のみを認めるべきだ、とつねづね強調した。

民青隊伍の統一と団結はどのような原則ではかるべきか、革命的同志愛とは何であり、それはどう発揮されるべきか、批判にたいする観点と立場はどうあるべきかなど、原則的な諸問題にたいするこの正しい解答は、当時民青員の同盟組織生活に現われていた本質的な欠陥を是正し、民青の活動を改善するための指針となった。

当時、民青の活動では、民青員の誇りを抱き盟員証を大切に保管することからはじまって、同盟の組織・思想生活に自覚的に参加させることが重要な問題として提起されていた。そのため総書記は、共和国英雄たちの血染めの盟員証が展示されている祖国解放戦争勝利記念館の参観をはじめ、各種の活動を進めた。その過程で民青員たちは、祖国解放戦争の時期に李寿福（リスボク）〔5〕、朴元振（パクウォンジン）〔5〕英雄が盟員証を血に染めて戦った姿に深く感動し、かれらのように民青員としての誇りを抱いて祖国と人民のために身も心もささげてたたかう決意をかためるようになった。

総書記は民青活動のかたわら、少年団の活動にも深い関心を払った。そして上級学年の優秀な民青員が少年団分団指導員の活動

を援助する補助分団指導員制を導入した。この補助分団指導員制は、民青員の手で少年団活動にたいする指導と援助を着実に進めるための少年団課外教育指導システムであった。

総書記は青年学生とともに平壌市の壮大な建設と社会主義建設の勤労支援に積極的に参加し、いつもその先頭に立った。総書記は 1958 年 5 月初旬から 6 月中旬まで、平壌第 1 中学校の学友たちとともに、平壌市の住宅建設用部材の生産に参加した。そしていちばん骨のおれるコンクリート混合作業を受け持ち、背負い道具やもっこなどでかつぎ仕事をした。ときにはセメントを運搬するトラックの上乗りをし、降りだした雨でセメントが濡れないように上衣を脱いでかぶせたりした。また翌日の作業に備えて夜中に数十メートル先の大同江の水を汲んでは用水タンクに満たしておくこともあった。その後も学生少年宮殿の建設や大同江護岸工事の現場に出かけて、首都の建設に参加した青年学生をリードし、人々に大きな感銘を与えた。

総書記はまた、黄海（ファンヘ）製鉄所をはじめ各地の工場、企業所の見学や、緑化近衛隊、衛生近衛隊などの課外活動を通じて実地体験を積んでいった。

4　チュチェの革命偉業の継承者として

朝鮮よ　その名輝かさん

1960 年 9 月 1 日、金正日総書記は金日成総合大学に入学し、

経済学部政治経済学科に籍をおいた。

　その日、総書記はキャンパスを見おろす龍南(リョンナム)山に登り、主席によって切り開かれたチュチェの革命偉業を継承し完成する雄志を抱いて『朝鮮よ　その名輝かさん』と題する一篇の詩を詠じた。

朝陽のぼる　龍南山の頂に立てば
3 千里祖国の山河　胸に迫る
この地で　領袖の大志学び
朝鮮革命になう　主人となろう
ああ　朝鮮よ　その名輝かさん

偉大な領袖　高く仰ぎ
チュチェの道を　ひとすじに
荒波嵐　吹き荒れど
朝鮮の未来　きずきゆこう
ああ　朝鮮よ　その名とどろかさん

世界に輝く　太陽の偉業
代を継いで　なし遂げん
チュチェの光　この世にみなぎる
共産主義めざし　進みゆこう
ああ　朝鮮よ　わが祖国よ

　この地朝鮮で主席の高い志を忠実に体していくというのは、総書記が早くから心に刻みつけてきたゆるぎない信念であった。

1959 年 1 月に総書記がある国の総合大学を参観したときのことである。その国の案内者は総書記に、高級中学校を卒えたらぜひこの総合大学で学んでもらいたいと提言した。当時、その大学には世界各国から多くの留学生がきていた。そのなかには国家元首の子女も少なくなかった。しかし総書記は、「朝鮮にはりっぱな金日成総合大学があります。わたしは金日成総合大学で学びます」と答えた。

かつて、吉林監獄から出獄した金日成主席が広大な地域を舞台に革命活動を展開していたとき、コミンテルンは同組織がモスクワで運営する共産大学に留学するよう主席に勧めた。しかし主席は、マルクス・レーニン主義は書物を通して学ぶことができるが、人民を離れては人民のための革命家になれないという持論を曲げず、モスクワ留学にではなく人民に向かう列車に乗って人民のなかに入っていった。

「以民為天」を座右の銘とし、人民とともに生涯を送る主席の崇高な志をそのまま受け継いだ総書記は、このように外国の大きな大学ではなく朝鮮の金日成総合大学で学ぶ勇断を下したのである。この決心には、とくに大学時代に主席の革命思想を全面的に体得しようという意図がこめられていた。総書記は、主席の革命思想のみが朝鮮革命の唯一の正当な指導思想、指導指針であることを確信していた。

主席はつとにチュチェの革命偉業を切り開く過程で、内外の敵の度重なる策動を退け、幾多の逆境と陣痛に耐えなければならなかった。このような困難や試練は昨日、今日だけでなく、明日にもあり、遠い将来にもあるであろう。チュチェの革命偉業遂行の

道に横たわる幾多の困難と試練を予測した総書記は、これから先どんな狂風が吹き荒れ、どんな荒波が押し寄せようともそれに果敢に立ち向かい、朝鮮革命をチュチェの道、輝かしい未来へと導くことをかたく決意した。

創造的学習気風

金日成総合大学に入学したその日、総書記は、科学の最高学府に入り、金日成同志の気高い志を体して革命の未来を担っていかなければならないという決意がいっそうかたまるとし、教職員たちにつぎのように述べた。

「わたしは大学時代を、金日成同志の革命思想を深く体得し、朝鮮革命の担い手としての準備をととのえる意義深い時期にしたいと思います」

総書記は、大学時代に現代科学と人類の知の最高峰をきわめるべく高い目標と崇高な理想をかかげ、創造的な思索と情熱を傾けて科学の探究に専心した。

総書記は講義に聞き入り、受講時間を事象の概念と法則、科学的原理を把握し、体系化された知識を得る思索と創造の過程とした。受講や自習時間の際にはつねに問題の本質を深く追究し、「なにゆえに」「どのように」「どんな結果が」といった疑問を投げかけ、創造的な思索と探究を重ねて科学的真理を把握した。そして、取り上げられた問題の要点をノートに書きとめ、余白には自分の感じたことや見解を書きそえた。また、読経式や丸暗記式の学習方法を排し、つねに多くの参考書を読み、問題の本質を

深く追究しながら知識を広げていった。

総書記は、学期試験や学年試験を、提起された問題にたいする自分の意見を発表する機会とした。

国際労働運動史の試験のとき、第2インターナショナルの消滅原因について、それはベルンシュタインやカウツキーなどの修正主義者、変節漢がブルジョアジーの側に寝返ったことにあるという講義の内容にとどまらず、その主因はマルクス、エンゲルスの思想を継承しなかったことにあると述べた。また、国家と革命の問題を解くにあたっては、労働者階級の政権形態はコンミューンとソビエトであると規定した講義の内容にこだわらず、金日成主席が創出した人民政権も労働者階級の指導する政権形態であることを、革命の原動力の見地から理路整然と論証した。

総書記は、思索の貧困は創造の貧困を生み、創造のない知的活動は無意味であるとみなした。こうした創造的な思索と探究の結果は、セミナーや学科論文の作成にいっそう明白にあらわれた。セミナーのときや教員と学術的な意見を交わすときには、講義で学んだ内容にとどまらず、主席の著作やマルクス・レーニン主義の古典にもとづいて幅広く論議し、自説を提示した。そして、なにか問題が提起されると、新しい角度から論点をとらえ、内容を独創的に展開した。

総書記はまた、勉学で主体性を確立して、革命的世界観が確立し、主体的観点と立場に徹した革命的人材として備えるよう青年学生を導いた。

1960年10月、朝鮮史の講義があったときのことである。ある学生が、マルクス・レーニン主義の既成理論では民族を特徴づけ

る表徴として言語、地域、経済生活の共通性、文化生活の共通性による心理的性格の共通性をあげ、この 4 つのうちどれか一つを欠いても同じ民族とはみなせないとされているが、それでは朝鮮の海外同胞はどう見るべきかと質問した。質問の主旨は、既成理論の基準からすると海外同胞は朝鮮民族ではないというものであった。

そのとき総書記は、マルクス・レーニン主義の既成理論を絶対視する学生の思想観点を根本的に正さなければならないと考えた。そして、それらの理論は前代の歴史的環境のもとで著述されたものであるので、現代の革命と建設におけるすべての問題に正しい解答を与えることはできないとし、民族問題にたいする解答も金日成同志の著作に求めるべきだと強調した後、つぎのように論じた。

「民族を形成する基本的表徴は、血筋、言語、地域の共通性であり、そのなかでも血筋と言語の共通性は民族を特徴づけるもっとも重要な表徴となります」

総書記は、民族はなによりも血筋と言語を同じくする人々の強固な集団であるとし、同じ領土に住んでいても血筋と言語が異なれば同じ民族とはいえない、地域の共通性も民族を形成する主な表徴の一つである、人間は同じ地域で長期間生活を営む過程で血筋が一つになり、同じ言語を使用する強固な集団として結ばれるようになった、しかし種々の要因によって同じ民族が相異なる地域で暮らすこともあれば、相異なる民族が同じ地域内で共生することもある、したがって海外に住む朝鮮同胞もみな同じ朝鮮民族である、と理路整然と論証した。

総書記は主席の著作研究を第一とする学風を確立した。

在学の最初の 2 年間は『金日成選集』に収録されたすべての著作を研究、抜粋し、後半の 2 年間はそれを専攻と結びつけていま一度幅広く掘り下げて研究する明確な学習目標を立て、自らその範を垂れた。

総書記は学生の学科学習だけでなく、教育内容についてもつねに深い関心を向け、教育で提起されるすべての問題を主体的立場に立って解決していくようにした。

なによりも政治経済学、哲学をはじめ、社会科学教育全般にわたって従来の理論にたいする教条的な枠をうちこわし、主席の示した党政策の正当性と生命力を掘り下げて解説、論証し、朝鮮の社会主義革命と建設における成果と経験を理論的に概括して体系化し、当面の理論的・実践的問題を正しく解決する方向で一つひとつ改善していくべきだと考えた。

また、歴史教育においても事大主義、教条主義を克服し、朝鮮史を主体的立場から解明するよう導いた。以前の史料では、新羅（シンラ）が高句麗（コグリョ）と百済（ペクチェ）を併合して三国の統一をなし遂げたとされていた。そのため歴史学界では、朝鮮史の発展において新羅が大きな役割を果たしたとし、7 世紀前後の朝鮮史は新羅を中心にして叙述し、後期新羅を「統一新羅」と称していた。

1960 年 10 月、総書記は従来の通説とはまったく見解を異にする学科論文『三国統一問題の再検討について』を発表した。

論文は当代の史料の分析にもとづき、新羅は外国勢力と結託して百済と高句麗を滅亡させたものの、朝鮮に一つの統一的な主権国家を樹立することはできなかった、百済と高句麗が滅亡した後、新羅は大同江以南の地域しか占めることができず、大同江以北の

旧高句麗領土には高句麗を継承した渤海が建ち、200 年以上も存在した、高句麗、百済、新羅が占めていた領土に相異なる二つの主権国家である渤海と新羅が存立したという事実は、新羅によって三国が統一されたとはいいがたいことを示している、そして三国統一をめざして力強い闘争を展開した国は高句麗であり、高句麗のそうした志向は 10 世紀初に創建された高麗(コリョ)によって継承されたのであり、高麗という国名も高句麗に由来しているとした。

したがって「われわれは客観的な史実にもとづいて、新羅による三国統一の問題を再検討しなければならない」と、総書記は結論づけた。

また、三国統一に関する新羅の支配層の見解はその好戦性にもとづく反動的なものであり、新羅が百済、高句麗とおこなった戦争は侵略的な戦争であった、金春秋(キムチュンチュ)や金庾信(キムユシン)など戦争を起こした新羅の支配層も戦争の性格によって評価すべきである、新羅が三国を統一できなかったという史実からして「統一新羅」という表現も改めるべきである、これまで歪曲されていた朝鮮の中世史を主体的立場に立って正しく解明しなければならない、と強調した。

「三国統一」問題に新たな検討を加え、ゆがめられた歴史を主体的立場から定立したことは一つの科学的発見であった。

このように総書記は、創造的な思索と精力的な探究によって、勉学で事大主義、教条主義を克服し、主体性を確立していった。

党と領袖に忠実な革命戦士として

総書記は、学生を党と領袖に忠実な共産主義的革命家に育てる

ための政治・思想教育と組織生活に深い関心を払った。

なによりもまず、学生が金日成主席への忠実性を革命的信念とするよう導いた。現代修正主義者による「個人崇拝」反対キャンペーンがいっそう悪辣に展開されていた 1960 年、モスクワで共産党・労働者党代表者会議の声明が発表されたとき、総書記は教員と学生に、労働者階級の領袖はただの個人ではなく、革命の最高頭脳であり統一団結の中心であると説いた。

また総書記は、革命伝統教育を多様な形式と方法で活発におこなって、すべての学生が主席の革命活動史を深く研究し体得するよう導いた。抗日革命闘争参加者の回想記『革命家にとって学習は第一の義務である』『決心してできないことはない』『一つに団結した力』『一合のはったい粉』などの会読会や研究発表会をそれぞれの実情に合わせておこない、学生のあいだで学習気風を確立し、困難克服と集団主義の精神、革命的同志愛が高く発揮されるようにした。

総書記は階級的教育にも大きな力を傾け、どのような逆境にあっても労働者階級の立場を堅持し、つねに革命的に生活するよう導いた。

総書記は 1961 年 7 月 22 日、朝鮮労働党に入党した。そして党生活を始めたその日から、模範的実践によって主席の革命思想にもとづく党員の思想・意志の統一と団結の強化に努めた。その結果、総書記のクラスでは同志的団結が強まり、勉学と組織生活に革新がもたらされ、2 重チョンリマ学級の栄誉を担った。1963 年 2 月 5 日付の『民主青年』紙は、学生のなかにいる総書記の写真を添えて丸 1 ページにわたる特集「われわれの時代の共産主義的

大学生の集団」を組んで、このニュースを伝えた。

躍動する現実のなかで

総書記は、青年学生を社会主義建設の現実のなかで鍛え、理論と実践を兼ね備えた有能な人材に育てることに深い関心を払い、自ら模範を示した。

1961 年 4 月下旬から 5 月上旬までの約 20 日間、総書記は平壌紡織機械製作所における生産実習に参加した。生産実習の目的は、技術工学の科目で学んだ知識を実践を通じて確かなものにし、旋盤やボール盤など一つ以上の工作機械を扱う技術・技能を修得し、工場の管理・運営方法と労働者階級の革命精神を体得することであった。

実習期間中、総書記は張り合いのある労働生活のなかで貴重な実地体験をした。

総書記は第 26 号旋盤の機械工の仕事を手伝い、かれを模範機械創造の先頭に立たせた。その過程で模範機械創造運動がはじまった。この運動は機械管理の主人としての労働者の自覚を高め、かれらの仕事ぶりに大きな変化をもたらした。この運動はその後「26 号旋盤に学ぶ忠誠の模範機械創造運動」に発展した。

総書記は労働者とわけへだてなく交わり、工場の大衆文化活動にもともに参加し、労働者の寮も訪ねた。

同年 5 月中旬から 6 月の初めにかけて、総書記は平壌市の臥山(ワサン)洞—龍城(リョンソン)間道路拡張工事に参加した。

工事が始まる日の朝、総書記は建設現場に出て学生建設者とと

もに鍬入れをした。最初の作業は、山の中腹から掘った土を沼沢地に運び、排水管を埋設するための溝掘り作業であった。総書記は、一番骨の折れるハンマーやもっこ担ぎなどの仕事を受け持った。学友たちが総書記の健康と負担を気づかって土を少なめに盛ろうとすると、もっこ担ぎは骨の折れる作業だが、こういう仕事をしてみてこそ、勤労者を骨の折れる労働から解放するために機械をつくらなければならないと考えるようになると言い、肩の棒がたわむほどに土を盛らせて休みなく走りつづけた。

ある日、主席の私邸を訪ねた大学の幹部が、ご子息の肩が腫れ、何回も皮がむけたと心配した。すると主席は総書記を頼もしげに見やり、若い時の苦労は黄金にもかえがたいものだ、これを機会に大いに鍛えるべきだ、と励ました。総書記は主席のこの言葉を肝に銘じ、率先垂範して学生建設者の士気を鼓舞した。

総書記は建設現場での政治活動や生産鼓舞、大衆文化活動にも深い関心を払い、速報や現場新聞、現場放送などの宣伝・鼓舞手段を利用して、学生建設者の熱意と勤労の成果を高めるようはからった。

建設現場への行き帰りはいつも乗客で混み合う市内バスを利用し、休憩時間には労働者と一緒に娯楽会にも参加し、昼食もともにした。また、激しく雨が降りしきるある日の夜半には、工事を支援している軍人や建設機材のことが気がかりで、雨ガッパを携えて建設現場に駆けつけた。ある時には、わずかな石炭でもそれを惜しむ周辺の住民たちに、工事現場に放置されていた石炭を持っていくよう便宜をはかった。

ある日、一人の老婆が立ち退き家屋の跡から出てくる石炭を掘

っていた。これを目にした総書記は老婆に丁寧に挨拶をし、石炭を切らしたのですかとやさしく尋ねた。そうではなく、大切な石炭をそのまま埋もらせてしまうのが惜しいからだという老婆の話を聞いた総書記は、深くうなずき、そういう点でも人民から学ぶべきだと言い、シャベルで石炭をすくって老婆のバケツについだ。少ししてその学生が誰であるかを知った老婆は、すっかり恐縮してわびた。すると総書記は「わたしも勤労人民の息子です」と謙遜し、たとえわずかな石炭でも無駄にすまいとするおばあさんの心がけにかえって力づけられたと言うのだった。

この道路拡張工事は 20 日余りで完了した。

生産実習と道路拡張工事の日々は、総書記が現実の中で実践能力を養い、革命的展開力と高邁な人民的風格を示した意義深い日々であった。

5　思想・理論活動

領袖論

総書記は大学在学の期間、不眠不休の思索と探究によって時代と革命における切実な問題を解明すべく思想・理論活動を精力的に展開し、チュチェの革命偉業を継承し完成するための貴重な思想・理論を提示した。その思想・理論活動は政治、経済、文化、軍事、国際問題など革命と建設の各分野にわたって幅広く深く展開され、学術的にみても政治経済学、哲学、党および国家・武力

建設理論、歴史学、語学・文学、そして物理学をはじめ自然科学の領域にまで及んだ。

総書記の思想・理論活動で核をなすのは、労働者階級の革命闘争における領袖の地位と役割に関する領袖論であった。当時、「個人崇拝」に反対するという口実のもとに、現代修正主義者が領袖の権威を失墜させ功績を否定しようと悪辣に策動していた状況下にあって、領袖をどのように理解するかということは早急に解決が待たれる重要な理論的・実践的問題であった。

この問題を解明するため総書記は、過去 100 余年間の共産主義運動において領袖の問題がどのように提起され論議されてきたかを具体的に考察した。100 余年にわたる国際共産主義運動史は、これまで誰も個人と領袖、大衆の相互関係の問題を正しく解明できなかったことを示していた。このような状況下で、革命闘争における領袖の地位と役割について正しい理解を示すことは、革命の運命にかかわるきわめて重大な問題として人々の関心を集めていた。この重大かつ切実な問題を自ら解明することを決心した総書記は、精力的な思想的・理論的探究を重ねて科学的な領袖論を創始した。

総書記はまず、革命闘争における労働者階級の領袖の地位の考察において、新たな観点から問題を設定した。

1960 年 12 月 5 日の談話『労働者階級の領袖は個人ではない』で、領袖を個人とみなし、誰でも領袖になれるというように領袖の問題を論議するのは理論的にまったく間違っているだけでなく、実践的にきわめて有害な見解であると指摘した。

総書記は、労働者階級の革命闘争がはじまる前までの先覚者と

労働者階級の領袖を同じ位置において扱うのは根本的に間違っているとし、以前の先覚者たちはある特定の階級や階層の代弁者か、一時的に運動の先頭に立った人物であり、したがってかれらは個人であるが、労働者階級をはじめ勤労人民大衆の領袖は単なる個人ではなく、人民大衆の要求と意思の最高体現者であり頭脳であると理路整然と論証した。そして、卓抜な領袖の指導を受けることのできない大衆は頭脳のない肉体と同じであり、頭脳と切り離された生命有機体を考えることができないように、大衆と領袖を乖離させることはできないという結論を下した。こうして、領袖は革命の中核であり、国と民族の偉大さはすなわち領袖の偉大さに直結しているという深い意味が明らかにされた。この思想は「領袖なき革命の勝利を考えるのは、太陽なき花を望むにひとしい」という総書記の名言に集約されている。

ついで総書記は、労働者階級の革命闘争における領袖の役割を解明した。

1963 年 6 月 12 日の談話『労働者階級の領袖は革命闘争で決定的な役割を果たす』をはじめ一連の談話で、国際共産主義運動の起源を開いたマルクスとエンゲルスの活動、ロシアの労働者階級の革命闘争を指導したレーニンの役割、朝鮮革命を勝利に導いた金日成主席の業績を詳細に分析し、労働者階級の領袖は革命闘争において決定的な役割を果たすと結論づけた。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「領袖は人民大衆を指導することによって、革命闘争で決定的な役割を果たします。領袖は大衆を革命思想で武装させて意識化し、かれらを革命組織に結束して組織化し、正しい戦略戦術的指

導によって勝利に導きます」

総書記は、領袖は人民大衆を意識化、組織化して革命の主人、自己の運命の開拓者にする人民の父となると説いた。

また、領袖にたいする人民大衆の立場と態度についても整然と解明した。

領袖に忠誠を尽くすのは、労働者階級をはじめ勤労人民大衆にのみ見られる気高い品性であるとし、人民大衆は領袖を限りなく尊敬して信頼し、領袖に自己の運命を全的に託するものであると述べた。

領袖は個人ではなく人民大衆の頭脳であるので「個人崇拝」という言葉は成り立たず、生命有機体がその頭脳を保護するように、共産主義者と人民はあらゆる階級の敵の攻撃と非難から領袖をしっかり守るべきであるというのが総書記の確固不動の立場であり、ゆるぎない信条であった。

総書記は領袖の問題とともに、領袖が切り開いた革命偉業を代を継いで継承し発展させるためには、領袖の後継者を正しく推戴しなければならないとし、後継者の問題についても貴重な指摘をした。

政権党内における現代修正主義は、指導者が死去した後、革命の裏切り者が党と国家の最高権力を握り、修正主義を強要することによって生じたものであるとし、かれらに党と政権が握られると革命の代が断たれ、労働者階級の党はその階級的性格を失い、変質すると指摘した。そして、領袖の後継者の問題を正しく解決することは、革命の代を継いでいくうえで根本問題となることを経験が示していると結論づけた。

領袖論を創始し、後継者問題の重要性を強調したことは、総書記

が大学時代に展開した思想・理論活動の精華である。

経済理論と哲学の研究を主体的に

総書記は政治経済学を専攻し、経済学を主体的な経済理論にするための思想・理論を探く探究した。

当時、経済学の研究においては、科学的・理論的問題が党の政策と朝鮮の現実にもとづいて体系化されていなかった。そのため政治経済学では、反帝反封建民主主義革命と過渡期の問題を取り上げるとき、まず資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の必然性を考察したうえで土地改革や重要産業国有化の問題について論じ、工業化と農業協同化の問題を取り上げるときには、工業化を実現したうえで農業の協同化を進めなければならないと論じていた。これは、反帝反封建民主主義革命の段階を経ずに直接社会主義革命を遂行する国々を念頭において展開した従来の理論にもとづいたものであり、先に生産力が発展し、それに応じて生産関係が変化発展するという唯物史観の原理を適用したものであった。

透徹したチュチェの眼識でこうした実態を見きわめた総書記は経済学部の教員たちに、政治経済学の研究においても朝鮮革命を中心に据えるべきではないか、金日成同志が示しているように工業化が実現しておらず、技術の発展水準が比較的低いとしても、農業の協同化が農民自身の生活上の要求として提起され、それを担う革命力量が準備されていれば、個人農経営の協同化は十分可能なはずだと述べた。そうして、朝鮮では技術改造に先立って経

営形態の改造をおこなうという金日成同志の独創的な農業協同化理論は普遍性をもつ真理であると理路整然と説いた。

　生産力よりも農民の生活上の要求と革命力量を協同化の決定的条件とみなした主席の思想は、人間を中心に据えて社会革命に関する理論を展開するチュチェの原理にもとづくものであった。

　ちょうどその頃、大安（テアン）電機工場党委員会拡大会議の指導にあたった主席は、大衆路線にもとづいた政治経済学の教科書をつくるよう指示した。主席の教示に接した教員、学者たちは、大衆路線にもとづく政治経済学という言葉自体が初めて耳にするものであったため、それがどうあるべきものか解答が得られず苦慮していた。

　こうした実態を知った総書記は、ある日この問題について教員たちと意見を交わした。

　総書記は、大衆路線にもとづく経済理論はすなわち党の大衆路線の要求を具現した経済理論であると、その本質を説き明かした。そうして、大衆路線にもとづく経済理論の重要な特徴は、経済建設において人民大衆の利益を擁護する立場を堅持することであり、経済課題の解決において人民大衆の力と知恵を汲み上げる方法に依拠することであると述べた。

　総書記は、大学時代の専攻学習と思想・理論活動を総括する卒業論文に主体的な経済理論を具現した。

　当時、大学の卒業論文は一般に、講義で取り扱われた基本的なカテゴリーと原理を正しく展開し、多少の実地資料をもって例証すればよいものとみなされていた。そのため教員たちは総書記に、社会主義経済法則の内容と正当性を論証する卒業論文を書くよう勧めた。そのとき総書記は、もちろん自立的民族経済建設や経済

建設の基本路線の問題について書くこともできるが、それについてはすでに各側面から論じられたものが多々あるので、自分は金日成同志が昌城（チャンソン）連席会議でおこなった演説の真髄と基本思想を明らかにし、社会主義建設における郡の位置と役割の問題を卒業論文で解明するつもりだと答えた。

論文のテーマを定めた総書記は、文献の研究と資料の収集に取り組んだ。農村問題と地方産業の問題に関する主席の著作と教示を系統的に研究するかたわら、各地方に出向いて実地資料を集め、中央の経済機関が総合した実態データを分析した。また、マルクス・レーニン主義創始者たちの理論の研究や社会主義諸国の農業政策の分析もおこなった。同時に、郡を農村における社会主義・共産主義建設の諸問題を解決する戦略的位置に据えて思索と分析を重ねる一方、社会主義建設における人民大衆の地位と役割を高める方途を模索した。

総書記はたゆまぬ研究と探究の末、卒業論文『社会主義建設における郡の位置と役割』を完成し、1964 年 3 月 18 日に発表した。

論文はつぎのように構成されている。

1　社会主義建設における地域的拠点設定の必要性

2　地方経済発展の総合的単位としての郡

3　都市と農村の経済的連係の拠点としての郡

総書記は論文の第一章で社会主義建設における地域的拠点設定の必要性を説き、つぎのように論じている。

「農村にたいする党と国家の統一的かつ総合的な指導を成功裏に実現するためには、一定の地域的拠点を設定し、それにもとづいて活動する必要がある。農村にたいする党と国家の統一的かつ

総合的な指導を実現するうえで、一定の地域的拠点を設定し、それにもとづいて活動しなければならないのは、農村の特性と関連している」

地域的拠点は党と国家の政策を農村に直接浸透させ、農業生産をはじめ地方の経済と文化を指導し発展させるのに有利な単位となり、政治、経済、文化の各分野で都市と農村を結びつける接触点、結節点とならなければならないとし、朝鮮においてそのような単位は郡であることを各側面から論証した。

第 2 章では、地方経済発展の総合的単位としての郡とその役割を高める方途について論じ、第 3 章では、社会主義建設において郡は地方経済発展の総合的単位となるだけでなく、都市と農村の経済的連係を実現する拠点となることを論証し、その役割を高める方途を具体的に示した。

また、地域的拠点としての郡の役割が高まる展望について論じ、社会主義・共産主義の遠い将来にも郡は都市と農村を結びつける経済的拠点、農村にたいする供給基地としての役割を果たすことになるであろうと確言した。

総書記は政治経済学を専攻しながらも、哲学の研究に力を傾けた。

当時、講義において、哲学は世界にたいする一般的見解を与え、自然と社会、人間の思惟発展のもっとも一般的な法則を研究する学問として扱われていた。そのため、哲学の使命は正しく位置づけられていなかった。総書記は、まさにここに問題があると考えた。

総書記は古今東西の哲学書を耽読し、さまざまな流派の哲学的見解を分析する過程で、哲学は長年その使命と目的を科学的に定立できないまま現在に至っていることを確認した。

19 世紀に入って、マルクス主義の創始者たちははじめて物質と意識の関係問題を哲学の根本問題として提起し、自然と社会、人間の思惟発展のもっとも一般的な合法則性を研究することによって、哲学を世界にたいする一般的見解を打ち立てる学問として位置づけた。マルクスは、哲学の使命は世界を変革することにあるとし、哲学は労働者階級の革命実践に奉仕すべきであることをはじめて明らかにした。これは、実践との関係において哲学の使命を正しく解明したものであった。

総書記は以前の哲学の遺産を検討、分析する一方、主席の哲学思想を体系的に深く研究する過程で、哲学の使命は人間の運命開拓の道を示すことにあることを明らかにした。認識活動や実践活動の担い手は人間であり、理論活動や実践活動はすべて人間の一定の目的を実現するためにおこなわれることを確認した。また、認識活動や実践活動は人間の運命を切り開くことを目的としてこそ正しく進められるとし、こうした見地からすると、哲学の使命は実践に奉仕することにあるというよりも、人間の運命開拓の道を示すことにあるというほうが正しいとした。

人類の哲学遺産を幅広く探究し、分析、総括したうえで、哲学の使命は人間の運命開拓に貢献することにあるとしたことは、総書記が大学時代に哲学の研究と発展に寄与した重要な功績の一つである。

現代帝国主義・修正主義の解剖

総書記は現代帝国主義の解明に心血を注いだ。

その解明にあたって、二つの問題に注意を払った。一つは、帝国主義にたいする研究の原点の問題であった。レーニンは自由競争が支配していた産業資本主義と対比しながら帝国主義について考察し、独占を経済的基礎とみなしたため、帝国主義を独占資本主義と称した。総書記は、現代に至って帝国主義は単なる独占ではなく、独占体および国家機構と密着した国家独占資本主義にもとづいていることに着眼した。

いま一つは、帝国主義諸国の相互関係における変化の問題であった。レーニンはドイツをはじめ西欧諸国を中心にして帝国主義を分析し、矛盾と葛藤のなかで並存し、互いに争い合うのが帝国主義諸国間の基本的な関係であるとした。

総書記は、第 2 次世界大戦後、帝国主義諸国がアメリカを頭目として互いに結託し同盟して、世界の革命勢力に対抗している事実に照らして、現代帝国主義にたいする研究を、アメリカを中心にそれと従属的に結びついている帝国主義全般を考察する視点で進めた。そして、自分の研究結果と情勢資料を読んで感じた見解にもとづき、アメリカ帝国主義の核脅迫政策に断固たる立場を取ることについて、帝国主義の植民地体制崩壊の不可避性について、また反共は帝国主義の侵略の思想的武器であり、アメリカ帝国主義は侵略と戦争の元凶であり、人種主義、植民地主義の牙城であることについて、教員や学生たちとしばしば意見を交わした。またセミナーにも参加し、侵略と略奪は帝国主義の変わらざる本性であることを、具体的な資料と論拠を示して説いた。

1962 年 1 月 15 日、総書記は論文『現代帝国主義の特徴と侵略的本性について』を発表した。

総書記はこの論文で、現代帝国主義の特徴を政治、経済、軍事の各側面から分析し、つぎのような結論を下している。

「…現代帝国主義は単に独占の支配にもとづくものではなく、国家独占資本主義を政治的・経済的基礎としており、旧植民地主義ではなく新植民地主義に依拠しており、並列的に存在しているのではなくアメリカ帝国主義を頭目にして従属的に再編成されており、成長しているのではなく急速に没落しつつ最後のあがきをしている帝国主義である」

ついで、帝国主義はこの世に出現して以来、侵略と略奪をたえず強行してきたが、現在の帝国主義の侵略手法には以前とは一連の違いが見られるとし、現代帝国主義者の二面戦術をあばいた。そして現代修正主義者は、帝国主義は侵略的ではない「理性的な」帝国主義に変わったとして、反帝闘争を放棄し、革命の道から退いていると指摘し、帝国主義を美化し、それへの幻想をふりまいている現代修正主義者の策動を徹底的に粉砕しなければならないと強調した。

総書記は、国際共産主義運動内に台頭した現代修正主義についても全面的な解剖をおこなった。

また、現代修正主義の発生とその反動的本質と弊害、現代修正主義との闘争で朝鮮労働党が堅持している革命的立場など、多くの問題に関して教員や学生たちとしばしば意見を交わした。

そして、現代修正主義の危険性は、大国、革命を遂行して久しい国の指導部に発生し、その国の党員と勤労者に修正主義的政策を組織的に押しつけているだけでなく、国際関係の発展にも大きな障害をもたらしていることにあるとし、それを具体的な資料を

示して分析した。それは、夏に籠いっぱいに盛られた桃のうちで、一番上の桃が一つ腐ると、その汁が流れ落ちて腐敗菌が下にしみこみ、籠の中の桃を全部腐らせてしまう現象と変わりないものだと述べた。

ついで現代修正主義の発生問題については、社会主義制度の樹立後も、打倒された搾取階級の残存分子の蠢動があり、人々の頭の中に古い思想の残滓がくすぶっている状況のもとで、帝国主義者の圧力に屈する者があらわれかねないとした。

また、現代修正主義者が領袖の指導的権威を傷つけていることについて指摘し、その反動的本質は革命闘争と建設事業にたいする領袖の指導を否認することにあるとし、政治、経済、文化の各分野で領袖の指導を否認する策動が顕在化していることについて余すところなく暴露した。

深い分析と強い説得力により、総書記の論旨は、国際的にもっとも複雑かつ切実な問題にたいする正しい見解をうち立て、修正主義に反対する朝鮮労働党の原則的立場を堅持するうえで貴重な思想的・理論的指針となった。

6　現地指導の主席に随行して

金正日総書記は、全国津々浦々を休みなく現地指導する金日成主席にしばしば随行し、その指導を補佐した。その過程で、党活動、経済・文化建設、軍事活動などを深く把握した。

そうした総書記の補佐活動で重要な位置を占めるのは、平安北

道の昌城郡と朔州（サクチュ）郡、両江道地区における活動であった。

1962 年 7 月下旬、主席は、山間地帯の経済を発展させて人民生活を向上させるモデルケースとした昌城郡の経験を全国に一般化するため、現地で地方の党および経済活動家連席会議の準備を進めていた。

そのとき、総書記は会議の参加者が見学することになっている朔州郡へ赴き、郡の実態を調査した。朔州郡では、主席が党中央委員会 1958 年 6 月総会で示した中央直轄工業と地方産業を並進させる方針にしたがい、織物工場やトウモロコシ加工工場など多くの地方産業工場を建設して、日用品や食料品の需要を郡自体で充足させるとともに、山間地帯の特性を生かして農業を多角的に発展させ、農業生産の増大をはかり、農民の生活水準を系統的に高めていた。

土用の暑さにもかかわらず、総書記は朔州織物工場やトウモロコシ加工工場、邑農業協同組合などに出向き、生産状況や設備の状態、勤労者の技術・技能水準や暮らし向きなどを詳しく調べ、その実態データを総合し分析した。トウモロコシ加工工場を訪れた総書記は、食用油の問題を自力で解決するようにという主席の教えにしたがい、搾油作業班を新設して実収率を高め、人民に多くの食用油を供給していることに深い関心を寄せた。

数日にわたって朔州郡の経済状態を調査、分析した総書記は『地方経済の発展に関するわが党の方針の正当性』と題する論文を書き上げ、主席に提出した。

論文で総書記は、朔州郡の経験は第一に、大衆に働きかけて

地方の潜在力を動員する方法で生産を増やすという党の地方産業建設方針が全的に正しいということ、第二に、地方産業は、政治・経済・文化建設の地域的拠点である郡を単位にして発展させるのが合理的であること、第三に、穀物生産を増大させるとともに、畜産、野菜、工芸作物の生産を地域的特性に応じて発展させれば、住民の食糧と地方産業の原料を郡自体でまかなえることを示しているとし、それを資料にもとづいて分析、論証した。

論文は、地方の経済をすみやかに発展させるために労苦を重ねる主席にとって大きな助けとなった。

総書記は 1963 年 8 月初旬から中旬にかけて、咸鏡（ハムギョン）南道と両江道を現地指導する主席に随行した。

主席とともに咸鏡南道北青（プクチョン）郡、徳城（トクソン）郡を経て両江道豊山（プンサン）郡を訪れた総書記は、山間部の住民の食生活に深い関心を払い、邑総合商店に立ち寄ってはまず、しょう油、みその供給状況を調べた。そしてみその味見までして、まだみその質がよくないことを主席に話した。主席は、人民の食生活においてしょう油、みその質を高めることはきわめて重要であるとし、食品工場で製品の質を高める対策を講じた。

両江道一帯の山間部の農村と主要工業地区を視察した後、1963 年 8 月に総書記は主席とともに白頭山に登った。

総書記は白頭山の雄姿を俯瞰しながら、白頭山は昔から祖宗の山として名高いが、こんにち金日成同志の尊名と革命業績が秘められているため、さらに光り輝いていると述べた。

ついで恵山（ヘサン）市を訪れた総書記は、主席臨席のもとにおこなわれ

る祖国解放 18 周年記念恵山市祝賀行事に参加した。

総書記は主席を補佐して、このほかにも革命と建設の多くの分野に不滅の足跡を残した。

二　1964 年 4 月～1974 年 1 月

1　党中央委員会入りして

金正日総書記は 1964 年 4 月に朝鮮労働党中央委員会入りして 6 月 19 日から活動を開始した。

総書記は、朝鮮革命の参謀部である朝鮮労働党中央委員会で金日成主席を身近に仰いで活動することを崇高な使命とし、革命家の本分とした。

党中央委員会で活動を開始した総書記は、幹部たちに、金日成同志の意を体して党中央委員会で活動することになって感慨無量だが、さらに責任の重さを感ずる、朝鮮労働党は金日成同志が創立し指導する党であり、党中央委員会は金日成同志の思想と指導を全党と全社会に具現していく党の参謀部である、みなともに党を強化する礎石となり、真の党活動家になろうと語った。

主席の高い志を体して、チュチェの革命偉業をりっぱに継承し達成しようとする総書記の意志はこのように確固たるものであった。

総書記は党の事業と活動の基本を定立することに第一義的な力を注いだ。

党活動の基本を定立することは、当時の党活動の実態からして切実な問題となっていた。それまで党の事業と活動においてはその基本が不明確な点が少なくなかった。こうした事実は、これを明確にしなければ党の指導的役割を高めることができないことを

示していた。

　このような実状を見きわめた総書記は、朝鮮労働党の本質を明示し、党活動の基本について科学的な解明を与えた。

　金正日総書記はつぎのように述べている。

　「わが党を永遠に金日成同志の党に強化、発展させるためには党活動の基本を定立しなければなりません。わが党の事業と活動の基本は、全党に金日成同志の思想体系を確立することです。全党に金日成同志の思想体系を確立することは、わが党が存在し活動する全期間にわたって恒常的に堅持すべきことです。したがって、党のすべての事業と活動は、金日成同志の思想体系を確立し、金日成同志により忠実にしたがい、金日成同志の教示をあくまで実行することに集中されなければなりません」

　総書記は党活動の基本を定立するために、まず党中央委員会の各部署と活動家が主席に忠節を尽くす確固たる立場と姿勢を持し、主席の教示の実行に中心をおいてこれにすべての活動を服従させ、主席の教えを指針として下部の党組織を統轄指導する活動秩序を確立することに努めた。また、党中央委員会の部署だけでなく中央と地方の各級党組織およびすべての党活動家が党活動で基本をしっかりとらえて活動するよう導いた。こうしてそのときから、全党に主席の教示の伝達と、その実行対策を講ずる活動体系と秩序が確立されるようになった。

　その結果、党活動を主席の思想と意図どおり進め、党内で異質な要素を一掃し、党の唯一思想体系を確立する活動を強力に推進できる基礎が築かれた。

2　経済・国防並進路線の貫徹へ

革命的大高揚の火を点じて

経済建設と国防建設を促進することは、1960 年代の複雑かつ緊迫した情勢からしてきわめて重要な問題として提起された。

金日成主席は、1966 年 10 月の党代表者会議で、当面の情勢に対処して経済建設と国防建設を並進させる戦略的路線を堅持することを改めて明らかにし、その翌年の党中央委員会第 4 期第 16 回総会で、新たな革命的大高揚を起こすべく方針をうちだした。

金正日総書記は主席の意を体して、経済建設と国防建設の各分野で革新を起こし、社会主義建設に革命的大高揚をもたらした。

まず、各党組織が組織・政治活動を活発にくりひろげて、党員と勤労者を党の路線と政策の貫徹に奮起させるようにする一方、自ら主要生産部門に出向いて大高揚の火を点じた。

1967 年 7 月、主席に随行して降仙（カンソン）製鋼所を訪れた総書記は、製鋼所の幹部に、主席がこの製鋼所の労働者を再び革命的大高揚の先頭に立たせるために来たことを告げ、降仙の労働者が革命的大高揚の先頭に立ってチョンリマ作業班運動〔6〕先駆者の栄誉をひきつづき担っていくよう励ました。

ついで同年 8 月には、龍城機械工場に出向き、当地の労働者が大高揚の先鋒に立つよう導いた。そのときプレス職場では 3000 トンプレスが稼働中だった。それを見守っていた総書記は、まわりの幹部に、6000 トンプレスの製作準備状況を尋ねた。6000 トンプレス

の製作は、3000 トンプレスの製作経験をもつこの工場に主席が与えた重要な課題であった。

幹部から話を聞いた総書記は、龍城機械工場の労働者は 8 メートルターニングミルや 3000 トンプレスをつくった英雄的な労働者だ、この工場の労働者にはそれだけの力がある、主席はこの工場の労働者を信頼していつも難しい課題を任せている、一日も早く 6000 トンプレスをつくって主席に喜んでもらうべきだと述べ、大胆に取り組んで製作するよう励ました。

その後も総書記は、全国各地の工場、企業所、それに農村へと現地指導をつづけた。そうした日々、工業部門の指導にあたっては工業の自立性を強め、技術改造をおし進めて、生産工程の機械化、半オートメ化、オートメ化を実現するようはからい、またテアン（大安）の事業体系が効力を発揮できるよう導いた。

農村に出向いては、農業生産にたいする技術指導を強めて、郡協同農場経営委員会を基本とする新たな農業指導体系の優越性を十分に発揮させ、農業生産で革新を起こし、農業を多角的に発展させ、農村技術革命を強力におし進めるよう促した。

総書記の賢明な指導は、工業と農業をはじめ人民経済各部門に一大高揚をもたらす推進力となった。

社会主義経済建設に一大革新をもたらした革命的大高揚によって、社会主義的工業化の歴史的課題が実現され、かつて現代技術文明からはるかに立ち後れていた朝鮮は社会主義工業国へと飛躍した。

全国土を難攻不落の要塞に

総書記は、経済建設と国防建設の並進路線を貫徹して国防力を強化する事業を精力的に指導した。まず自衛的軍事路線の貫徹を第一義とし、全軍幹部化、全軍現代化を推進して人民軍を一当百の革命武力に強化することに力を注いだ。

総書記は全軍幹部化の方針を貫徹するため、人民軍の幹部陣容をうちかため、軍人を政治的、思想的に武装させると同時に、人民軍を軍事技術的に強化する事業を具体的に指導した。

巧みな戦術と百発百中の射撃術、強壮な体力を備えることに重点をおいて軍事教練をおこなわせ、軍種、兵種、専門兵科別の訓練目標を明示し、それを国の実情と現代戦の要求、朝鮮での戦争経験にもとづいて進めるよう導いた。

ある空軍部隊を訪ねては、幹部らに、飛行訓練を強化し、いかなる状況のもとでも戦闘任務をりっぱに遂行できるよう飛行士を準備させるべきだと説いた。また、ある人民軍区分隊の政治担当副中隊長に会っては、政治担当副中隊長は中隊内の軍人を主席の革命戦士に育て、中隊に負わされた任務を政治的に保障するためにたたかう職業革命家、政治活動家だ、軍人のなかに軍事指揮官の号令がひびき渡るように、政治担当副中隊長の声が力強くひびき渡るようにすべきだと、政治担当副中隊長の役割を位置づけた。

また、ある沿岸砲中隊を視察しては、海岸線の長い朝鮮において沿岸砲兵の役割は重要であるとし、とくに内陸に通じる関門の守備に当たるその任務は重大であり、内陸に通じる道はみな平壌

につながっているので、海から攻め寄せる敵はすべて海上で撃滅し、敵の愚かな侵略企図をそのつど粉砕すべく具体的な方途を示した。

総書記は人民軍の装備の改善に深い関心を払い、朝鮮の実情と朝鮮人の体質に適した強力な現代兵器を生産するよう軍需工業部門の事業を指導した。

総書記はまた、自衛的軍事路線を貫徹するため、全人民武装化、全国土要塞化を実現して全人民的防衛体制を確立し、全国土を「小汪清（抗日武装闘争期の遊撃根拠地の一つ）」のように築いていった。

1967 年 1 月のある日、幹部たちと席をともにした総書記は、敵の不意の侵攻がありうるということを一時も忘れず、即時反撃を加えられるよう万端の戦闘動員態勢を整えるべきだとし、世界戦争史の深刻な教訓について話した。強大な軍事力を誇る国であっても、常時戦闘動員態勢を堅持せずにいて、不意の攻撃を受けると一夜にしてもろく崩壊してしまう場合が少なくないと、その実例を上げた。それとは逆に、世界の戦争史には軍人と人民が一致団結して決戦をくりひろげ、優勢な敵を打ち破った事実が少なくない、困難な抗日革命闘争の時期、金日成同志の指揮による小汪清遊撃根拠地防衛戦は全人民的防衛体制の模範であった、その戦闘は、遊撃隊と人民が一心同体となって敵を撃滅し勝利をおさめた全人民的防衛戦だった、全人民を武装させ全国土を要塞化して、全国土を小汪清遊撃根拠地のようにするのが金日成同志の構想であり自分の決意だ、と語った。

総書記は全国土の要塞化を推進する事業にも深く関心を払った。

西海岸の防衛において戦略戦術的にきわめて重要な位置にある一区分隊の陣地を視察した総書記は、西海岸防衛の軍事的意義を強調し、防衛陣をうちかため、戦闘準備に万全を期すべく課題を与え、またある高地の軍事戦略戦術的意義をおしはかって強固な陣地を構築するよう指示した。ついで東海岸各部隊の陣地構築状態を具体的に調べ、各種の遮断物と組み合わさった陣地設備の完備と、さまざまな兵器を組み合わせた火器配備に関する具体的な方途を示し、少数の兵力で広い地域を防御できるよう、陣地をすべて要塞化する対策を講じた。

全軍幹部化、全軍現代化、全人民武装化、全国土要塞化の推進により、人民軍は一当百の武力に強化され、全国土は金城鉄壁の要塞にうちかためられた。こうして、1968 年 1 月の武装情報収集艦「プエブロ」号事件〔7〕、1969 年 4 月の大型偵察機「EC-121」事件〔8〕のときにも、朝鮮人民は断固たる革命的立場を固守することができた。

3　主席の対外活動を補佐して

1960 年代に入り、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの新興独立諸国は、現代の強力な革命勢力をなして急速に国際舞台に進出していた。

金正日総書記はこれらの国との活動に大きな力を注いだ。総書記は 1965 年 4 月、バンドン会議 10 周年記念行事を契機にインドネシアを訪問する金日成主席の対外活動を補佐して行をともにした。

主席の対外活動スケジュールはつまっていた。主席はジャカルタに到着した翌日、首都から 200 キロ離れたバンドンへ行って一連の行事に参加し、その翌日には、バンドンから 160 キロほど離れたボゴール宮殿での行事に参加しなければならなかった。

総書記は、右翼勢力の影響が強いバンドンへ向かうとき、主席の警護に万全を期すべく綿密な対策を講じ、自身は車で先回りし、空港で主席を迎えた。これを知ったスカルノ大統領は、金日成首相は世界的に有名な偉人であるから、配下の「若い司令官」も偉人に違いない、「満点の行事」にしてくれたと感嘆し、自ら主席の警護の指揮にあたった。主席が大統領の誠意に謝意を表すると、スカルノは、その謝意は貴国の「若い司令官」が受けるべきだと言い、「若い司令官」の正式の職責を尋ねた。

主席は、かれはわたしの警護を担当している責任副官だ、かれの前ではわたしも勝手な行動ができないと言って呵々と笑った。

主席がアリ・アルハム社会科学院で『朝鮮民主主義人民共和国における社会主義建設と南朝鮮革命について』と題する講義をおこなったその日、スカルノ大統領のための答礼宴会が催された。そのときその国の要人たちが非同盟運動の発展にかかわる重要な問題について総書記に質問した。総書記はそれに答えて、一にも、二にも、三にも重要なのは団結を強めることだ、発展途上国がかたく団結すれば、帝国主義者に集団的な反撃を加え、血をもってかちとった民族の尊厳と自主権を固守することができる、発展途上国が経済的、技術的に交流し協力し合うならば、帝国主義者の経済封鎖を打ち破り、先進工業国に劣らぬ暮らしができると説いた。

滞在期間中、総書記は政界、社会各界人士と対面するたびに、

世界の動きについて、非同盟運動の正当性と不敗性について話し、かれらを感服させた。

インドネシア訪問期間に、スカルノ大統領は 150 年近い歴史と一万余種の植物を誇るボゴール植物園に主席を案内し、ある植物学者が新しく育種した珍重な花に主席の尊名を冠して「金日成花」と名付けることを告げ、今日世界でいちばん尊敬されている指導者は金日成閣下だと称賛した。インドネシア訪問を終えて帰国した総書記は、1965 年 5 月 9 日に対外部門の活動家を前にして主席のインドネシア訪問の意義について話し、以後、世界各国との友好・団結のため努力すべきだと強調した。

総書記はこの時期、激烈をきわめていたベトナム、ラオス、カンボジアなどアジア諸国人民の反帝・反米闘争、アメリカ帝国主義とイスラエル膨張主義者とたたかうアラブ諸国人民、民族解放をめざしてたたかうアフリカ諸国人民、キューバをはじめラテンアメリカ諸国人民の反米闘争にたいする国際的連帯の強化に大きな力を注いだ。

総書記のエネルギッシュな活動によって、対外活動分野には新たな転換がもたらされるようになった。

4　文学・芸術革命

映画革命

金正日総書記は幼いころから、周囲の事象を芸術的に感受す

る秀でた美意識と幻想力で人々を驚かせた。学生時代に書いた何編かの詩は人々を驚嘆させ、絵画にも長けていて美術展覧会に出品されたこともある。音楽にはさらに鋭敏で、演奏テクニックに長け、不思議に思えるほど音感が鋭かった。

総書記の芸術的天性は、古今東西の文学・芸術作品を多読し、党の文学・芸術建設を指導する過程でさらに磨き上げられ開花した。

総書記は、党中央委員会での活動の初期に、文学・芸術活動に深い関心を向けた。

1964 年 12 月 8 日に朝鮮劇映画撮影所の指導にあたった金日成主席は、現地で開かれた党中央委員会政治委員会拡大会議で、革命教育、階級的教育に寄与する革命的映画をより多くつくる課題を示した。この日、政治委員会は、革命的映画の創作に新たな転換をもたらすため、総書記にこの部門の指導を委任した。

総書記は劇映画の創作を指導する過程で、時代の要請と人民大衆の志向にかなった朝鮮式の新しい文学・芸術、真のチュチェの文学・芸術の建設をめざす文学・芸術革命を起こす構想をあたためた。

文学・芸術革命を起こすことは、主体的で革命的な文学・芸術を建設するための必須の要求であった。主体的で革命的な文学・芸術であってこそ、勤労者をチュチェ型の革命家に育て、かれらの革命的熱意をかきたて、日増しに高まる人民大衆の文化的・情操的要求を充足させることができるのであった。文学・芸術革命を起こすことはまた、この分野の実情から提起される切実な要求でもあった。当時国際舞台では、帝国主義者の思想的・文化的浸

透と「自由化」を唱える修正主義者の策動によって文学・芸術が混迷に陥り、朝鮮でも反党・反革命分子の思想的毒素がはなはだしく禍し、文学・芸術が発展する革命の要請に応えられない状態にあった。

総書記は、これらの実情を洞察し、文学・芸術を抜本的に革新する構想をあたためた。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「われわれは文学・芸術部門で、時代の流れに逆行するさまざまな思潮の影響を防ぎ、革命的文学・芸術作品の創作で新たな革命を起こすべきです」

この構想を実現するため、文学・芸術の担い手である作家、芸術家を政治的、思想的に準備させることを第一義とし、かれらにたいするチュチェ思想教育に大きな力を注いだ。とくに、主席の主体的文芸思想と理論を体得させるため、従来の芸術総括会議制度をなくし、主席の文芸思想研究会を定例化した。また、作家、芸術家を組織生活を通じて鍛えさせ、創作の過程そのものが革命化の過程となるようにして、かれらのあらゆる古い思想の残滓と生活因習を一掃するよう導いた。

総書記は文学・芸術革命の手„　めとして、抗日革命闘争期に主席が創作した作品を映画や小説、歌劇、演劇として再現する作業にとりかかった。

まず映画革命を優先させて、文学・芸術革命の突破口を開いた。

総書記は白頭山創作団を組織し 1968 年 4 月には、主席が抗日革命闘争期に創作した演劇『血の海』を映画化する課題を示した。そしてこの映画化においては原作に忠実であること、映画芸術の

ジャンル上の特性を正しく生かすことが根本原則であるとした。そして主席が『血の海』を創作することになった動機と意図、当時の環境、作品の種子と思想的・芸術的特性、認識的・教育的意義を創作スタッフに詳しく教え、毎日のように映画人の創作活動を指導した。創作スタッフとともに夜を徹してシナリオや演出台本に手を加え、映画音楽をすべて名曲に仕上げた。またスタジオにたびたび出向き、演出や俳優の演技、映画的形象、撮影など映画の各シーンを高いレベルで仕上げるよう具体的に指導した。日本侵略軍の討伐の場面を撮影するときはロケ地に出向き、オープンセットの小屋が燃え上がる黒煙のなかで創作活動を指導した。

120 余回にわたる総書記の指導により、劇映画『血の海』は、原作に盛り込まれている深奥な思想的・芸術的内容をりっぱに再現した。

『ある自衛団員の運命』を映画化するときにも、総書記は作品の思想的・芸術的特性を創作スタッフ全員に把握させ、撮影が始まると両江道のロケ地に出向いて創作活動を指導した。その結果、この映画は 40 日間で完成された。

『花を売る乙女』の映画化にさいしてもこのような指導があって、第 18 回カルロビバリ国際映画祭で特賞と特等メダルを受賞した。

一方、社会主義の現実を反映した映画創作でも革新が起こり、1970 年の 1 年間だけでも、人民賞受賞作品『花咲く村』をはじめ数十本の現実的テーマをもつ映画が成功裏に製作された。

総書記は 1973 年 4 月、映画革命を導く日々の成果と経験を理論的に一般化し集大成した『映画芸術論』を発表し、文芸理論の

発展に大きく貢献した。『映画芸術論』は、「生活と文学」「映画と演出」「性格と俳優」「影像と撮影」「画面と美術」「場面と音楽」「芸術と創作」「創作と指導」など八つの章からなっている。

総書記はこの著作で、共産主義的人間学に関する独創的な理論を提示し、チュチェ文学の本質についてつぎのように述べている。

「われわれの求める人間学は自主性に関する問題、自主的な人間に関する問題をとりあげ、新しい時代の真の人間の典型を創造して、全社会をチュチェの要求に即して改造するのに寄与する文学である」

共産主義人間学の根本的要求は、文学作品においてつねに人々の政治的生命に関する問題をとりあげ、それを解明していくことであり、自主的な人間の典型をりっぱに描き出す基本的方途は、人民のなかから出た共産主義的人間を典型とし、その典型的な生活を克明に細部化して描き出すことである。文学は単に人間生活を描き、形象の中心に人間を押し立てるべきだとする、かつての人間学と根本的に区別される共産主義的人間学、チュチェの人間学の本質的特性はここにある。

総書記が示した種子に関する理論は、チュチェの創作論の真髄をなす。文学・芸術作品における種子とは、作品の核心として作家がとりあげる基本問題があり、形象の要素が根を下ろす下地のある生活の思想的かなめであり、モチーフとテーマ、思想を有機的な連関のなかで一つに統一させる作品の基礎であり核心である。

総書記は同著作で、文学・芸術作品の創作における速度戦に関する理論を示した。文学・芸術作品において速度戦とは、作家、

芸術家の政治的自覚と創作的熱意を最大限に引き出して、最短期間内に思想性、芸術性に富んだ秀作を成功裏につくりださせる革命的な創作原則であり、創作戦闘の基本形式である。

この著作にはその他にも、革命的大作の本質に関する思想と理論、創作過程を作家、芸術家の革命化、労働者階級化の過程とすべきだとする理論、革命的な創作システムと創作指導システムに関する理論、主体的な映画演出論、俳優論をはじめ、撮影、音楽、美術などチュチェの文学・芸術建設で提起される重要な理論的・実践的問題が全面的に解明されている。

5 大革命歌劇

総書記は映画革命につづいて、1969 年 9 月に歌劇革命を起こす方針を示した。

従来の歌劇は、朝鮮人民の思想・感情や志向、要求などを正しく反映していなかった。古い思想に毒されていた一部の創作家、芸術家は歌劇の現代化に反対していた。一方、事大主義、教条主義に毒されていた人たちは、歌劇なるものは西洋式のものになるのが当然だとし、西洋歌劇の形式をそのままままねようとした。

従来の歌劇の古い殻を打ち破り、新しい歌劇をつくりだす歌劇革命は、現代にいたってこれ以上引き延ばすことのできない切実な要求となっていた。

早くから歌劇芸術の制約性を見ぬき、それを克服する方途を模索してきた総書記は、歌劇革命の構想をあたため、1971 年 3 月下旬に『血の海』を歌劇にする過程を通じて歌劇革命を起こすよう

導いた。

　総書記は、革命的内容と民族的形式にもとづく歌劇芸術の現代化、大衆化、歌の有節歌謡化、パンチャン（傍唱）の導入、ドラマと舞踊の密着、流動式立体舞台の創造など歌劇革命の基本的課題と創作原則を提示した。そして『血の海』の深奥な思想的・芸術的内容を遜色なく歌劇に再現してその台本をつくるよう指導し、それが完成されると優秀な作曲家、ソリスト、舞台美術家、振り付け師、指揮者、演出家など創作家、芸術家を発奮させて新しい形式の歌劇創作を促した。

　総書記の創造的思索は、従来の歌劇の基本的表現手段であるアリアやレチタティーボをなくし、人民的かつ大衆的でまろやかな有節歌謡で一貫させることに注がれた。

　ある日、歌劇の創作でわき立っていた平壌大劇場を訪れた総書記は、これから自分も創作に参加すると告げ、歌の有節化のために苦心している創作スタッフの着想と形象力を啓発した。

　総書記は、せりふにそのまま節をつけて歌おうとするのは旧式だとし、せりふの核心をつかんで有節化し、それに節をつける方途を示した。そして歌詞を改作し、俳優に歌をうたわせ、演奏者に演奏をさせながら、多くの歌を有節化し、完成させた。こうしてアリアやレチタティーボは姿を消し、人間の情操生活の動きや人物の性格を豊富かつ多様に描き、作品のドラマ性を生かす新しい形式の有節歌謡化がりっぱに実現した。

　歌劇にパンチャンを取り入れてその芸術的効果を高めたことも、総書記による新しい着想であり、その創造的探求の結実であった。

　総書記は、新しい音楽形式であるパンチャンを取り入れ、それ

が主人公の内面世界を吐露する代弁者に、舞台にくりひろげられる事件を教える仲立ち、ガイド、歴史的代弁者、社会の壮大な流れを説明する解説者となるようにした。このパンチャンの導入により、舞台上の歌だけでは描写できなかった人物の内面世界を多角的に、克明に描き出せるようになり、種子と主題思想を音楽的にいっそう生き生きと示すことができるようになった。

総書記は、歌劇における舞踊を、人物の思想・感情と生活、それにテーマと思想を示し、舞台をバラエティーに富んだものにする必須の表現手段とし、舞台美術を立体的な流動式の新しい舞台芸術にするなど、ユニークで斬新な歌劇の表現手段を創造した。

その結果、有節歌謡とパンチャン、舞踊と舞台美術を取り入れた革命歌劇は、わずか 4 か月のあいだに完成された。

1971 年 7 月 17 日、初演の幕をあげた革命歌劇『血の海』を観覧した金日成主席は、これこそが朝鮮式の歌劇だと高く評価した。

総書記は、革命歌劇『血の海』をモデルにして、新しい革命歌劇の創造に取り組んだ。そして一年足らずのあいだに『花を売る乙女』を舞台に乗せ、ついで『党の真の娘』『密林よ語れ』『金剛山の歌』などの革命歌劇を創作するという成果をおさめた。

総書記は映画革命、歌劇革命での成果にもとづき、文学、音楽、舞踊、美術、サーカスなど文学・芸術の各部門を全面的に開花させた。こうして朝鮮は、1970 年代にチュチェ芸術の最盛期を迎えることになった。

総書記が文学・芸術革命の過程で編成し、強力な芸術集団に育てあげた万寿台芸術団、ピバダ歌劇団などの芸術団と朝鮮人民軍協奏団は、革命歌劇『血の海』『花を売る乙女』や音楽・舞踊総

合公演などをもって海外公演をおこない、センセーションを起こした。

5　崇高な使命感

金正日総書記は、金日成主席の生誕 60 周年を迎え、祖国と人民の前に不滅の功績を積み上げた主席の偉大さと恩愛をよく知り、代を継いで主席の偉業を継承し達成するという崇高な使命感を党員と勤労者に抱かせることに専心した。

1971 年 8 月、総書記は白頭山に登ったとき、主席の一生についてつぎのように語った。

「世界に金日成同志のように長きにわたって厳しい革命の道を歩んだ人はいません。

あと数カ月すれば、金日成同志は還暦を迎えることになります。これからは、金日成同志が切り開いた革命偉業をわれわれが担っていかなければなりません」

総書記は主席の誕生日を意義深く盛大に迎えるため、党員と勤労者を新たな革命的高揚へと奮起させるかたわら、平壌に主席の銅像を建立する事業を細やかに指導した。

総書記は幹部たちに、これは主席の高い権威を守り擁護することであり、主席の偉大さと英姿を末長く伝えるための事業だ、それゆえ主席の銅像は、卓越した領袖としての偉大さと人民の父としての慈愛にみちた姿が胸に迫るように形象化し、最大の誠意を尽くして壮大かつ丁重に建立すべきだとし、銅像建立の過程がと

りもなおさず党員と勤労者の忠誠心を高める過程となるよう導いた。

また朝鮮革命博物館を新しく整備することにも力を入れるべきだとし、主席の革命活動史を科学的史料によって実証できる遺物をさらに探し出し、それを考証して展示するようはからった。そして革命戦跡と革命史跡、各道の「金日成同志革命事績館」をりっぱに整備し、党の唯一思想教育の拠点としての役割を円滑に果たせるようにした。

また「金日成勲章」と「金日成賞」の制定や主席の親筆記名入りの時計表彰制の実施を発議し、主席の肖像バッジをすべての党員と勤労者に佩用させるようにした。

それに頌歌『金日成主席の万年長寿を祈ります』の創作、普及、全国の学生、子供への主席の贈り物の伝達、祝賀報告会、記念講演会、科学討論会、全国芸術祭、夜会、マスゲームなどさまざまな祝賀行事を催して、主席の生誕 60 周年を祝日の雰囲気で迎えるようにした。

総書記はまた、4 月の祝日を契機に、新しい世代の軍事指揮官たちに、チュチェの革命偉業を代々継承すべく使命感を抱かせるよう格別の関心を払った。

4 月 15 日を祝った後のある日、総書記は主席と席をともにした機会に、朝鮮人民革命軍創建記念日に際しての行事の準備状況を報告した後、いま抗日の老闘士は、今回の 4・25 建軍節のとき主席を迎えて旧懐の情を分かち合うことを強く希望している、もしその機会があれば新しく育った各軍種、兵種の司令官も同席させてはと進言した。

主席はこれを受け、仕事に追われどおしだったので、身近にいながら歓談する機会がなかった、今日はちょうど時間が割けるから抗日革命闘士と新しい世代の軍事指揮官を呼んで一緒に 1 日を過ごすことにしようと言った。こうしてその日、かれらは主席に呼ばれることになった。

総書記は主席とともに、抗日革命闘士、新しい世代の各軍種、兵種司令官をともなって万景台を訪れた。

生家の庭に立った主席は、過ぎ去った歳月を感慨深く振り返り、山中で戦って倒れた戦士の名を一人ひとり思い起こし、惜しい戦友たちを失った、大事な戦友たちがあまりにも早く世を去ったと残念がった。そして抗日闘士に、先立った戦友たちのことを思っても、最後まで革命に尽くし、また革命の継承者もりっぱに育てようと、切々と訴えた。そして新しい世代の将官たちには、きみたちはわれわれが切り開き 40 年有余つづけてきた革命を継承し、われわれの血筋を継いでいく交替者だ、と信頼を寄せた。

総書記は感激したかれらに、われわれは代を継いでチュチェの革命偉業を完遂し、主席の厚い信頼と期待に応えなければならない、抗日革命烈士のように、主席を高く仰ぎ、代を継いで忠誠を尽くさなければならないと語った。

その年の 5 月末に、総書記は白頭山に登った。

しばし白頭山の全景を眺めていた総書記は、同行の幹部たちに、永遠に白頭の革命精神をもって生き、たたかおう、これはきょう白頭山に登ってさらにかたくかためたわたしの決意であり、みなさんに話したかったことだと語った。この言葉には、朝鮮労働党の革命伝統を継承して革命の実践に具現し、主席が白頭山で切り

開いたチュチェの革命偉業を代々継承し完遂せんとする総書記の崇高な使命感、確固たる意志がこめられていた。

6　3 大技術革命ののろし

金正日総書記は、朝鮮労働党第 5 回大会で示された重労働と軽労働、工業労働と農業労働の差をいちだんと縮め、女性を家事の重い負担から解放するという 3 大技術革命の課題を遂行するためエネルギッシュに活動した。

総書記は、3 大技術革命の重要な内容をなす重労働と軽労働の差をいちだんと縮めるキーポイントを、重労働部門の生産工程のオートメ化に求め、これに専念した。

1973 年 1 月の党中央委員会責任幹部との談話『生産をオートメ化し、勤労者を骨のおれる労働から解放しよう』で、黄海製鉄所をオートメ化のモデルとして整え、その経験を全国に一般化して、人民経済各部門でオートメ化を促進する構想を示した。

そして、われわれにオートメ化の経験はないが、必ず自力更生の原則で、自力でやり遂げなければならない、もちろん国産の設備は長い工業の歴史をもつ国のものより劣るであろう、しかしわれわれは、他の国に劣らぬものをつくることができるという自信をもち、集団的技術革新運動をくりひろげて解決しなければならないと説いた。

一方、総書記は中央放送分遣隊や芸術激励隊をオートメ化の工事現場に派遣し、連日奇跡と革新を起こさせた。

こうして、オートメ化は驚くほどの速度で推進された。鋼鉄職場の工業用テレビ化、無線化が完了し、ついでふるい分け場と 5・14 職場のリモコン化が実現し、コークス炉職場、焼結炉職場をはじめ各職場のオートメ化、リモコン化も実現された。一年余りのあいだに、主要生産工程を工業用テレビで監視し、設備をリモコンで操作し、生産を無線通信で指揮できるようになった。

総書記はつづいて、全国の重要工場、企業所の幹部の方式講習をおこなって、オートメ化モデル工場の建設経験を一般化するようはからった。このオートメ化の火の手は、工業部門の各工場、企業所に広がった。こうして、全面的オートメ化の新しい歴史がはじまり、技術革命は新たな段階に発展するようになった。

3 大技術革命の重要な一環である工業労働と農業労働の差を縮めるうえで、農村の総合的機械化は、さしあたり解決すべき切実な課題となっていた。

総書記は、青山（チョンサン）里を農村の総合的機械化のモデルケースとして整え、その成果と経験を全国に一般化する事業を推進した。

新しい農業機械が生産されるたびに、それをまず青山里に送るようはからい、必要な物質的・技術的支援と労働支援を強化し、何回も現地に出向いて実態調査をおこない、難問を解決した。

1971 年 5 月、青山里を訪れた総書記は、農場の管理幹部に、青山里を農村技術革命のモデル、農村建設のひな形として整えるよう強調した。

総書記は、青山里での成果と経験を全国に一般化するようはからった。

1972 年 3 月の初め、現地指導をつづけていた総書記は、ある

日の夜、黄海北道銀波(ウンパ)郡養洞(ヤンドン)里でトラクター運転手たちと話し合った。そして、いま党は農村技術革命を進めて総合的機械化、化学化を実現し、農作業全般を楽なものにしようと努力している、数年内に農業の総合的機械化を実現すべく党の方針を貫徹するうえでトラクター運転手の役割はきわめて重要だ、きみたちは機械化の先兵としての責任感をもって農村技術革命の先頭に立つべきだと励ました。

その後も、平安南道文徳(ムンドク)郡龍五(リョンオ)里、東林(トンリム)里、両江道大紅丹(テホンダン)郡の国営 5 号農場、黄海南道の信川(シンチョン)郡と三泉(サムチョン)郡の協同農場に出向き、農業の総合的機械化と化学化を促進するよう指導した。

総書記は、農村技術革命に拍車をかけるため、トラクター、トラックをはじめ能率的で近代的な各種農業機械の増産、提供にも深い関心を払った。とくに金星(クムソン)トラクター工場と勝利(スンリ)自動車総合工場の生産工程を現代化し、各道に農業機械の生産・修理基地を整える事業を推進した。こうして、各種の農業機械が生産され、農村の技術装備水準が急速に高まり、農業の総合的機械化を加速化できる展望が開かれた。

総書記はまた、女性を家事の重い負担から解放するため、台所用品の増産と食品生産の工業化をはかることにも深い関心を払った。

こうして、主席の示した 3 大技術革命の方針は各分野にわたって成功裏に推進された。

7　党活動を刷新

党活動を刷新することは、1970 年代初期の党と革命発展の重要な要請であった。党活動に新たな転換をもたらさなければ、党を組織的、思想的にいっそううちかため、その指導的役割を強め、革命と建設にたいする党の指導を円滑に実現することができなかった。

金正日総書記は党活動分野で、抗日革命闘争期に金日成主席によってうち立てられた党の伝統的な活動方法を具現するため努力した。

まず党の思想活動で形式主義的な従来の方法を一掃し、清新な思想活動を進めることに力を注いだ。

当時、思想活動に残っていた形式主義の旧弊はなお存続し、そのために思想活動は大衆教育においてしかるべき効果を上げていなかった。

主席は、1973 年の初め、文徳郡、价川（ケチョン）郡、博川（パクチョン）郡など各地方の協同農場の現地指導にあたり、思想活動が現実に密着せず、形式的におこなわれている実情を憂慮した。

思想活動を革命的に改善し、発展する現実に追いつかせることがさし迫った問題として提起された。

総書記は、思想活動分野での病癖となっていた形式主義の旧弊を打破する闘争に火を点じて、思想活動に活力を吹きこむ決意をかためた。

1973 年 3 月に、さまざまな名称の学習班を「金日成同志の革

命思想学習班」と改称し、「偉大な領袖金日成同志の革命活動史図録」を発展する現実の要請に合わせてつくり直させた。そしてすべての学習班が、主席の著作を主要教材として学習を着実におこなうよう指導した。とくに、党員と勤労者の学習に根本的な転換をもたらすため、抗日革命闘争期に主席によって考案された問答式学習方法を文学・芸術部門が取り入れてその模範を示すよう指導した。

1973 年に第 1 回全国芸術家学習コンテストを催し、その経験を踏まえて 1973 年 11 月に問答式学習方法を広く取り入れて学習に新たな転換をもたらす措置を講じた。

総書記は、人々の思想を啓発して経済課題の遂行に動員する生産鼓舞形式をつくりだし、それを一般化することにも力を入れた。その一環として、主席の心労が絶えない採掘工業を盛りたてるため、党、経済、マス・メディアなど各部門の活動家、それに芸能人を網羅した大規模の生産激励隊を編成し、主要炭鉱、鉱山に出向いて生産を鼓舞させる措置を講じた。そしてこの経験にもとづき、金星トラクター工場や勝利自動車総合工場で大がかりな生産鼓舞をおこない、その新たな模範を創造した。これと同時に、実践の過程でその生命力が実証された生産鼓舞を恒常化するため、中央と地方および主要生産部門に芸術宣伝隊、放送分遣隊、機動芸術激励隊を組織する措置を講じた。

総書記は、党の活動システムと方法の改善をはかって、党活動を刷新させた。発展する現実の要請に即して、党内の部署と課の職能を新たに制定し、それにもとづいて活動する秩序をうち立て、党活動家の新たな下部指導システムを確立した。そして、党活動

の行政化を一掃し、すべての活動家が政治活動、教育活動を優先させるようにし、党活動を対人活動に切り替えた。

総書記のエネルギッシュな指導により、党活動は旧来の方法から脱皮し、新しい発展の道に入るようになった。

三　1974 年 2 月～1980 年 9 月

1　後継者として推戴

1974 年 2 月、金正日総書記は金日成主席の後継者、朝鮮労働党と人民の指導者として推戴された。これは、時代と革命発展の熟成した要請、全党と全人民の一致した意思と念願の実現であった。

革命偉業継承の問題を正しく解決することは、1970 年代にいたって朝鮮革命の熟成した要請として提起された。

朝鮮労働党と人民は第 5 回党大会で示された路線にしたがい、社会主義の完全な勝利を早めるべく歴史的進軍に拍車をかけ、チュチェ偉業は社会主義・共産主義をめざす闘争の新たな段階に入った。歳月の流れとともに朝鮮では革命の世代交替がなされ、解放後に成長した新しい世代が革命闘争と建設事業の主役として登場していた。主席の指導のもと革命の第一世代が成功裏に前進させてきたチュチェの革命偉業は、まさに革命の新しい世代によって継承されなければならなくなっていた。

革命偉業継承の問題が熟成した要請となっていた 1974 年 2 月に、朝鮮労働党中央委員会第 5 期第 8 回総会が開かれた。総会では、社会主義経済建設の 10 大展望目標を達成するための決定が採択され、ついで後継者推戴に関する問題が上程された。

会議では金一（キムイル）〔9〕、呉振宇（オジンウ）〔10〕、林春秋（リムチュンチュ）〔11〕をはじめ党中央委員会政治委員会委員と書記が、すべての党員と人民の念願を込めて、

総書記を党の首脳部に選出することを提議した。かれらは、党に提起されている膨大な課題は革命と建設にたいする党の指導を強化することを切実に求めているとし、総書記に党活動全般の指導を委ね、総書記を中心に活動を協議し、忠実にしたがっていくことを決意した。

総書記は党中央委員会の指導員、課長を経て、1970 年 9 月から副部長、1973 年 7 月から部長、同年 9 月から党中央委員会書記の重責を担い、1972 年 10 月に党中央委員会委員に選出されて活動し、党建設と党活動で大きな功績を積み上げた。

総書記は主席への忠実性をチュチェ型の革命家の第一の生命とし、主席にたいする忠実性の模範を示した。

総書記は精力的な思想・理論活動によって主席の革命思想を擁護し、深化、発展させる数多くの独創的な思想、理論を提示した。そして主席の指導を補佐する活動の過程で、主席の洗練された指導芸術をりっぱに体現し、革命的で人民的な活動方法と作風を確立する模範を示し、ひたすら人民のために生涯をささげていく主席の高邁な共産主義的徳性をそっくり体現した。さらには主席の唯一的指導を強化し、党の思想、意志の統一団結をうちかため、党活動を刷新する活動を巧みに導いて、朝鮮労働党の強化、発展に大きく貢献した。

総書記は 3 大革命路線を堅持し、経済建設にたいする党の指導を強め、革命武力を鉄壁のごとく築く事業を成功裏に導いて国の経済的威力と防衛力を強化し、社会主義文化建設を精力的に指導して文化建設のすべての分野に転換をもたらした。

総書記は祖国統一を早める活動を賢明に導き、朝鮮革命の全国

的勝利の促進に大きく寄与した。

　この日々に、総書記は革命と建設を指導する過程でなし遂げた業績と、洗練された指導芸術、高邁な徳性によって人民に尊敬され信頼された。

　総書記の偉大さと賢明さを実生活を通じて実感した人民は、総書記を「敬慕してやまない指導者」「英明な指導者」「親愛なる指導者」と称し、頌歌をつくって普及させ、「親愛なる指導者金正日同志に限りなく忠実な親衛隊、突撃隊になろう！」というスローガンをかかげた。こうしたなかで人民から、総書記を主席の後継者として推戴しようという要望書や手紙が数多く党中央委員会に寄せられた。この要望書や手紙には、総書記を主席の後継者として推戴しようとする朝鮮人民の切々たる願い、そして総書記の指導にしたがって主席が切り開いたチュチェの革命偉業をあくまで達成しようとする一致した決意が込められていた。

　党中央委員会第5期第8回総会は、全党と全人民の一致した願望と意志にもとづき、総書記を党中央委員会政治委員会委員として、主席の後継者に推戴した。これは朝鮮人民の絶対的な意志であり、党と革命発展の当然の帰結であり、歴史の必然であった。

　主席はこの日の政治委員会常務委員会で、きょうの総会はきわめて重要な問題を討議したと指摘し、「総会の参加者が一致して、金正日書記をチュチェ偉業の達成のために党の首脳部に推挙しましたが、わたしも同感です。みなさんの意向は総書記の意向であり、総書記の意向はみなさんの意向です。わたしもみなさんと同じ考えです」と述べた。

　この日、総書記は幹部たちの祝賀と期待に感謝の意を表し、自

分は主席の革命偉業に忠実な戦士の一人だ、みなともに主席に忠実にしたがい、いっそう熱心に働こうと所信を述べた。

総書記を主席の後継者、チュチェの革命偉業の継承者として仰ぐことにより、朝鮮の革命偉業継承の問題は解決された。

2　全社会をチュチェ思想化の道へ

2月宣言

金正日総書記は金日成主席の革命思想を定義づけ、全社会のチュチェ思想化を党の最高綱領として宣言した。

総書記は従来の労働者階級の思想史を総括し、主席によって示された思想は新しく独創的な思想であることを明らかにし、反党反革命分派分子を摘発、一掃する過程を通じて、全社会をチュチェ思想化すべくスローガンをかかげる決心をかためた。そして執務室ではもちろん、現地指導の道々でも主席の革命思想を定義づける構想をあたため、思索と探究をつづけた。1971年9月に両江道を現地指導したときにも、主席の革命思想を定義づける著述に専念した。日中は中央と道内の幹部に会って提起された問題を討議し、夜は寝もやらず執筆の労をとった。ほんのわずかな休息の間にもその時間を割いて、主席の革命思想を定義づける思索と探究を重ねた。主席の事跡をとどめる茂浦(ムポ)を訪れ、7号堰のほとりで釣糸を垂れて思索にふける日もあった。

日夜、思索と著述に没頭してきた総書記は、党中央委員会宣伝

扇動部の会議をはじめ、機会あるたびに、チュチェの新たな哲学的原理にもとづく主席の革命思想は自主時代の唯一の指導思想であると説き、その革命思想を定義づける確固たる決心を表明した。

こうしていよいよ、1974 年 2 月 19 日に開かれた全国党宣伝活動家の講習会で、主席の革命思想をチュチェの思想、理論および方法の全一的な体系として定義づけた。

総書記はこれにもとづき、全社会のチュチェ思想化を党の最高綱領として宣した。

全社会のチュチェ思想化とは、主席の革命思想を指導指針として朝鮮革命を進め、チュチェ思想にもとづいて共産主義社会を建設し完成することを意味する。

これは、チュチェ偉業の達成をめざす労働者階級の党の宣言であった。

党の思想活動における転換

主席の革命思想をチュチェの思想、理論、方法の全一的な体系として定義づけた総書記は、全社会のチュチェ思想化の要請に即して党の思想活動の改善に大きな力を注いだ。

総書記は 1974 年 2 月の全国党宣伝活動家の講習会で、党の思想活動の基本任務は全社会をチュチェ思想化することであると指摘した。そして全社会のチュチェ思想化をめざす党の思想活動で重要なことは、党員と勤労者のあいだで唯一思想教育と革命教育を強め、社会主義大建設に向けての宣伝・鼓舞活動を展開し、党の思想活動において形式主義の古い殻を打ち破り、新たな転換を

もたらすことであると指摘し、党の思想活動を改善する対策を講じた。

なによりもまず総書記は、党員と勤労者にたいする唯一思想教育と革命教育の強化に力を注いだ。

『金日成著作集』をはじめ主席の著作を新しく編さん出版し、その学習を深め、革命伝統教育を広範におこなって、党員と勤労者に主席と党の業績を深く体得させることに努めた。また、党員と勤労者にたいする革命教育、階級的教育を強め、かれらに確固たる労働者階級的観点、革命的世界観をもたせ、朝鮮革命を固守し、社会主義建設を成功裏に前進させるよう導いた。

これとともに、思想活動を優先させて経済建設を高揚させることは党の一貫した方針であることを明らかにし、すべての勤労者を速度戦へと奮起させることに宣伝・鼓舞活動の火力を集中させた。

速度戦はすべての活動を電撃的に進める社会主義建設の基本戦闘形式であり、たえまない飛躍と奇跡を生む革命的な活動展開原則である。速度戦は力を総動員して事業を最大の速度で進めながら、その質を最上の水準で保つことを求める。最短期間内に量と質の両面で最上の成果を達成することが速度戦の基本的要求である。

総書記は速度戦を妨げるあらゆる要素を思想戦の方法で克服し、生産と建設での継続革新、継続高揚により、社会主義大建設の方針を貫徹するよう導いた。

思想戦は、人々の思想観点と思考方式、活動態度と活動方式、活動方法と活動作風など、すべての面に根本的転換をもたらすた

めの思想教育である。

総書記は党の思想活動における形式主義の古い殻を打ち破るため、その直接の担い手である党の宣伝活動家のあいだで革命的活動方法と人民的活動作風を確立することに深い関心を払った。

平壌に建てられた3大革命展示館を訪れた総書記は、さる郡党委員会の活動家が政治活動のため下部に出向くとき利用したという背のうの前で歩みを止めた。そこには主席の著書や回想記集『人民の自由と解放のために』、党政策解説対話テキスト、チュチェ農法宣伝資料、画具、ハーモニカなど、背のうの中身が陳列されていた。その場で党活動家の姿を思い浮かべた総書記は、同行した幹部に、この郡党委員会の活動家は党の意図をよく受けとめたと称え、それを一般化するようはからった。この郡党委員会活動家の経験は、その後全国の党活動家に広く紹介され、大きな効力を発揮した。

総書記は現地に出向いて党の思想活動の模範を示した。1974年9月に江原(カンウォン)道を訪れ、党員と勤労者のあいだで党の唯一思想教育とともに革命伝統教育、階級的教育を強め、その経験を全国に一般化するよう指導した。

一方、総書記は党の思想活動を刷新するため、新しく独創的な形式と方法をつくりだした。

まず、講演宣伝の形式と方法を改善して、それが大衆を教育し、革命と建設へと奮起させるのに役立つようにした。また、録音講演を発案し、党員と勤労者に主席と党の偉大さを生き生きと感動的に体得させるようにした。そして1974年4月初には、主席の誕生記念日に際しての録音講演テキストの作成状況を調べ、録音

を聴きながら話術や音楽編集を上手にするよう細やかに指導した。
　総書記は、マス・メディアと文学・芸術を党の強力な思想的武器、人々を革命的に教育する強力な手段とし、それをたえず革新し発展させることに力を注いだ。
　1974 年 2 月に社説革命の火を点じ、ついで新聞革命、報道革命、出版革命を起こし、党のマス・メディアが全社会のチュチェ思想化に寄与する思想的武器としての使命と任務を円滑に遂行するよう導いた。同時に革命的文学・芸術作品の宣伝・普及活動に力を入れ、党員と勤労者が文芸作品を通じて闘争と生活の真理を体得し、作品の主人公を見習って自らを革命化するよう導いた。
　総書記のこうしたエネルギッシュな指導によって、党の思想活動では形式主義の古い殻が打ち破られ、新たな転換がもたらされた。

全党のチュチェ思想化

　総書記は、全社会のチュチェ思想化をおし進めるカギは全党のチュチェ思想化にあるとし、それを実現するための活動を指導した。
　党活動に新たな転換をもたらすため、党オルグの講習を発起し、講習テキストの作成をはじめその準備から締めくくりにいたる全過程の指導にあたった。
　講習の準備が進められていたある日、提出された講習テーマに目を通した総書記は、党オルグを新しい党の活動理論で武装させるためには難問となっていることを扱うべきだと指摘し、講習テ

ーマを一つひとつ設定した。そしてテキストの執筆方向から叙述体系、文章の表現にいたるまで細やかに指導した。

総書記は、従来のテキストや教材にとらわれることなく、内容を思いきって展開すべきだとし、とくに力点をおいて叙述すべき個所については繰り返し説明した。そしてできあがったテキストが提出されると即座に一つひとつ検討し、添削した。

総書記は『党中央が示した全党幹部化の方針について』というテキストに「…全党の幹部化、これはすべての党員と勤労者を金日成同志に限りなく忠実な革命戦士に育て、わが党を永遠にチュチェの血筋を継いでいく栄えある不敗の党に強化、発展させていく誇らしく重要な事業である」と加筆した。そして全党の幹部化が朝鮮革命と党発展の必須の要求となる根拠を明らかにし、全党幹部化方針の基本的内容を詳しく説き明かした。いかにも詳しく内容が展開され、添削というより書き直されたものにひとしかった。テキストの各章、節の中心を明白にし、意味がはっきりしていなかったり内容が貧弱な個所、問題展開の角度が外れていたり散漫に長々と叙述された部分にすべて手を加えた。

このように党オルグ講習用のテキストは、総書記の独創的な党建設理論を盛り込んでいるばかりでなく、文章や表現の細微にいたるまで総書記によって推敲され完成されたものであった。

総書記はまた、講習の規模も大きくし、それを新しい形式でおこなうようはからった。こうして 1974 年 7 月の初めから 8 月の初めにかけての 1 カ月間、平壌で大規模な全国党オルグ講習会がおこなわれた。

1974 年 8 月 2 日に、総書記はこの講習会で全党をチュチェ思

想化すべく方針を示した。

全党をチュチェ思想化するということは、全党員をチュチェ型の精鋭分子にし、党建設と党活動を終始一貫金日成主席の思想と理論、方法にもとづいておこなうことを意味する。

総書記は、全党のチュチェ思想化を実現するためには、党の唯一思想体系と指導体系を確立しなければならないと指摘した。また、党と革命隊伍をうちかため、社会主義経済建設にたいする党の指導を強化し、党の活動体系と活動方法を改善する課題と方途についても明示した。

総書記の指導によって、朝鮮労働党は新たな高い発展段階に入り、党事業と党活動のすべての分野に転換がもたらされた。

総書記は革命と建設のすべての分野で党の指導体系を確立する活動を精力的に指導した。

1979 年 4 月の党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部責任幹部協議会で、党の指導体系を確立する方針を示し、革命と建設にたいする党の指導を確固と裏付けた。

こうして、各級党組織の戦闘力と指導的役割が高まり、革命と建設の各分野で党の指導体系が確立された。

3　創造と建設の英雄

「70 日間戦闘」

1974 年 2 月の党中央委員会第 5 期第 8 回総会では、社会主義

大建設方針を貫徹し、6 カ年計画を繰り上げて遂行すべく課題を示した。

1974 年は、朝鮮で社会主義大建設がはじまった年であり、6 カ年計画の遂行において決定的な意義をもつ年であった。この年の膨大な年間計画を超過遂行してはじめて、6 カ年計画を成功裏に完遂し、社会主義大建設を高い段階へと飛躍させることができるのであった。しかし、1974 年度の人民経済計画はその遂行が危ぶまれていた。

まさにこうした時期に、金正日総書記は自分が党組織を発動させて経済活動の難関を解決してみると金日成主席に提言した。

1974 年 10 月 9 日、総書記は党中央委員会および政務院責任幹部、道党委員会責任書記協議会で『全党が奮起して「70 日間戦闘」を力強く展開しよう』と題する演説をおこなった。

この演説で、「70 日間戦闘」の目的とこの戦闘を通じて解決すべき課題、戦闘を成功裏に進める方途を明示した。

総書記は「70 日間戦闘」の勝利に向けての用意周到な作戦を練って指導グループを派遣した。こうして、中央と各道、市、郡で決起集会が開かれ、10 月 21 日から「70 日間戦闘」が開始された。

総書記は戦闘が開始されると、すべての幹部が背のうを背負って生産現場に出かけ、生産者と起居をともにし、政治活動を優先させ、宣伝・鼓舞の形式と手段を総動員して生産鼓舞活動を展開するよう導いた。これを受けて中央と地方の数多くの幹部や芸術団が現場に行き、活発な鼓舞活動によって党員と勤労者の気勢を盛り上げた。

一方、党政策の実行を妨げるなわばり主義、要領主義、消極性などの思想的宿弊を打破する一大旋風をまきおこすよう導いた。こうして幹部の思想的観点と思考方式、活動態度と活動スタイルには根本的な変化が起こり、生産は急ピッチで上昇するようになった。

総書記はまた、「70 日間戦闘」の要諦である採掘工業、輸送、輸出部門を優先的にもり立てることに力を集中するよう指導した。

総力を挙げて炭鉱、鉱山を支援し、掘進とはく土、坑道の構築を優先させ、炭鉱、鉱山に能率的で近代的な採掘設備を提供し、運搬のコンベヤー化、ケーブル化を推進させた。同時に輸送のネックを解消するため鉄道の指令・指揮システムを確立し、輸送の手配を綿密にして集中輸送を強化し、貨車の回帰日数を短縮し、貨車生産と機関車修理、積み下ろし作業の機械化に拍車をかけた。また、輸出品生産を増大させ、その輸送を円滑にし、貿易港の通過能力を高める措置を講じた。

総書記は内部の潜在力を引き出し、それを効果的に利用することに大きな力を注いだ。

これを大衆的運動とし、個々の工場、企業所や市、郡の範囲にかぎらず、関連のある工場、企業所や各地域間の提携を強化して展開するよう導いた。

戦闘期間、数十回の口頭指示と直筆指示によって各部門の戦闘方向と方途を明示し、毎日、全国的な戦闘進行状況の報告を受け、必要な対策を立てた。そして信川、海州（ヘジュ）をはじめ各地域と部門に出かけ、幹部の組織・政治活動と戦闘指揮、生産実態と資材供給および給養活動にいたるまで深く調べ、難問の解決をはかった。

総書記の指導によって「70 日間戦闘」は成功裏に遂行され、社会主義大建設では大きな成果が達成された。その過程で「70 日間戦闘速度」が創造された。この戦闘期間に、工業生産はそれ以前に比べ 1.7 倍に成長し、この年の人民経済計画は全般的に超過遂行された。こうして党創立 30 周年までに 6 カ年計画を繰り上げて完遂できる展望が開かれた。

1975 年 2 月、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会は総書記に朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を授与した。

たえまない現地指導

総書記は「70 日間戦闘」によって社会主義大建設の突破口を開いた後、党創立 30 周年までに 6 カ年計画を完遂するための現地指導の道を歩みつづけた。

上半期だけでも咸鏡南北道と江原道、平安南北道と黄海南道を訪れた。この時期、総書記がとくに関心を払ったのは農業部門であった。おりしも主席は外国歴訪の途上にあった。

1975 年 5 月、田植え真っ最中のある日、総書記は滞在国からの主席の長距離電話を受けた。祖国の天候や営農進行状況を尋ねる主席の声からは気がかりな様子がうかがわれた。

総書記は通話が終わるとすぐ、当該部門の幹部を呼んで田植えを一日も早く終える対策を講じ、その足で平安南道と平安北道に出かけた。

平安北道の平坦部を巡って某地に着いた時は深夜であった。随行員はここで総書記が休むものと思った。ところが総書記はまた

もや出発の準備をするよう指示した。そして今回、西海岸一帯の営農状況はだいたいわかったが、東海岸地区の状況はどうなのか行ってみなくては安心できない、早く出発の準備をするようにと指示した。そして運転手は休ませ、鉄道便で行こうとつけ加えた。こう言われていささか驚いている随行員に「わたしも人民のために働く者であるから、人民が乗る列車に乗って行くべきです」と言って別あつらえの列車編成を差し止めた。

　こうしてそこを発って真夜中に順川（スンチョン）駅に到着し、やがて来合わせた列車に乗り込んだ。

　列車は一晩中走って夜明けごろ高原（コウォン）駅に着いた。連絡を受けた道の幹部たちがホームで出迎えた。駅構内の雰囲気から誰か幹部が後尾の車両に乗っていることを悟った旅客や乗務員は、総書記が列車から降りるのを見てびっくりし、総書記はまさに偉大な平民であると驚嘆してやまなかった。

　やがて江原道のある農場まで来て車を止めた総書記は、畑のうねまに歩みを移した。そして植えたばかりのトウモロコシ栄養ポット苗の中に欠株があるのを見つけ、坪当たりの株数を正確に守り、栄養ポット苗をきちんと移植すべきだと諭し、自ら倒れたトウモロコシ苗を植え直した。

　道の責任幹部から、道内の全般的地域でトウモロコシ苗の移植が終わり、田植えも計画どおり進められており、工業部門の 5 月の計画も遂行されたという報告を受けた総書記は、歓迎の花束や万歳よりそういう報告を聞くほうがうれしい、と言って明るく笑った。そして、協同農場の管理幹部に会うと、主席によって創造されたチュチェ農法の真髄を説き明かし、営農でこの農法をしっ

かり具現するよう強調した。

総書記は、農業部門とともに工業部門も現地指導した。

西海岸の殷栗（ウンリュル）鉱山の大型長距離ベルト・コンベヤー敷設工事場を現地指導した後、7 月 1 日には大非鉄金属鉱物生産基地である剣徳（コムドク）鉱業総合企業所を訪れた。

列車が剣徳に着くと、総書記はその足で文化会館に直行し、鉱山の全般的実態を聞き取ってから第 2 選鉱場を見て回り、案内日程には予定されていなかった 4・5 坑に足を向けた。主席が 1961 年 4 月 5 日に現地指導した坑であった。

坑内視察の意向を知った幹部は、「切羽にだけは入らないでください」と総書記を引き止めた。

事実、4・5 坑の切羽は深い地底にあるだけでなく、そのころは生産一点張りで整備に手が届かず、岩水が滴り落ちている個所もあった。

しかし、総書記は微笑をたたえ、坑内に入らないくらいならここに来た甲斐がない、われわれの大事な労働者が働く所であれば、いくら遠く険しい所でも行ってみるべきだ、鉱夫を訪ねてきたわれわれが切羽にも入らずそのまま帰ってしまえば、かれらがどんなに寂しい思いをするだろうか、私のことは心配せずに入ろう、と促した。

こうして、総書記は質素な服装で安全帽をかぶり、鉱夫用のインクラインに乗って 8 キロもある切羽に降りていった。夢にまで思い描いた総書記を自分たちの作業場に迎えた鉱夫たちは感激のあまり、いっせいに「万歳！」を叫んだ。総書記はかれらの石ぼこりにまみれた手をとり、切羽で働いているみなさんに会いたく

て来たと告げた。そして鉱夫たちの生活や作業状況を詳しく尋ねた。

この日、鉱山の幹部と話を交わした総書記は、思想、技術、文化の 3 大革命を力強く推進して生産で新たな高揚を起こし、人々の思想改造と技術革新、それに新しい文化創造をめざす活動を強力に展開しなければならないと強調した。とくに、大型ベルト・コンベヤー輸送ラインを設置し、坑指令通信指揮システムを確立するなど、鉱物生産に転換をもたらすための具体的な課題と方途を一つひとつ明示した。

総書記の現地指導に大いに励まされた剣徳鉱山の労働者は、鉱物生産に励んで 6 カ年計画を一年半近く繰り上げて遂行し、その後、全国で真っ先に 3 大革命赤旗獲得運動ののろしを上げた。

こうして、朝鮮人民は 6 カ年計画のすべての課題を期限前に遂行し、社会主義建設でたえまない高揚を起こして力強く前進した。

首都建設の新しい歴史

5000 年の歴史を誇る朝鮮民族の発祥地であり、朝鮮革命の心臓部である平壌は、戦後、廃墟のなかから再建されはじめて以来、20 年を経た 1970 年代の中ごろ、近代的な都市としてその面貌を一新した。

万寿台（マンスデ）の主席の銅像を中心に建設された平壌の新たな姿は、平壌を人民の首都としてりっぱに建設せんとする総書記のエネルギッシュな指導によるものであった。

1975 年 3 月のある日、平壌市建設総計画図を検討した総書記

は、首都建設に新たな転換をもたらすべく対策を講じた。

総書記は、人民を限りなく愛し、人民のためにすべてを尽くす主席の崇高な志と、主席を高く戴こうとする朝鮮人民の厚い忠誠心を平壌市の建設に具現すべきだと、幹部たちにその構想を語った。そして、首都が国の顔であればその中心部は首都の顔といえるとし、万寿台と南山丘（ナムサンジェ）一帯をりっぱに整備して、どこからも万寿台の主席の銅像が眺められるようにし、いたるところに近代的な建築物を配置するよう強調した。それから色鉛筆をとって、総計画図に金日成広場を中心に近代的な街路を形成する広い区画を確定し、公共建築や記念碑、それに遊園地の位置を一つひとつ印した。

そして、自分の構想はだいたいこういうものだが、これらの対象をいつごろまでに建設できるだろうかと幹部たちにたずねた。

設計家は諸条件を勘案すれば数十年はかかりそうだと答えた。すると総書記は、「いや、わたしはこの建設を主席の生誕 70 周年に際して終える考えです」と言った。

「7 年間でですか?!」と設計家が驚くと、総書記は確信にみちて、信じられないというのですか、これまで党が決心してできなかったことがありますか？　われわれが主席への忠誠心をもって大胆に考え、取り組みさえすれば十分可能ですと語った。

そのころ、総書記は主席に同行して普通江（ポトンガン）区域の楽園（ラクウォン）洞一帯を見て回った。そのとき主席は、この一帯に 3000 所帯の住宅を建設して、琵琶（ピパ）通りとつながる新しい通りを形成するという構想を示した。

総書記はそれを自分が受け持つことを主席に提起し、楽園洞一

帯に3000所帯の高層住宅を建設するための協議会を招集した。

平壌市の一角に置き去りにされていたところに街を形成し、3000 所帯の住宅を一度に建てるという楽園通りの建設はこうして始まった。

総書記は、毎日のように建設進行状況の報告を受け、しばしば建設現場に出向いて難問の解決をはかって細やかに指導した。

1975 年 6 月、楽園通りの建設現場を訪れた総書記はある住宅の内部を見て回り、主席の人民への配慮が十分行き渡るよう、所帯ごとに電気炊飯器、冷蔵庫、テレビ、それに家具一式をそろえ、住民が不便なく暮らせるようにしようと言った。それだけでなく、朝鮮人はキムチが好きだから各階ごとにキムチ用のかめも置けるようにしようと付け加えた。

総書記は建設現場に来るたびに、「人民が喜ぶだろうか？」「人民に苦情を言われるのではないか？」と口ぐせのように言うのだった。

一方、住宅にセットする家具の見本展示会を催し、それぞれの専門工場と機関、企業所で見本と同じ良質の家具類や仕上げ建材、衛生陶器類、建築用金具類を生産、供給するようはからった。

こうして、党創立 30 周年を迎えて、平壌で初めての高層住宅街として楽園通りが生まれたのである。

総書記の建設構想と指導により、これと前後して、万寿台芸術劇場と大城山(テソンサン)遊園地が完工し、ヘルスセンター蒼光(チャングァン)院や平壌産院が建てられ、人民大学習堂の建設も仕上げの段階に入っていた。

平壌市を近代的に整備するうえで異彩を放ったのは蒼光通りの建設であった。

楽園通りの竣工後、総書記は平壌市中心部の環状線通りをすっかり取り払い、そこにチュチェの建築芸術を具現した新しい通りを建設するいま一つの建設構想を示した。

環状線通りは、戦後、建設部門に潜入していた分派分子が党の建設方針に反して、朝鮮人民の生活風習と朝鮮の実情に合わない外国の設計をそのまま取り入れて形成した奇形的な通りであった。

総書記は、設計家をともなって環状線通りに出かけた。寒い冬の夜だったので、通りを見て回る総書記の健康を気づかい、後日また出直すよう随行員が進言した。すると総書記は、主席が戦後の復興建設の日々歩みつづけた道はどんなに険しかったことか、それに比べればこんなことはなんでもない、建設も革命なのにこんな道を気にしてはならない、とたしなめ、2 階建ての家が軒を連ねる暗い露地を歩みつづけた。

その後、当該幹部が提出した街の形象案を検討し、重ねて新しい街の形象方向を示した。そして蒼光通りには、20 階～30 階の高層住宅を建設することにし、それを様々な形式で立体感をもたせ、バランスよく配置し、また各住宅は 3～4LDK にし、部屋に種々の高級家具類や文化生活用品を備え、台所には高級調理設備や換気装置を備えるようはからった。

こうして 1980 年 10 月に近代的な住宅街が完成された。

総書記は完工した住宅を見て回り、設備や施工も上々だと満足の意を表し、この街を蒼光通りと名付けた。

総書記は首都平壌だけでなく、地方都市や農村を住みよい人民の楽園にするため労苦を傾けた。地方都市の建設においても、人民によい暮らしをさせることを根本原則とし、都市ごとに立地条

件と住民構成に合わせて特色をもたせ、勤労者に幸せで豊かな文化生活条件を保障するようはからった。

今日、その面貌を一新した咸興（ハムフン）、元山（ウォンサン）、恵山、南浦、そして三池淵邑や穏城（オンソン）邑など、都市や炭鉱・鉱山地区、農村のいずこを問わず総書記のこのような細心な指導と配慮が行き渡っている。

4　革命伝統の全面的継承のために

全社会のチュチェ思想化が前面に提起された革命発展の新たな段階は、党の革命伝統を継承し発展させる事業をさらに深化させることを求めていた。革命伝統は党と革命の歴史的根源であり、その代を継ぐ血脈であり、チュチェの革命偉業達成のための貴い資産であり、万年の礎である。

金正日総書記は革命伝統の継承、発展を全社会のチュチェ思想化実現の根本的裏付けとみなし、これに大きな力を注いだ。1974 年 3 月、総書記は「生産も学習も生活も抗日遊撃隊式に！」というスローガンをうちだした。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「党組織は革命伝統教育を実践活動と密接に結びつけて進めることによって、『生産も学習も生活も抗日遊撃隊式に！』という党のスローガンをりっぱに具現し、実践を通じてわが党の革命伝統を絶えず輝かせていくようにすべきです」

このスローガンには、金日成主席が抗日革命闘争の炎のなかで築いた栄えある革命伝統を固守し、りっぱに継承し発展させ、

主席によって切り開かれたチュチェの革命偉業をあくまで達成しようという党の確固たる立場と革命的意志がもられている。

総書記はこのスローガンによって、すべての勤労者が主席に限りなく忠実であった抗日革命烈士の模範に見習い、抗日遊撃隊の活動気風、学習気風、生活気風どおりに働き、生活していくよう導いた。そして、このスローガンのもとに、革命伝統を全面的に継承し発展させることに精力を傾注した。

総書記のエネルギッシュな指導の道程にはつぎのような事跡が記されている。

・1974 年 5 月、咸鏡北道先鋒郡の「金日成同志革命思想研究室」の活動を現地で指導、研究室の運営改善の方途を提示。

・王在山（ワンジェサン）革命史跡地と三池淵革命戦跡地を整備する事業を現地で指導。

・1975 年 3 月、咸鏡北道の「金日成同志革命事績館」を現地で指導、革命事績館の特性を生かす方途を提示。

・1975 年 5 月、党中央委員会書記、部長、副部長協議会で、全社会に革命的生活気風を確立し、活動と生活をさらに革命的におこなう方途を提示。

・問答式学習方法を一般化し、「全党が学習しよう！」というスローガンをかかげて学習に新たな転換をもたらすよう指導。

・回想記集『人民の自由と解放のために』（年代順）と『チュチェの光のもと抗日革命 20 年』（1 巻～5 巻）など回想記や抗日武装闘争の体験資料の執筆、出版を指導。

・1974 年 3 月、初の「学びの千里の道」〔12〕踏査行軍を組織。1975 年 1 月、「解放の千里の道」〔13〕の踏査行軍を組織。

・1976 年 10 月、党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部責任幹部会議での演説『党の政治的・思想的統一と純潔を代を継いで固守しよう』で、革命伝統にたいする正しい立場と態度を堅持し、断固擁護するための根本問題を提示。

・主席の革命事績史料収集のための整然たる体系を確立、その史料の恒久保存措置を講ずる。

総書記は、主席の革命活動史を実見できる革命戦跡と革命史跡を整備する大記念碑の建造を強力に推進した。

王在山革命史跡地と三池淵革命戦跡地の建設はきわめて重要な意義をもっていた。王在山革命史跡地は、主席が 1933 年 3 月 11 日、穏城地区に来て王在山会議を開き、抗日武装闘争を国内に拡大する方針を示した由緒深いところであった。

総書記は、党創立 30 周年をひかえて王在山革命史跡地を整備する事業を発議した。そして、党中央委員会書記局の決定が採択されると、建設隊を編成して派遣する一方、革命史跡の形象図案を何度も検討し、大記念碑建設の原則と方途を具体的に示した。

こうして王在山革命史跡地は 1 年 4 カ月でりっぱに建設され、党員と勤労者の教育に寄与することになった。

これにつづいて総書記は三池淵革命戦跡地の整備を発議した。

茂山地区戦闘勝利 40 周年に際して三池淵革命戦跡地を整備することを発議した総書記は、現地指導の過程で大記念碑の形成に関する原則的方向を示し、これを細心に指導した。

こうして 1979 年 3 月、2 年半余りのあいだに三池淵革命戦跡地は革命伝統の教育の場としてりっぱに整備された。

王在山革命史跡地と三池淵革命戦跡地の相次ぐ完成によってモ

デルをつくった総書記は、史跡地の建設をひきつづき指導した。こうして革命戦跡と革命史跡がよりりっぱに整備され、全国が革命伝統教育の学校と化した。

これは革命伝統を輝かす事業における総書記の歴史的貢献であった。

5　全軍のチュチェ思想化

領袖の軍隊、党の軍隊

金正日総書記は、1975 年 1 月 1 日の朝鮮人民軍総政治局責任幹部との談話で、全軍チュチェ思想化の方針を示し、その実現をめざす活動を指導した。

全軍のチュチェ思想化とは、すべての軍人を党と領袖に限りなく忠実な戦士に育て、軍建設と軍事活動をチュチェ思想にもとづいておこなうことを意味する。全軍をチュチェ思想化し、人民軍を完全無欠の領袖の軍隊、党の軍隊にすることは軍建設の総体的任務である。

総書記は、軍人のあいだで党と領袖にたいする忠実性教育を基本とし、チュチェ思想に関する原理教育を各種形態の教育と正しく結合させる原則で、思想教育を多様な形式と方法で強力に展開するよう指導した。

「金日成同志のために一命を賭して戦おう！」という戦闘的スローガンを提示し、すべての軍人が主席に忠実にしたがい、

主席以外は誰も認めないという確固たる立場に立つようにした。そして朝鮮人民軍の軍団（軍種、兵種）、師団・旅団政治部宣伝扇動部長会議や講習を開き、それに寄せた書簡で人民軍内の宣伝・鼓舞活動を改善する方途を具体的に示した。また、思想活動、宣伝・鼓舞活動において形式主義、図式主義、行政化の古い殻を打ち破り、すべての宣伝、鼓舞を現場宣伝、現場鼓舞に変え、整然とした宣伝・鼓舞体系を確立し、宣伝陣容と鼓舞手段を適切に利用して、活力と清新の気にみちた宣伝・鼓舞活動をするようはからった。

総書記は、人民軍内でも3大革命赤旗獲得運動を推進させる一方、金赫（キムヒョク）〔14〕、呉仲洽（オジュンフプ）〔15〕を見習う運動を強力に展開して、すべての軍人を党と領袖に限りなく忠実な戦士に育て、党の栄えある革命伝統を万代の礎にして全軍チュチェ思想化の偉業をいっそう促進するよう導いた。

また、全軍チュチェ思想化の要求に即して人民軍を軍事技術的にいっそう強化する事業を力強く推進した。

人民軍指揮官の指揮能力の向上と命令・指揮系統の強化に注目を払い、かれらに抗日武装闘争と祖国解放戦争の経験を深く体得させる一方、外国の戦争経験も主体的立場で研究させた。そして人民軍の軍事組織体系と作戦指揮系統を朝鮮の実情と現代戦の要求に即して改編し、部隊の管理水準と各級参謀部の役割を高める対策を講じた。

総書記は、人民軍の訓練の方向と内容を明示し、すべての軍人が豊富な軍事知識と主体的戦法、百発百中の射撃術を身につけ、とくに山の多い朝鮮の地形条件に合わせて山地訓練を強化し、山

岳戦法を体得し、近代的軍事技術をより早く、よりりっぱに身につけるよう導いた。

総書記は、人民軍にたいする党の指導体系を確立する措置を講じた。

総書記は全軍チュチェ思想化の方針を提示した当初から、党の指導を人民軍の生命線とし、人民軍にたいする党の指導体系を確立する課題と方途を明示した。

労働者階級は歴史の舞台に登場した時から、自主性を実現するための革命闘争を絶えず展開してきたが、自己の武力をしっかり整えず、党と領袖の正しい指導が得られない時は闘争で失敗と紆余曲折を免れることができなかった。国際共産主義運動の歴史的経験は、革命武力が党と領袖の正しい指導を受けてのみ、いかなる紆余曲折や失敗もなく、勝利の道を進むことができるということを示している。朝鮮における主体的革命武力の創建とその発展の歴史もこれを実証している。

総書記は機会あるごとに、党の指導とは何を意味し、労働者階級の党と革命武力との関係はどのようなものであるかを幹部に原理的に説き明かした。そして全軍が党の指導のもとに一致した行動をとり、党の命令、指示を無条件に実行し、軍隊内のすべての組織・政治活動が党の指導体系の確立に方向づけられるようにした。

全軍のチュチェ思想化に向けての総書記のエネルギッシュな指導によって、建軍事業には新たな転換がもたらされ、人民軍は領袖の軍隊、党の軍隊としていっそう強化されることになった。

傑出した名将

総書記は、全軍チュチェ思想化の方針を実現する日々、人民軍部隊と軍人のいるところであれば前線と後方、海や島のいずこを問わず現地指導の道を歩みつづけ、部隊の戦闘・政治訓練と戦闘準備を細心に視察、指導した。

総書記の傑出した軍統率気風で際立っているのは、軍人中心の武力観である。

戦争での勝利の基本要因は兵器よりも、その担い手の軍人であること、すなわち軍人を武装力の主体とみなす軍人中心論こそ、まさに総書記が一貫して堅持してきた人間中心の武力観なのである。軍人中心の新しい武力観は、武装力の主体、戦争の主人たる軍人を兵器の威力を誇示する手段としてではなく、軍事力の主体とし、主人としての役割を果たさせる観点と立場である。

古今東西の軍事界は依然として「兵器中心論」が支配してきた。スペインの「無敵艦隊」を退け、ヨーロッパで制海権を掌握したイギリスは「艦隊中心論」を提唱し、第 2 次世界大戦の時期、大陸国家のドイツは「戦車中心論」に依拠して戦場を戦車の対決場にした。また今日、アメリカは「航空優位論」をかかげて「核兵器万能論」を喧伝している。「兵器中心論］者は、軍人を単なる人的材料、兵器操作の手段、その従属物とみなしてきた。しかし戦争では兵器そのものが戦うのではない。兵器を操作し、扱うのは人間であり、人間不在の兵器は単なる鉄片にすぎない。

総書記は軍人中心の武力観にもとづき、軍人の思想問題の解決

に第一義的な力を入れて、軍事訓練や武力装備の問題もともに解いていった。

総書記は軍事的英知と知略、軍事的造詣においてもぬきんでていた。

ある日、人民軍のさる射撃場を訪れた総書記は、軍人の射撃訓練状況を注意深く見つめ、かれらに命中射撃の秘術を授け、自らの模範動作によってそれを示した。距離 50 メートルの木の枝に 10 本の瓶を吊り下げさせ、連続 5 発の拳銃射撃で 5 本の瓶を全部撃ち砕いた。そして今度は拳銃を左手に持ち替え、同じ速度で残りの 5 本の瓶も全部撃ち飛ばした。

さる戦車区分隊を視察したときのことだった。訓練途中の休憩のとき、戦車兵に向かいの山を指し示し、戦車であの高地が越えられるかと尋ねた。

迂回して山越えをしているというかれらの返答を聞いた総書記は、山の多いわが国の実情であれくらいの傾斜地が越えられなくてはいけないとたしなめ、自ら操縦室に入り、どれほどの斜面では走行方向をいかに定め、速度はどう調節して斜面を克服するという操縦法を詳しく教えた。そして戦車が渡河できる水深を聞き取り、戦車をさらに改造して河川の大小にかかわりなく渡河できるようにすべきだとし、その改造方法まで具体的に示した。

総書記は飛行士や管制指揮官を驚嘆させることもたびたびあった。夏のある日、飛行機の着陸を待つ飛行場に出向いた総書記は、管制塔の前で、ところどころに雨雲がわき起こる空を見上げた。飛行場の上空が雨雲に覆われ、いまにも雷雨が襲来しそうな空模様だった。飛行機の着陸が危ぶまれた。突然の気象変動に狼狽す

る指揮官たちを見回した総書記は、着陸方角が北側であることを確かめ、余裕綽々と自ら管制指揮にあたった。総書記は、飛行機を北側ではなく南側に着陸させるよう指示して滑走路に出た。このとき北側の空には稲妻が走り、豪雨が降り注いでいたが、南側の空の一角だけは晴れていた。やがて飛行機が無事に着陸すると同時に、南の空からも閃光がひらめき、雷鳴がとどろいた。一瞬遅れても重大な結果をまねくところだった。管制指揮官たちは、かくも危急の場で天空の兆しを見ぬき、飛行機を安全に着陸させた総書記こそは「神通力」をもった偉人だと感嘆してやまなかった。

総書記はまた某海軍基地を訪れ、海兵とともに航路についた。複雑な軍事海図の前で航路を確かめ、海兵の訓練状況を見守っていた総書記は、海兵の胆力と勇猛心を培うため、艦船を指揮艦の手近に呼び寄せるよう指示した。指揮官の呼集信号が下るや、各艦船は速度を上げ霧のなかを突いて見え隠れしながら指揮艦のそばに接近した。すると指揮官は、総書記の身辺を気づかって各艦船に離脱信号を送ろうとした。すると総書記はそれを制止し、もっと接近させるよう指示した。信号を受けた各艦船は高速で走る指揮艦の両側に代わる代わる位置を変えながら、指定された距離まで接近したり離れたりした。それを見た総書記は高速でもっと大胆に接近させるよう命じた。そして海兵は意志が強く勇敢かつ大胆でなければならない、魚雷艇は敵艦に肉迫して戦う突撃隊であるから胆力がなくては敵艦を撃破することができない、海兵は航空母艦をはじめ大型の敵艦にもためらうことなく肉迫する戦闘精神がなければならないと叱咤した。またあるときは艦船区分隊

の魚雷艇に同乗し、荒波が押し寄せる険しい航路についた。そして、海兵は急に荒れる大波のなかでも、また霧や闇夜のなかでも訓練し、いかなる状況のもとでも襲いかかる敵を一撃のもとに撃滅できるように準備できていなければならないと強調し、長い時間艦艇の戦闘訓練を指導した。

このように総書記は、海兵を強い攻撃精神、戦闘精神をもった万能の海兵に育てた。

一方、総書記は軍需工場をしばしば現地指導し、主体的戦法の要求と朝鮮の実情に合った打撃力と機動力の向上に基本をおいて武力装備を改善し、軍人の体質と朝鮮の地形に適した軽便で実用的な現代兵器をつくるようはからった。

このように総書記は、非凡な軍事的英知と卓越した用兵術をもって人民軍部隊と軍人の戦闘・政治訓練を指導し、人民軍を無敵の強兵に育てあげた。

6　「思想も技術も文化もチュチェの要求どおりに！」

3 大革命赤旗獲得運動

思想、技術、文化の 3 大革命は、金日成主席によってうちだされた社会主義・共産主義建設のための朝鮮労働党の戦略的基本路線である。

金正日総書記は、全社会のチュチェ思想化が前面に提起され

た革命発展の新たな段階の要請と、朝鮮革命の主体的力量の政治的、経済的、軍事的強化を求める情勢の発展を見きわめ、3 大革命路線の貫徹に向けて精力を傾注した。

総書記は 3 大革命をさらに促進するため、1975 年 11 月に「思想も技術も文化もチュチェの要求どおりに！」というスローガンを提示した。このスローガンには、チュチェの革命偉業を最後まで達成せんとする朝鮮労働党と人民の意志と志向が盛り込まれており、3 大革命の遂行においてチュチェ思想の要求を貫徹すべく立場が具現されている。

総書記は主席の発案による 3 大革命グループ運動の深化、発展に深い関心を払った。そして、この運動を人民経済の各部門に拡大し、これにたいする整然とした指導体系を確立するとともに、3 大革命グループの陣容をうちかため、その政治・実務水準の向上をはかった。

総書記は、新しい形態の大衆運動としての 3 大革命赤旗獲得運動を発議した。

党中央委員会責任幹部協議会で、党は今度社会主義建設に新たな高揚をもたらすため 3 大革命赤旗獲得運動を発議したと述べ、かつてチョンリマ（千里馬）作業班運動を展開して社会主義建設の大高揚を起こしたように、各部門、各分野で 3 大革命赤旗獲得運動を強力に展開して新たな革命的高揚を起こすよう強調した。

まず、剣徳鉱業総合企業所と青山協同農場がこの運動ののろしを上げるよう導いた。こうしてこの運動は、1 カ月余りのあいだに工業、農業、交通運輸、科学、教育、保健医療などすべての部門に広がり、全社会的な大衆運動として急速に拡大された。

総書記は、各党組織が3大革命赤旗獲得運動を重要な党の課題として推進するよう指導した。

1976年1月1日、道党責任書記、党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部副部長協議会で、この運動における原則的な諸問題を明らかにした。

総書記は、3大革命赤旗獲得運動の本質と中心的課題についてつぎのように述べている。

「3大革命赤旗獲得運動は、速度戦、思想戦の原則を具現し、人々の思想改造と、経済・文化・国防建設における集団的革新運動を有機的に結合して力強く推進することにより、革命的大事を迎える準備をしっかり整え、社会主義・共産主義建設を最大限に促進する新たな大衆的運動です。

3大革命赤旗獲得運動の中心的課題は、思想革命、技術革命、文化革命を全面的にいっそう促進することです」

そして、3大革命は共産主義社会を建設するまでつづける戦略的課題であるので、この運動を発展させるためには段階を正しく設定し、各段階で解決すべき課題を正確に定め、総括と評価を正しくおこなうよう指摘した。同時に、この運動をつねに重要な党の事業とし、これにたいする党の指導を強めていくよう強調した。また、党が直接掌握して指導するというところに、党が勤労者団体を通じて指導していた従来の大衆運動と区別されるこの運動の重要な特徴があることを明らかにした。

一方、3大革命赤旗獲得運動を大衆自身の事業に変えるため、3大革命赤旗獲得運動指導書を下達し、その実行のための大衆的討議をおこなわせた。そして経験交流会や方式講習をおこなって、

各部門、各分野でこの運動をいっそう高いレベルで展開させるかたわら、この運動を進める過程で得た経験をマス・メディアを通じて広く紹介、宣伝するようはからった。

総書記は、3 大革命赤旗獲得運動を他の大衆運動と密接に結合して推進する措置を講じた。

その一つが、隠れた英雄の模範を見習う運動であった。

1979 年 10 月の初めに主席が探し出した隠れた英雄は、いかなる名誉や報酬も望まず、陰ひなたなく、党と革命、そして祖国と人民のために献身奮闘する真の共産主義的人間であった。

総書記は、党機関紙をはじめ各マス・メディアにかれらの模範を広く紹介し、この運動を全党的、大衆的運動として強く推進するよう導いた。こうして、隠れた英雄の模範を見習う運動は社会主義建設の各分野に急速に波及し、経済建設と科学技術の発展に新たな革新をもたらし、全社会に共産主義的に働き、生活する美風が確立されるようになった。

3 大革命赤旗獲得運動は、朝鮮人民の思想・精神生活と経済・文化建設の各分野にたえまない前進をもたらす強力な推進力となった。

「われわれの方式で生きよう！」

総書記は、「われわれの方式で生きよう！」という戦略的スローガンを示し、朝鮮式の固有な革命方式を創出した。

われわれの方式で生き、われわれの方式でたたかい、われわれの方式で創造せよ、これは党の戦略的路線を貫徹し、当面の難局

を主動的に打開して全社会のチュチェ思想化を促し、チュチェの革命偉業を達成するための重要な要求である。全社会のチュチェ思想化は、自然と社会、そして人間をチュチェ思想の要求どおり改造し、変革する困難かつ複雑な事業である。

朝鮮労働党に提起されたこの課題を完遂するためには、主体性をいっそう強く確立し、革命と建設におけるすべての問題を朝鮮式に解決しなければならなかった。革命と建設を朝鮮式に推進することは、当時の情勢の切実な要求でもあった。

総書記は発展する革命と情勢の要請を深く洞察し、1978 年 12 月 25 日の党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部責任幹部協議会でつぎのように述べている。

「『われわれの方式で生きよう！』、まさにこれがこんにち、わが党が強くうちだしている戦略的スローガンです」

総書記は、われわれはこれまでも外国のものを模倣してその後を追ったり、外国のおかげを被ってきたのではなく、われわれの方式で生きてきた、われわれは主席を高く仰ぎ、主席の示す道にしたがい、自力で折り重なる難関と試練にうちかち、革命闘争と建設事業で大きな勝利を達成した、他の国がどんなやり方をしようと、われわれはこれからもわれわれの方式で生きていくべきである、と述べた。

また幹部たちに、われを頼む者は強者になり、他人を頼む者は弱者になる、また、自分の力で生きる者は興り、他人の力で生きる者は滅びる、と語ったこともあった。

チュチェ思想の要求どおり自己の信念にしたがって思考し行動し、すべてを朝鮮革命と朝鮮人民の利益、国の実情に即して自力

で解決すること、一言でいえばチュチェ思想の要求どおり生きていくというのが、総書記のうちだした「われわれの方式で生きよう！」というスローガンの根本的要求である。

総書記は党中央委員会の責任幹部に、われわれの方式とはすなわちチュチェ式であり、これにまさる方式は他にない、誰かが強いるからといって、われわれが自分の方式を捨てて外国の方式で生きるわけにはいかない、人は服を着ても自分の体に合うものを着てこそ活動に便利で見栄えもする、自分の服を捨てて借り着をしては不便で着心地がよくない、われわれはあくまでもわれわれの方式で生きるべきだ、政治もわれわれの方式でおこない、経済や文化もわれわれの方式で発展させ、国防力もわれわれの方式で強化しなければならない、と説いた。

われわれの方式で生きるという方針が提示されたことにより、朝鮮労働党と人民は、チュチェ思想の要求どおり革命と建設を促進して社会主義の完全な勝利を早め、チュチェの革命偉業達成の科学的な方途を得ることができた。

総書記は、われわれの方式で生きるためには、党活動を正しくおこなって革命隊伍をうちかため、党員と勤労者が自力更生の革命精神を強く発揮して、主体的な社会主義建設路線を貫徹しなければならないと強調した。

朝鮮人民は 1978 年から第 2 次 7 カ年計画の遂行に取り組んだ。

総書記は、「自力更生の革命精神をさらに高く発揮しよう！」というスローガンのもとに、全人民を第 2 次 7 カ年計画の遂行へと奮い立たせた。

党中央委員会の手紙を送って全党員と勤労者を新たな展望計画

の遂行に奮起させる一方、共和国創建 30 周年を迎えて「100 日間戦闘」を展開し、社会主義建設のすべての分野で新たな高揚を起こすよう導いた。

第 2 次 7 カ年計画の突破口が開かれた後、総書記は新たな展望計画の重要課題を遂行する事業を強力に推進しながら、石炭生産をもり立てることに第一義的な力を注いだ。また、「5・18 無事故・定刻超過輸送運動」の火を点じ、鉄道運輸部門で増大する人民経済の輸送需要を満たすようにした。

総書記の指導により、革命と建設のすべての分野でチュチェ思想の要求どおり生きるための事業が力強く展開され、内外の複雑な状況のなかでも第 2 次 7 カ年計画は成功裏に遂行されていった。

科学者・技術者突撃隊運動

総書記は、自力更生の精神によって人民経済の主体化、現代化、科学化を実現する事業を科学技術の最新成果で保障する構想を抱き、科学研究活動を生産と結びつける画期的な措置を講じた。

総書記は、科学研究活動を生産実践と結びつける新たな方法として、科学者・技術者突撃隊運動を活発にくりひろげ、科学技術の発展に一大転換をもたらすようにした。

まず、初の科学者・技術者突撃隊である「7・1 科学者・技術者突撃隊」を編成し、剣徳鉱業総合企業所に派遣した。剣徳に派遣された科学者、技術者は、技術革命の遂行において先駆的役割を果たした。また、南浦と文坪（ムンピョン）の製錬所に突撃隊を派遣した。現地に派遣された科学者、技術者は、科学技術の新たな成果を導

入し、生産工程の科学化を実現するうえで大きな成果を達成した。

1978 年 2 月 17 日、総書記はこの経験を総括し、有能な科学者による突撃隊を組織して人民経済の重要対象に集中的に派遣する新たな措置を講じた。

突撃隊は各専門分野の科学者、技術者、設計士で構成し、主席の深い関心事となっている問題の解決に基本をおき、集中攻勢の方法で科学技術の最新成果を取り入れ、生産を最大限に増大させることを主眼とした。こうして、「2 月 17 日科学者突撃隊」運動がくりひろげられることになった。

総書記は、科学者・技術者突撃隊の活動状況について常時報告を受け、指導をつづけた。

金策（キムチェク）製鉄所に派遣された突撃隊員が、集団の知恵によって主体的な製鉄方法の研究で成果をおさめたときにも、さる化学工場に派遣された突撃隊員が科学技術上の問題解決のため苦心しているときにも、幹部たちにその状況を具体的に調べて援助するようはからった。

総書記はまた、人民経済の主な対象に派遣された科学者・技術者突撃隊がおさめている成果を全般的に調べ、現場で働く技術者、技能工まで網羅する「5・19 技術革新突撃隊」を人民経済の各部門に組織し、技術革命をいっそう強力に推進する措置を講じた。これは、技術革命の遂行において科学者、技術者と労働者の創造的協力を強化すべく主席の思想を具現し、科学技術の発展に新たな転換をもたらすための措置であった。「5・19 技術革新突撃隊」の組織により、科学研究活動と大衆的技術革新運動が密接に結びつき、生産において新たな高揚が起こるようになった。

その後、総書記はすべての科学者、技術者や労働者が科学革命、技術革命の遂行において主席への忠実性をいっそう強く発揮することを期待して、「5・19 技術革新突撃隊」の名称を「4・15 技術革新突撃隊」と改めた。そして、この突撃隊の活動を 3 大革命グループが進めている技術革命と結びつけて指導し、政務院の委員会、部から工場、企業所にいたるまで、科学技術にたいする整然とした行政指導システムを確立する措置を講じた。その結果、人民経済の各部門に価値ある技術革新案が数多く導入され、経済建設における種々の難問が円滑に解決されるようになった。

総書記は科学者、技術者がおさめた成果を高く評価し、かれらに労働英雄、人民科学者、功労科学者、科学賞、新技術革新烽火賞を授与するようはからった。

科学技術革命におけるすべての成果は、科学技術突撃隊の組織、指導によって科学者、技術者の忠誠心と創造的熱意を最大限に発揚させ、科学技術の発展と技術革命の遂行に転換をもたらした総書記の指導によるものであった。

主体的文学・芸術の開花

総書記は、文学・芸術革命における成果にもとづいて、主体的文学・芸術をいっそう開花、発展させていった。

総書記が文学・芸術活動の指導にあたってとくに力を入れたのは、領袖形象化の問題であった。

すでに大学時代に、領袖形象化の問題が文学・芸術の核心であり、永遠なる生命であることを明らかにした総書記は党中央委員

会に赴任してからは、「新しい革命文学を建設しよう！」というスローガンを示し、領袖の形象化を新しい革命文学建設の中心的課題として提起した。そしてそれをりっぱに実現するため、4・15 文学創作団と白頭山創作団で主席の形象化に力を注ぐよう創作家、芸術家を導いた。

総書記は 4・15 文学創作団の活動を検討し、主席の革命活動史を長編小説からなる叢書体系として集大成するようにし、それを『不滅の歴史』と名づけた。そして長編小説『革命の黎明』が脱稿されたときには、膨大な量の審査用の本を徹夜で読み通し、作品の種子から構成、スタイル、個々の事件、せりふにいたるまで具体的な教示を与え、主席の初期革命活動を英雄叙事詩的に綴った大作として完成させた。

その後、『苦難の行軍』『白頭山の麓』『厳しい戦域』『根拠地の春』など、叢書作品の創作を力強くおし進め、抗日武装闘争を勝利に導いた主席を形象化する作品創作の課題をりっぱに遂行させた。

総書記は 1975 年 5 月、党中央委員会宣伝扇動部および文学・芸術部門活動家におこなった演説『わが国の主体的芸術をさらに発展させるために』で、芸術をより高い段階へと発展させるための課題と方途を具体的に示し、創作家、芸術家を創作的高揚へと発奮させた。

総書記は主席の英姿を劇映画に登場させることに深い関心を向け、革命映画『燃える炎』の創作を発起した。この映画は、主席とその主体的な革命路線を実現するためにたたかった金亨権と康盤石の活動を内容とするものであった。こうして、主席の英姿を

登場させた初の革命映画『燃える炎』が完成されたのである。
総書記は、革命映画『燃える炎』の創作経験にもとづき、革命映画『司令部を遠く離れて』『最初の武装隊伍であった話』『白頭山』などを相次いで創作するよう導き、その後、主席の革命活動の全容を描く多部作劇映画『朝鮮の星』とその続編である『民族の太陽』の創作を指導した。
これと同時に、チュチェ時代の要求に合った新しい革命演劇を創作すべく演劇革命を賢明に導いた。
1972 年 11 月初旬、国立演劇劇場を訪れ、チュチェ時代にマッチした新しい革命演劇を創作する方針を示し、新しい革命演劇の開拓において提起される原則的問題、それに作家、芸術家が革命演劇を創作するための思想的・芸術的準備を着実におこなう課題を提示した。そして、その後には『城隍堂』を舞台にのせる課題を示し、その創作活動を具体的に指導した。
総書記は『城隍堂』の創作指導にあたって、自分の力を信じるべきであるという原作の種子について説明し、劇の構成と場の設定において古い殻を破り、主人公の生活を克明に描き出すよう細やかに指導した。また風刺劇のスタイルについても明らかにし、風刺劇だからといって一貫してコミカルでなければならないという法はなく、風刺劇も生活の論理にしたがうべきであり、コミックもあれば思索もあるというものにしなければならない、と説いた。さらに俳優の演技において新派的な残滓をなくし、巧みな話術を身につけるよう導き、俳優を語り上手な才人にならしめた。
また舞台美術においても、『血の海』式歌劇の流動式立体美術の成果を演劇の特性に合わせて導入し、演劇に音楽を取り入れて

人物の性格を強調し、ドラマの進展を促す手段となるようにした。
　総書記は革命演劇『城隍堂』の試演会を観覧し、演劇が名作として完成されたことに満足の意を表した。
　つづいて『血噴万国会議』『娘からの手紙』『3 人 1 党』を舞台にのせるよう導き、演劇革命の全盛期をもたらした。
　総書記は音楽、舞踊、サーカス芸術の発展にも大きな力を注いだ。
　総書記は、舞台芸術において音楽舞踊総合公演に力を入れ、その演目と形式において図式主義の古い殻を打ち破り、それを民族的特性と朝鮮人民の現代的美感に合わせて多様に革新すべく方針を示した。そして、万寿台芸術団の音楽舞踊物語『楽園の歌』の創作過程を何度も指導し、完成させた。
　総書記は、サーカスの創作において主体性を確立し、スポーツと芸術を結合するという党の方針を具現させ、各種の重心サーカス、空中サーカス、軽業やマジックにいたるまで、絶妙なサーカスの世界がくりひろげられるようにした。
　総書記の指導により、朝鮮では 1970 年代に文学・芸術が全面的に開花し、主体的文学・芸術の全盛期が到来した。

7　祖国統一の宿願を抱いて

　金正日総書記は、分断されたままの祖国を次代に引き渡すなら、朝鮮のどの共産主義者、どの民族主義者も、祖国と民族にたいし自己の義務を果たしたとはいえないとした金日成主席の言葉

を肝に銘じ、統一の途上に横たわる難関と試練を克服し、民族最大の宿願である祖国統一偉業を実現するたたかいを力強くおし進めた。

総書記は祖国統一をめざすたたかいにおいて、1972 年に主席が示した自主、平和統一、民族大団結を内容とする祖国統一 3 大原則の貫徹を基本としていくよう導いた。

7・4 南北共同声明〔16〕が発表された後、総書記は祖国統一の 3 大原則を貫徹する闘争を精力的に指導した。

1972 年 7 月 14 日の党中央委員会責任幹部との談話『祖国統一の 3 大原則を貫徹するため断固たたかおう』で、7・4 共同声明発表後の内外情勢を詳細に分析し、今後の祖国統一問題の解決をめざすたたかいにおいては、主席によって示され、南北共同声明によって確認された祖国統一 3 大原則の貫徹を基本としていくべきであると指摘した。

総書記は祖国統一 3 大原則を貫徹するため、北南対話に深い関心を払った。

総書記は幹部たちに、われわれは分裂のための対話ではなく、統一のための対話を主張する、なんとしても南朝鮮当局者を協商の場に引き出すべきだと強調した。

当時、南朝鮮当局者の二面術策により、7・4 共同声明に明記された調整委員会の構成、運営が遅延し、1971 年 9 月から始まった北南赤十字予備会談も決着していなかった。

総書記は北南赤十字予備会談に参加するメンバーに、南朝鮮当局者が共同声明に署名しておきながら「対話のある対決」を云々し、統一気運に水を差す行為を働いていると指摘し、会談で堅持

すべき原則的問題、そして早急に本会談に移る問題などについての指針を与えた。

一方、総書記は祖国統一 3 大原則の固守、貫徹に向けての政治闘争に大きな意義を付与した。そして、マス・メディアを通じて、共同声明発表後 1 カ月のあいだに南朝鮮で起こった事態の真相を暴露し、同時に、言論戦を展開して南朝鮮当局者の背信行為を断罪するようにした。

こうして、赤十字会談は 1972 年 8 月から本会談に入り、同年 10 月からは北南高位級会談開催のための北南調整委員会が開かれることになった。これは、北南の障壁を取り除き、往来の道を開いた大きな成果であった。

総書記は 1970 年代の後半期にも、幅の広い北南対話を実現するために采配をふるった。

これを受けて、共和国の諸政党、大衆団体は、連席会議を開き、南朝鮮の諸政党や大衆団体、それに各階層の人民、海外同胞に北南政治協商会議の開催を呼びかける手紙を採択するなど、各種の主動的な提案を重ねてうちだした。しかし南朝鮮当局者は、統一より緊急なのは「平和定着」だと主張して人為的な障害をつくりだし、大規模な軍事演習をくりひろげて対話と接触を遮断した。

北南対話は再び暗礁に乗り上げた。しかし、対話の全過程は、祖国統一の新たな局面を開くうえで大きな前進をもたらし、全民族の平和統一への熱望をいっそう盛り上げた。

四　1980 年 10 月～1989 年 12 月

1　党と革命発展の新たな里程標

朝鮮労働党第 6 回大会

朝鮮労働党と朝鮮人民は思想、技術、文化の 3 大革命を力強く展開し、第 5 回党大会が提示した課題を完遂することによって、社会主義の完全な勝利を早め、全社会のチュチェ思想化を強力に推進することができるようになった。そして 1979 年 12 月の党中央委員会第 5 期第 19 回総会では、翌年の 10 月に朝鮮労働党第 6 回大会を招集することが決定された。

金正日総書記は第 6 回党大会を、党の業績を総括し、チュチェ偉業の新たな里程標を示す祝典とする構想のもとに、その準備を進めた。

総書記は党中央委員会のスローガンを発表して、政治的熱意と勤労の成果をもって党大会を迎えるよう党員と勤労者を奮い立たせ、党の隊伍をうちかため、大衆を党のまわりにかたく結集して革命の政治的基盤をゆるぎないものにした。そして、1980 年度の人民経済計画を党大会開催までに完遂するため「100 日間戦闘」を提唱して全党と全人民を立ち上がらせるとともに、記念碑的建造物の建設を指導した。

総書記は大会の文書の準備、とりわけ党規約の草案作成に大きな意義を付与し、それを政治的、思想的に完璧なものにするため

心血を注いだ。総書記は党活動で得た成果と経験にもとづき、朝鮮労働党の性格と指導思想を金日成主席が創始したチュチェ思想と結びつけて定義づけ、党の最高目的は全社会のチュチェ思想化を実現することであると規定した。同時に、チュチェ思想にもとづく全党の思想、意志の統一と団結を強める問題、思想、技術、文化の 3 大革命を社会主義建設における党の総路線としてとらえていく問題をはじめ、党建設と党活動において原則的意義をもつ諸問題を規約に盛り込むよう具体的に指導した。

総書記は第 6 回党大会と党創立 35 周年の祝賀行事を大規模なものにし、それを最高の水準でおこなうため不眠不休の活動をつづけた。このことは大会を目前にひかえた 10 月 5 日の午後以降の活動を見てもうかがえる。総書記はまず牡丹峰（モランボン）競技場（現在の金日成競技場）でマスゲーム『党の旗のもとに』の試演を指導し、平壌第 2 デパートと朝鮮中央通信社を現地指導した後、完工した蒼光通りを見て回った。それから、金日成広場で平壌市民のパレードに関する事柄を指導した後、早暁に人民大学習堂の建設現場に赴き、ついで大会の場である 4・25 文化会館を訪れてその準備状況を調べた。そして午前 5 時に執務室にもどって党大会の文書に目を通し、新作の劇映画を観た。

朝鮮労働党第 6 回大会は朝鮮人民の期待と関心の中で 1980 年 10 月 10 日、平壌で幕を上げた。大会には朝鮮労働党の代表とともに、118 カ国の党および政府代表団と代表、各界人士が参加した。

大会では主席が党中央委員会の活動報告をおこなった。主席は総括期間に革命と建設でおさめた勝利と経験について述べ、全社

会のチュチェ思想化を朝鮮革命の総体的任務として宣し、それを遂行するための課題と方途を全面的に提示した。

大会は、総書記を朝鮮労働党中央委員会政治局常務委員会委員、党中央委員会政治局委員、党中央委員会書記、党中央軍事委員会委員に選出した。

大会では、総書記によって起草された党規約が全会一致で採択された。

第 6 回党大会は、朝鮮労働党を永遠にチュチェの党として強化発展させ、チュチェの革命偉業を代を継いで完成させる党の基礎構築において新たな里程標を示した歴史的な大会であった。

党の基礎構築の完成

総書記は党の基礎構築をひきつづき強力に推進することによって、革命偉業継承における重要な問題を解決した。

党の基礎を築くことは、党建設においてゆるがせにできない根本問題であり、革命と建設にたいする党の指導を強化するための必須の要求である。またこれは、革命偉業継承の問題が前面に提起されたとき、とくに重要な問題となる。

総書記は革命偉業継承における基礎がための重要性を推し量り、すでに 1974 年 2 月に党の基礎構築方針をうちだし、その実現に向けて活動をおし進めてきた。こうして、1970 年代に党の基礎構築では少なからぬ成果が達成された。しかし、これは党の基礎構築が完成したことを意味するものではなかった。党の基礎をしっかり築いてこそ、新たな高い段階へと発展する革命の要求に即

して全社会のチュチェ思想化に拍車をかけ、社会主義の完全な勝利を早めることができるのであった。

総書記は、1980 年 12 月の党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部、平壌市党委員会の責任幹部協議会と、1981 年 4 月の道党責任書記協議会で、党の基礎構築をひきつづき深化させるための指導指針を示した。総書記は、党の基礎をしっかり築くためには、先を見通して幹部の陣容をかため、党内に一糸乱れず行動する革命的規律を確立し、党員の組織観念を高め、党生活を強化しなければならないとした。

総書記は党の基礎を築くにあたって、先を見通して党に限りなく忠実な人たちで幹部の陣容をかためることに第一義的な関心を払った。そして、すべての党組織が忠実性を基本にして、党と永遠に運命をともにする人たちで、老、中、青を組み合わせて幹部の陣容をかためる方針を示した。また、党の基礎構築を指導するにあたって、党内に一糸乱れず行動する革命的規律を確立し、党員の組織観念を高め、党生活を強化することに大きな力を注いだ。

総書記はすべての幹部と党員が党の指導に忠実にしたがうようにすることに深い関心を払った。そして、「80 年代の金赫、車（チャ）光秀（グァンス）〔17〕になろう！」というスローガンを提示し、朝鮮革命のれい明期に主席を団結の中心として仰ぎ、忠誠を尽くした青年共産主義者の模範を活動家が見習うようにした。

総書記はとくに革命の指揮メンバーである幹部たちに厚い信頼を寄せ、かれらが党にしたがい変心することのない真の忠臣として生き、働くよう導いた。

ある日、総書記は幹部たちと仕事について討議した後、つぎの

ように語った。

―信頼があってこそ同志があり、愛があってこそ同志関係が成り立つものである。信頼とはすなわち愛である。信頼にはじまり信念によってかためられるのが同志の関係である。苦難も試練もともに乗り越え、喜びも悲しみもともに分かち合い、運命をともにするのが同志である。いったん志を同じくすれば永遠に運命をともにしなければならない。チュチェ偉業のために尽くすわれわれはみな同志なのだ。わたしはみなさんを同志として信頼し、みなさんもわたしを同志として信頼して仕事をやっていこう。

数日後、総書記はまた幹部たちに、人は権力にへつらってはならず、環境の変化にしたがって行動し、風向きを見て帆を掛けるような信念のない人間になってはならない、人間を尊重してしたがうべきであって、地位を見てしたがってはならない、人間を知り人間を愛すべきである、同志を人間として愛し信頼してこそ、信念がかたまり道義心が生まれるものである、忠誠の信念と信義を守れば忠臣になり、それを捨てれば奸臣になってしまう、と語った。

総書記は老革命闘士に会うたびに、老いても忠実性は変わらず、最後まで真の忠臣として生きるべきであって、絶対に政治的無能になってはならないと言った。忠臣として人生のスタートを切ったかれらが、人生の終わりも忠臣としてまっとうすることを望んだのであった。

ある日、総書記は幹部たちと席をともにした。そのなかには40代、50代の幹部もおり、還暦を過ぎた70歳近い幹部もいた。

総書記は、長年金日成同志と行をともにしてきたみなさんが

年をとっていくのが切ない、大切なことは老いても忠実性が変わらないことだ、みなさんはオオヤマネコではなく虎にならなければならない、すなわち真の忠臣になるべきであって政治的無能になってはならない、忠実性は年に反比例するのでなく正比例すべきである、そうしてこそ最後まで党と革命に忠誠を尽くす真の活動家になれる、と述べた。

総書記のあつい同志愛と細やかな教育によって、幹部と党員、勤労者はひたすら党を高く仰ぎしたがおうとする忠誠心を確固たる信念、信義とし、党の方針を断固擁護、貫徹する革命的気風が全社会にみなぎるようになった。

総書記は、勤労者団体との活動を改善することによって、すべての勤労者、とくに青少年を党と領袖に限りなく忠実な真のチュチェ型の革命家に育てることに深い関心を払った。

総書記は青年運動の発展に新たな転換をもたらすことを決意し、第 6 回党大会が開かれた翌年の 1981 年 10 月、朝鮮社会主義労働青年同盟第 7 回大会を迎えて「朝鮮労働党の頼もしい青年前衛になろう！」というスローガンを提示し、社労青に「青年前衛」という栄誉ある称号を与えた。

朝鮮の青年運動はこれを契機にチュチェの革命偉業を継承、完成する闘争の新たな発展段階に入り、すべての青年が党と領袖を命をかけて守り、社会主義建設において先鋒隊、突撃隊の役割をりっぱに果たすようになった。

総書記は青年同盟の活動とともに、職業同盟、農業勤労者同盟の活動にも深い関心を払った。

1984 年 5 月、全国職業同盟活動家講習会参加者への書簡『職

業同盟の活動をさらに強化するために』で、革命の指導階級である労働者階級の前衛的役割を高めて全社会のチュチェ思想化を促すための具体的な課題を示した。また 1985 年 12 月には、全国農業勤労者同盟活動家講習会参加者への書簡『農業勤労者同盟の活動をいっそう強化するために』で、農村で思想、技術、文化の 3 大革命を強力に推進するための課題を示した。こうして、労働者、農民をはじめ広範な勤労者を網羅する職業同盟や農業勤労者同盟組織の機能と役割はいっそう高まり、同盟の活動に画期的な転換がもたらされた。

総書記は党の基礎構築を力強くおし進める一方、チュチェの党建設理論を深化、発展させ、党を将来を見通して建設することに大きな力を傾けた。

総書記は、打倒帝国主義同盟結成 56 周年に当たる 1982 年 10 月 17 日に、論文『朝鮮労働党は栄えある「トゥ・ドゥ」の伝統を継承したチュチェ型の革命的党である』を発表し、党建設の合法則的路程と歴史的経験を総括し、将来を見通して党を建設するうえで提起される理論的・実践的問題に完璧な解答を与えた。

この論文では、朝鮮労働党はチュチェ思想を指導指針として建設され活動する党、全党に唯一思想体系が確立し、チュチェ思想にもとづいて一枚岩の統一団結をなし遂げた党、組織性と規律性の強い鉄の党、人民大衆との血縁的なつながりを保ち、かれらの役割を高めてチュチェの革命偉業の完成をめざしてたたかう党、チュチェ型の革命的党であると、その本質的特性を明らかにした。

また、社会主義・共産主義偉業の遂行における党の地位と役割を深く分析し、将来を見通して党を建設しなければならないとし、

全党のチュチェ思想化を党建設においてつねに堅持していくべき根本問題として提起し、それを実現するための課題を示した。

この論文は、チュチェの革命偉業をりっぱに完成するうえで堅持すべき理論的・実践的武器となり、労働者階級の革命的党建設の方向を示し、自主偉業の実現をめざす闘争へと奮い立たせる旗じるしとなった。

2　忠誠の最高化身

不滅の大記念碑

金正日総書記は、金日成主席の誕生 70 周年を機に、主席の偉大さと革命業績を末長く伝え、さらに輝かすべく構想を練り上げ、それを実現するための活動を指導した。

総書記はなかでも、主席が祖国と人民の前に築いた革命業績を後世に伝える事業を重要視し、平壌にチュチェ思想塔と凱旋門を建立する構想を示した。

そして数回にわたってチュチェ思想塔と凱旋門の形象図案と模型を見、その規模と形式、内容はもとより、細部の要素にいたるまで最高の水準のものにするよう具体的な指導をおこなった。

チュチェ思想塔の形はのろし形にして、塔身の上ののろしは夜にも高く燃え上がるようにし、塔身の前には朝鮮労働党のマークをかかげた労働者、農民、インテリの 3 人の群像を立てるようにした。そして塔の位置は平壌市の中心である金日成広場と向かい

合う大同江の対岸に定め、塔の高さはのろしを含めて 170 メートルにすることにした。

凱旋門は主席が凱旋演説をおこなった牡丹峰のふもと、金日成競技場の表通りに建造し、民族的形式に現代性を盛り込んだ朝鮮式のものにするよう指示した。そして凱旋門には頌歌『金日成将軍の歌』と白頭山の全景を彫りつけ、主席が「解放の千里の道」を歩んだときから祖国を解放して凱旋するまでの期間を示す「1925～1945」という年数を浮き彫りにするようにした。

総書記は記念碑の形象方向を示すとともに、チュチェ思想塔と凱旋門建立に関する党中央委員会政治委員会の決定にもとづき党員突撃隊を組織し、その工事に当たらせた。

建設工事がはじまると、全人民がそれを積極的に支援した。そして南朝鮮の人民と海外同胞、世界各国の人民からもさまざまな文字を刻んだ高級石材が送られてきた。

こうして、主席の誕生 70 周年をひかえてチュチェ思想塔と凱旋門の建設工事は完工した。

ついで総書記は、主席が凱旋演説をおこなった革命史跡である牡丹峰競技場を近代的に改造することを発議した。そして、建設現場に赴いて最終段階の施工で提起されている諸問題を解決し、競技場を「金日成競技場」と命名した。こうして、競技場の改造工事はわずか 4 カ月で完成した。

大規模の政治祝典

総書記は、主席の誕生 70 周年祝賀行事を大規模の政治祝典に

するため心血を注いだ。

まず、主席の誕生日である 4 月 15 日をひかえて平壌で開かれていた最高人民会議第 7 期第 1 回会議を祝賀行事の幕開けとした。

そして、5000 人の芸術家が出演する音楽舞踊叙事詩『栄光の歌』の創作を発議し、数十回にわたって指針を与え、自ら現場に出向いてその創作活動を指導した。総書記は、主席の 70 星霜にわたる革命活動史を 10 年単位に区切って時代相が現れるようにし、人民に広く知られている名曲を組み入れて主席の革命活動史全般を回顧できるようにした。こうして、『栄光の歌』は主席の革命活動史を叙事詩的スペクタクルで描き出す傑作として完成された。

また、5 万人の青少年学生によるマスゲーム『人民は金日成主席を称えます』をはじめ、祝賀夜会や朝鮮と世界各国のアーチストによる合同公演なども特色のあるものにするよう指導した。

祝日を間近にひかえた 4 月 13 日、総書記は自ら現地に赴き、マスゲームと祝賀夜会の予行演習を最終的に指導した。

総書記の指導により、主席の誕生 70 周年祝賀行事は成功裏におこなわれた。

主席の誕生 70 周年を迎えた 1982 年は、総書記の誕生 40 周年に当たる年でもあった。これに際して、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会は、総書記に共和国英雄称号を授与する政令を発表した。

2 月 16 日、主席は錦繍山(クムスサン)議事堂で総書記の誕生 40 周年を祝う午餐会を催し、祝辞を述べた。

実に、1982 年は朝鮮労働党史において特筆すべき出来事が重

なった歴史的な年であった。

チュチェ思想の全書

総書記は、主席によって創始されたチュチェ思想を深化、発展させ、自主時代の指導思想としていっそう輝かせた。

総書記はチュチェ思想の根本原理とその真髄をなす内容を研究し、それにもとづき主席の革命思想を現代と革命発展の要請に即して新たな原理と内容により総合、体系化し、全面的に深化、発展させていった。

チュチェ思想を原理的に総合、体系化し、深化、発展させた著作が 1982 年 3 月 31 日、全国チュチェ思想討論会に寄せた論文『チュチェ思想について』である。

論文にはチュチェ思想の内容がつぎのような体系で集大成されている。

1　チュチェ思想の創始

2　チュチェ思想の哲学的原理

3　チュチェ思想の社会・歴史原理

4　チュチェ思想の指導的原則

5　チュチェ思想の歴史的意義

総書記は、党員と勤労者のあいだでチュチェ思想教育を強化し、チュチェの革命観を確立するうえで提起される理論的・実践的問題についても深い科学的解答を与えた。

1986 年 7 月に発表した著作『チュチェ思想教育における若干の問題について』で、チュチェ思想は朝鮮革命を勝利へと導く思

想であることを改めて明らかにし、チュチェ思想教育の本質、チュチェ思想の原理教育をはじめ忠実性教育、党政策教育、革命伝統教育、階級的教育、社会主義的愛国主義教育など、すべての思想教育をチュチェ思想の根本原理と結びつけておこなう課題と方途を示した。

1987 年 10 月に発表した著作『チュチェの革命観を確立するために』では、革命の主体は領袖、党、大衆の統一体であるから、革命観を確立するためには、領袖観、組織観、大衆観から正しくうち立てなければならず、革命観を真のものとするには、それが道徳観によって裏打ちされ人生観化されなければならないとした。そして、大切なことは革命的領袖観を確立することであるとし、そのためには領袖が社会的・政治的集団の生命の中心であることを正しく認識しなければならないと強調した。

『チュチェ思想について』をはじめ総書記の諸著作は、党員と勤労者をチュチェ思想で武装させる強力な理論的・実践的武器となった。

3　経済建設の新たな高揚

「80 年代の速度」創造

金正日総書記は社会主義経済建設に新たな転換をもたらすため、「80 年代の速度」創造運動を発議し指導した。

社会主義経済建設に新たな転換をもたらすことは、第 6 回党大

会で金日成主席が示した社会主義経済建設の 10 大展望目標を成功裏に達成し、社会主義の完全な勝利を早めるための切実な要求であった。

総書記は党中央委員会責任幹部協議会を招集し、社会主義経済建設で新たな大高揚を起こすよう強調した。そして、「チョンリマの大高揚期の勢いで『80 年代の速度』を創造しよう！」というスローガンをうちだし、すべての部門、すべての分野で「80 年代の速度」創造運動を展開する方針を提示した。

「80 年代の速度」創造運動は、チョンリマの大高揚期に朝鮮人民が発揮した革命精神を受け継ぎ、速度戦の原則を具現して、社会主義経済建設に大高揚をもたらす大衆的進軍運動である。

総書記はチョンリマ運動先駆者大会、全国青年活動者会議、人民経済部門別会議などを招集し、人民を新たな速度創造へと立ち上がらせ、剣徳鉱業総合企業所第 3 選鉱場の建設で「80 年代の速度」の模範を創造するよう指導した。強力な建設陣を組み、すべての工程で立体戦をくりひろげるようにすると同時に、全党、全国、全人民がこぞって第 3 選鉱場の建設を支援するようはからった。こうして、この膨大な工事はわずか 1 年で完成した。この過程で「80 年代の速度」の模範が創造された。

こうした成果にもとづき、総書記は「80 年代の速度」創造運動をひきつづき推進した。

総書記は急増する鉄鋼材の需要をみたすため、主要鉄鋼材生産基地を現地指導した。

1984 年 5 月、金策製鉄所を訪れた総書記は、製鉄所の主要生産工程を見て回り、生産正常化におけるネックがなんであるかを

聞き取った。それは冷間圧延ロールと精鉱が不足していることであった。

この問題を解決するため、鉄鉱石生産基地の茂山(ムサン)鉱山を訪れた総書記は、幹部たちに、きのう金策製鉄所に行ってきたが、そこでは精鉱だけ提供してくれれば鉄鋼材の生産を増大させることができるということだった、わたしは茂山の鉱夫を信頼して、かれらに精鉱のことは心配するなと言った、ここで精鉱の生産を増やすにはなにが必要なのか、と尋ねた。

鉱山の幹部は、はく土の処理を先行させ、採鉱量を増やすには回転式さく井機が必要なので、外国と契約ずみのさく井機を早く取り寄せてもらいたいと答えた。そのとき総書記は、かれらに自力更生の革命精神を植え付けるべきだと考え、茂山鉱山で全国的な回転式さく井機穿孔競技をおこなう措置を講じた。

この措置によって全国各地から駆けつけた競技参加者たちは、国産の回転式さく井機の非合理な箇所を改造し、設備をフル稼働させ、その性能を以前の 2 倍以上に高めた。この過程で鉱山の幹部たちは、むずかしいと考えていた鉄鉱石の生産問題を自力で解決できるという自信を得た。

総書記は、増大する圧延鋼材の需要を充足させるためには、製鉄所に必要な圧延ロールも国内で製作しなければならないとし、この問題を解決するために龍城(リョンソン)機械工場の労働者を訪ねた。そして、かつて 6000 トンプレスを製作したその意気込みで、党創立 40 周年を迎える翌年までに 1 万トンプレスを製作するよう呼びかけた。こうして、龍城の労働者は朝鮮の機械工業史上はじめての 1 万トンプレスをつくりあげた。

総書記は、大型酸素分離機の生産にも深い関心を払った。当時、大型酸素分離機の生産は、朝鮮の機械工業の発展にとってきわめて重要な問題の一つとされていた。しかし、それは容易なことではなかった。

総書記は楽元(ラクウォン)機械工場の労働者を信頼して、かれらにそれを製作する課題を与えた。そして工場建設総計画図と俯瞰図を検討し、強力な建設陣容を編成するなど必要な諸対策を講じた。

1984 年 10 月、楽元機械工場を訪れた総書記は酸素分離機分工場を見て回り、労働者の仕事ぶりを称賛した。総書記が訪れて間もなく、楽元の労働者は自分の技術と力で大型酸素分離機をつくりあげた。これは朝鮮の機械工業の発展におけるいま一つの革命であった。

総書記の指導は、人民経済の先行部門である基幹工業だけでなく、人民生活の向上をはかる細かい部門にまで及んだ。

生活必需品の生産に深い関心を寄せていた総書記は平壌市軽工業製品展示会を催し、1984 年 8 月 3 日、自ら展示会場へ足を運んだ。そこには、工場、企業所の生活必需品職場、家内生産協同組合、家内作業班、商業部門のリサイクル班、家内サービス員などが出品した各種の製品が展示されていた。

総書記は、長時間にわたって展示品を見て回った後、随行した幹部たちに、大衆的運動を展開して一般消費物資を生産し、それを直売店を通じて販売することにし、すべての製品を試作品並みにつくるよう具体的な課題を示した。そして、まず年末までに平壌市のすべての区域と郡に直売店を設けるよう指示した。この日を契機に「8・3 大衆消費財」を生産する大衆的運動ののろしがあ

がり、全国の市・郡・区域に「8・3 大衆消費財」を販売する直売店が設けられた。これは、朝鮮における新たな大衆運動である「8・3 大衆消費財」生産運動の発端となり、軽工業革命と人民生活の向上に大いに寄与することになった。

総書記は「80 年代の速度」創造の日々に、主席の構想を実現すべく大自然改造事業を賢明に導いた。

自然改造事業を進めるにあたり、西海(ソヘ)閘門の建設に主力を集中させた。西海閘門の建設は、8 キロの外海をせきとめ、3 つの閘室と数十の水門を有する大堤防を築く膨大な工事であった。

総書記は、閘門建設を統一的に指揮する指導陣容と技術陣容を整え、社会主義建設で鍛えられ建設経験を積んだ軍人と機械手段によって建設隊を編成する一方、閘門の建設に必要な設備と資材を優先的に供給する措置を講じた。また、海上作業を専門とする海上突撃隊をはじめ各種の突撃隊を組織し、全国的に閘門建設を支援するようはからった。

総書記は閘門の建設現場を幾度も訪れ、適切な指導をおこなった。現地で工事の主要攻略方向を明示するとともに、主体的な新工法を大胆に取り入れ、速度戦を展開して工事を早める方途を示すことによって、建設全般に新たな飛躍をもたらした。そして、機械設備の追加提供措置を講じ、政務院の委員会、部をはじめ中央と地方の当該部門の責任幹部が現地で協議会を開き、必要な設備、資材をそのつど供給する対策を立てるよう指示した。また、閘門の建設で偉勲を立てた革新者を称賛し、これからも仕事に精を出してみなが英雄になるようにと激励した。

このように総書記の大胆でスケールの大きい作戦と巧みな指揮

によって、西海閘門はわずか 5 年のあいだに自国の設計と技術、資材でりっぱに建設された。

総書記の指導のもとに、朝鮮人民は人民経済の各部門で「80 年代の速度」創造運動をくりひろげることによって、第 2 次 7 カ年計画を完遂し、1987 年から第 3 次 7 カ年計画の実行にとりかかった。

第 3 次 7 カ年計画初年度の課題を遂行した成果にもとづき、総書記は 1988 年 2 月、共和国創建 40 周年まで「200 日間戦闘」を展開する方針をうちだし、それを勝利へと導いた。

総書記は、「すべての人が英雄のように生き、たたかおう！」というスローガンを提示し、党員と勤労者を新たな英雄的偉勲へと奮い立たせる一方、全国英雄大会でいま一度「200 日間戦闘」を展開するようはからった。新たな「200 日間戦闘」の期間に、生産と建設で一大高揚が起こった。

「80 年代の速度」を創造し、新たな展望計画を遂行する日々は、社会主義農村問題に関するテーゼを完全に実現するうえで大きな前進をもたらした日々でもあった。

総書記は、農村で思想、技術、文化の 3 大革命を強力に推進させるとともに、「農場の田畑は私の田畑」というスローガンを示し、すべての農場員が国の穀倉に責任をもつ主人としての態度で働くよう導いた。

総書記は主席の大自然改造構想を実現するため、西部地区の穀倉地帯と新しい干拓地の用水問題を完全に解決するための 800 キロの水路工事を精力的に指導し、農業の水利化をより高い水準で完成させることによって、朝鮮を灌漑の国に変貌させた。

経済管理をチュチェの要求どおりに

総書記は、チュチェの社会主義経済管理システムを正しく運用する事業を賢明に導いた。

総書記は、主席によって創出され、実践を通じてその正当性と生命力が実証されたテアン（大安）の事業体系〔18〕を正しく運用するため、工業の指導体系をさらに改善し完成することに大きな力を注いだ。

総書記は責任幹部を経済に明るい人でかため、支配人、党書記、技師長が三位一体となって企業所の管理をりっぱにおこなうようにする一方、国家の統一的計画の枠内で工場、企業所が独立採算制を正しく実施して、国家の利益と生産者大衆の利益を一致させるようにした。

1989 年 6 月、人民経済大学を視察した際、総書記は関係部門の幹部と教員、学者たちに、テアンの事業体系を正しく運用して生産を正常化すれば国の経済活動が円滑に運ぶとし、今後ともテアンの事業体系の要求どおりに経済を管理、運営するよう強調した。

その後、創立 45 周年を迎える人民経済大学の教職員、学生への書簡『チュチェの社会主義経済管理理論で武装しよう』で、社会主義経済管理の基本原理から経済管理のシステムと方法にいたるまで、社会主義経済管理で提起される諸問題に全面的な解答を与えた。

書簡は、テアンの事業体系は社会主義・共産主義建設の現在と

未来を代表する理想的な経済管理形態であり、共産主義的経済管理の原型であるとし、つぎのように指摘している。

「社会主義経済管理問題解決の歴史的経験は、社会主義経済建設においてテアンの事業体系にまさる経済管理体系はなく、また、ありえないことを実証しています。われわれは、朝鮮式のもっともすぐれた社会主義経済管理システムをもっていることに大きな誇りと自負を抱くべきであり、いかなる風が吹きつけようといささかも動揺することなく、チュチェの社会主義経済管理システムであるテアンの事業体系をあくまで擁護し、正しく運用しなければなりません」

総書記はこうした決意のもとに、社会主義経済を資本主義的市場経済に転換させようとする帝国主義者とブルジョア復活主義者の策動を粉砕し、チュチェの工業管理システムをあくまで擁護し正しく運用するよう導いた。

総書記は、主席によって確立された社会主義農業経営制度を強化し発展させることにも深い関心を払った。

党中央委員会書記局会議をはじめ多くの機会に、集団主義にもとづく社会主義農業経営制度を強化すべきであるとし、農業を集団主義にもとづく社会主義的方法で運営し、より現代化、工業化された大規模な共産主義的経営へと前進させるべきだと強調した。また、つとに主席が先鋒郡、龍淵(リョンヨン)郡に国営総合農場を創設し発展させてきたその業績と経験、社会主義農村問題に関するテーゼの思想にもとづいて農村問題を最終的に解決するため、協同的所有を漸次全人民的所有に移行させる措置を講じた。

5万所帯の住宅建設

総書記は、首都―平壌をさらに整備し、より文化的で安定した生活条件を市民にもたらすため、大通りと住宅の建設を指導した。

1980 年代に入り、平壌市の大規模な住宅建設は、紋繡（ムンス）通り、北塞（プクセ）通りの建設につぐ光復（クァンボク）通りの建設でその頂点に達した。

総書記は、数回にわたって光復通りの形象案を検討し、あらゆる面で遜色がなく、モデルとなるように、独創性と非反復性の原則にもとづき、スケールの大きい市街を形成するよう指示した。

こうして、幅 100 メートルの大通りの両側には正方形、円筒形、波形、屏風形、翼形などさまざまな形と高さの高層住宅を地形の起伏と調和して立ち並ばせ、住宅内部には家具や台所用品を完備し、区画ごとにサービス施設を配置し、道路には近代的な陸橋を設け、車道や横断歩道、緑地を広くとるなど、住民の生活上の便宜を最大限にはかった大規模な光復通りの形象案が完成した。

1986 年 1 月、総書記は光復通り建設工事を着工させた。そして統一的な指揮系統を確立し、建設で全面的な立体戦をくりひろげるようにした。

総書記は従来の慣例を破り、道路工事を優先させながら整地作業、緑地造成を含むすべての工程を同時におし進める全面的な立体戦を展開して工事を完了するという工法を示した。そして建設現場に出向き、すべての建築物を最高の水準で完成させるよう指導した。

総書記の構想と精力的な指導により、光復通りの建設は急ピッ

チで進められ、わずか 3 年のあいだに一つの都市に匹敵する街が生まれた。この時期に、体育村である青春通りやメーデースタジアムなど、第 13 回世界青年学生祭典のための重要建設も着々と進められた。

総書記は、光復通りの建設についで統一（トンイル）通りの建設を発議し、これをおし進めた。

1989 年 11 月の初め、総書記は党中央委員会の責任幹部につぎのように語った。

「わたしは、金日成同志の誕生 80 周年までに平壌市に新たに 3 万所帯の住宅を建て、骨組みができている光復通りの住宅と市内各地に建設中の住宅を完工させて、5 万所帯の住宅を建設する考えです」

こうして、再び大々的な住宅建設が進められることになった。建設者たちは、「もう一度光復通りのように建設しよう！」というスローガンのもとに工事を進めた。

光復通りに始まり統一通りに至る住宅建設の全過程は、総書記の大胆な建設構想の威力を示した誇り高い路程であった。

4　文化革命の旗をかかげて

教育革命

金正日総書記は、金日成主席が提示した『社会主義教育に関するテーゼ』を貫徹し、革命発展の要求に即して人民教育事業と

技術者、専門家の養成事業に転換をもたらすべく教育革命を賢明に指導した。

1984 年 7 月 22 日、全国教育活動者会議の参加者に送った書簡『教育事業をさらに発展させるために』で、総書記はつぎのように述べている。

「われわれは革命発展の新たな要請に即応して教育革命を起こし、学校教育事業を全般的に改善し教育の質を決定的に高めて、新しい世代を有能な革命的人材にりっぱに育てあげ、われわれの教育が国の科学技術の発展と社会主義経済建設によりりっぱに貢献するようにしなければなりません」

書簡は、チュチェ思想の根本原理にもとづき、社会主義教育は本質において人間を有力な存在に育てる人間改造事業であるとし、教育革命の内容とその遂行の方途を全面的に明示している。

総書記は、次代の教育を 1 歩遅らせれば国の発展が 10 歩遅れるとし、教育革命の方針を貫徹する活動を精力的に指導した。

高等中学校の教育の質を高めるため、モデルケースをつくり、その経験を全国に一般化させるようにした。

1984 年 4 月 28 日、総書記は新設された平壌第 1 高等中学校を現地指導した。総書記は教育施設や文化・厚生施設を見て回り、基礎教育を強化するためのモデルをつくり、これを一般化して高等中学での教育に質的改善をもたらし、優秀な生徒を育てるべきだと指摘した。そして、とくに高等中学の教育の質を高めるためには、教育内容を充実させ、教育綱領を正しく作成するとともに、教員陣容を有能な人でかためなければならないと強調した。

総書記は、中等一般教育で政治・思想教育とともに基礎科学と

基礎技術、外国語、芸能、体育の教育を強化するため、課目の内容を合理的に構成して、生徒の革命的世界観の骨組みをうち立て、かれらを知・徳・体を兼備した共産主義的人間に育成するよう指導した。

幼児と児童・生徒の知能教育に深い関心を寄せていた総書記は、ある日、人民大学習堂を現地指導した際、幹部たちに、自分も幼いころ世界の英雄の伝記を愛読したものだが、いまも記憶に新しい、だから有名な探検家や発明家、英雄、作家、音楽家、画家などの逸話や伝記形式の本をたくさん出版して子どもたちに与えようと語った。そして、子どもの判断力や応用能力、創造力を培うための各種の図書目録を提供した。また、ある出版社の児童用図書を見ては、このような本をたくさん出版して託児所や幼稚園、学校に送るとともに、書店で販売し、テレビを通じても大いに宣伝するようにと話した。

総書記は、高等教育の科学理論水準をさらに高め、現実発展の要請に即して技術教育システムを整備、完成する方向と方途を示した。

技術者、専門家の養成事業を改善するため、金日成総合大学をはじめ主要大学をりっぱに整備し、大学事業の振興をはかるよう指導した。そして、社会主義建設の現実的要求と世界の科学発展の趨勢に即して金日成総合大学をはじめ各大学の教育綱領を改善するとともに、実験・実習設備の現代化と博士院事業の強化、教育・科学陣容の充実化をはかった。

また、人民経済各部門が求めている高度の技術をもった実地技師を多く養成するため、工場大学や農場大学、漁場大学などを増

設する一方、テレビ放送大学の事業を改善し、人民大学習堂の役割を高めて勤労者の文化・技術水準を向上させ、全社会のインテリ化の実現に大いに寄与するようにした。

こうして、大学をはじめ正規の教育網がさらに整備され、20代、30 代の博士、学士（修士級の学位）など数多くの技術者、専門家が育った。

科学技術を世界的水準に

総書記は、科学技術を発展させる事業を積極的におし進めた。

当時、既存の経済的土台を効果的に利用して社会主義経済建設の 10 大展望目標を成功裏に達成し、社会主義制度の優越性を十分に発揮させるためには、科学技術を速やかに発展させなければならなかった。

総書記は、科学技術発展の趨勢と社会主義建設の現実的要求を深く洞察し、最短期間に科学技術水準をいちだんと引き上げることを決意した。

1985 年 8 月 3 日、党中央委員会の責任幹部におこなった演説『科学技術をさらに発展させるために』で、科学技術を新たな高い段階に発展させる課題と方途を示した。

この演説で、科学技術の発展において重要なのは、原料、燃料、動力問題と機械設備の現代化で提起される科学技術上の問題を解決し、生産技術工程と生産方法、経営活動を新たな科学的土台の上に引き上げる研究を深め、基礎科学を発展させて新しい科学技術分野を開拓することであると指摘した。

総書記はまず、すべての幹部が科学技術にたいする観点を正すようにした。同時に、経済発展において緊要な科学技術上の問題を解決する措置を講じた。

また、科学技術情報活動を強化して先進科学技術を朝鮮の実情に応じて取り入れる一方、世界知的所有権機関をはじめ国際機構の活動に積極的に参加して、世界各国との科学技術交流を活発におこなうようにした。

そして、党中央委員会第 6 期第 11 回総会で、科学技術を最短期間に世界的水準に引き上げる課題を前面にうちだし、その対策を真摯に討議するようはからうとともに、全国学位・学職所有者会議や全国発明家大会、全国科学技術祭典などを開催し、科学者、技術者の責任感と熱意を高めるようにした。

総書記は科学院や科学研究機関を訪れ、科学者、技術者の研究状況を調べて懸案を解決し、科学研究活動で成果をおさめるよう励ました。そして、現地で党中央委員会・政務院責任幹部協議会を招集し、科学技術を速やかに発展させる方途を示した。総書記は、国が栄えるためには科学技術を速やかに発展させなければならない、いまからでも科学技術の発展に力を入れれば、やがてわが国は豊かな国になれる、われわれの前途は楽観的であると述べた。

その後も数回にわたって国家科学院を訪ねた総書記は、科学技術を重視することについて重ねて強調し、電子・金属・レーザー工学をはじめ重要な科学部門を全面的に発展させ、一日も早く国の科学技術をもりたてるための具体的な課題と方途を示した。

総書記の精力的な指導によって、朝鮮の科学技術は時代の先端

をめざして発展し、社会主義経済建設に多大の貢献をなした。

文学・芸術の花園を香り高く

総書記は、1970 年代の文学・芸術の全盛期におさめた成果をかため、現実発展の要請に即して主体的な文学・芸術をいっそう発展させるよう導いた。

1981 年 3 月、全国作家・芸術家活動者大会参加者に送った書簡『主体的文学・芸術をいっそう発展させるために』で、文学・芸術をより高い水準に引き上げる課題を示した。そして、主席の名作をさまざまな形式の文学・芸術作品にする活動をひきつづきおし進めるよう強調した。また、映画、歌劇、演劇、音楽、舞踊、美術、サーカスなど、文学・芸術の各分野の課題とその遂行の方途を明示した。

総書記はオープン・セット街の建設を発議し、それを指導した。

1981 年 12 月には、完成間近のオープン・セット街を視察し、提起されていた種々の問題を解決した。こうして、オープン・セット街は 1982 年 2 月、総書記の誕生日に際して完成された。

総書記は『血噴万国会議』を『城隍堂』式の革命演劇につくりあげる課題を提示し、その創作活動を指導した。ついで、主席が抗日革命闘争期に創作した『娘からの手紙』『3 人 1 党』『慶祝大会』などを『城隍堂』式の演劇として完成させた。

また、歌劇『春香伝』を民族歌劇芸術のモデルとして完成させ、朝鮮式民族歌劇創造の新境地を開いた。

総書記は『栄光の歌』や 5000 名の大公演『幸せの歌』をはじ

め多くの音楽舞踊叙事詩の創作、公演を細やかに指導して、舞台芸術に飛躍的な発展をもたらした。

総書記は、舞踊芸術の発展にも深い関心を払った。

舞踊芸術発展の趨勢と実態を深く洞察した総書記は、実用的な舞踊表記法を考案する研究チームを組織し、研究の方向と方途を示した。そして、舞踊表記法の研究が完成したときには、現代的な技術手段によって裏打ちするため、タイプや印刷、テレックス送信ができるようにした。こうして 1987 年 2 月、字母式舞踊表記法は完成を見た。舞踊表記法の創始は舞踊芸術の発展における一大革命であり、人類の文芸史に特筆すべき出来事であった。

総書記は、ユニークな電子音楽を創造し、発展させることにも心血を注いだ。

エレクトロニック楽団の典雅な音楽性を生かすことに深い関心を払っていた総書記は、全国少年音楽コンクールでスポットを浴びた歌の名手たちの才能を尊び、かれらを個性豊かな独唱歌手に育てる一方、奏者たちも多様な音色をもつ電子楽器で民謡やクラシック、現代音楽をひきこなせるように指導した。総書記が結成し育てたポチョンボ・エレクトロニック・アンサンブルやワンジェサン・ポップ・アンサンブルは、歌手の情緒豊かな歌、ソリストの独特な奏法とテクニック、舞踊手のリズミカルな律動によって内外で絶賛を博した。

その後総書記は、歌謡『わが国がいちばんだ』をもとにした多部作劇映画『民族と運命』で、各主人公の生活を深く描き出すことによって愛国主義思想がにじみ出るようにした。こうして劇映画『民族と運命』は、朝鮮民族の大団結の実現に大いに寄与した。

総書記は、文学・芸術を指導し発展させる過程でおさめた成果を理論的に体系化し集大成して、『演劇芸術について』『舞踊芸術論』『音楽芸術論』『美術論』『主体的文学論』などを著した。

これらの著作は、文学・芸術のさらなる発展のための指針となった。

保健医療事業とスポーツ活動の発展にも

総書記は人民保健医療事業とスポーツ活動に深い関心を払い、これに大きな力を傾けた。

平壌産院、咸鏡南道口腔疾患予防院をはじめ、各地に数多くの病院を設け、保健医療事業の現代化、科学化を推進させた。

総書記は、保健医療部門で党の予防医療方針を貫徹して、医療サービスを改善し、医師の資質を高める課題を示した。そして、保健医療部門の従事者に、医師は人々の健康を守る義務を負っているので、人々の健康のために尽くさなければならないと強調した。

1985 年 4 月、総書記は全国医療従事者大会の参加者に『保健医療事業をさらに改善強化するために』と題する書簡を送った。

書簡では、保健医療事業を改善することは革命発展の切実な要求であるとし、人民的な保健医療制度をいっそう発展させ、国家の医療上の恩恵が人民によりよくゆきわたるようにしなければならないと述べた。

そして、重要なことは、衛生防疫活動を強化して疾病と公害を未然に防ぎ、衛生宣伝活動と医師区域担当制を強化することであ

るとし、診断と治療の方法を改善し、医療サービス専門化の水準および医療従事者の責任感と役割を高めることについて強調した。また、医科学技術を発展させ、医療従事者の養成事業および保健医療部門にたいする物質的な要件保障と指導を強化することについて指摘した。

総書記は、医師のまごころがすなわち「妙薬」であるとし、医療従事者が党の保健医療政策を正しく貫徹するよう導いた。そして、甑山（ツンサン）郡の潮干狩りの娘や清川（チョンチョン）江鉄橋工事現場の青年のように、死に瀕していた勤労者を救うため、ヘリコプターや艦船を出動させ、有能な医療陣と高価な薬を送った。また、三つ子や四つ子が生まれると、国が栄える吉兆だとし、銀製の装刀や金の指輪を贈った。

総書記は、スポーツの発展にも深い関心を払った。

1972 年 6 月、4・25 体育団を結成し、これをモデルにして各種目のスポーツを発展させるよう導いた。

こうして朝鮮の選手は世界選手権大会やオリンピック、ユニバーシアード、アジア競技大会などの国際競技に参加し、世界卓球の「女王」となり、射撃、ボクシング、レスリング、器械体操など多くの種目で金メダルを獲得した。

主体的スポーツの年代記に誇らしい成果を記録した 1985 年の 11 月末に、全国スポーツマン大会が開催された。この大会を契機に、人民のあいだでスポーツにたいする関心が高まり、スポーツ活動はいちだんと活気をおびるようになった。

1986 年 5 月、総書記はスポーツ部門の活動家を前にして、『スポーツの大衆化とスポーツ技術の速やかな発展のために』と

題する談話を発表した。

談話では、スポーツを大衆化、日常化するという党の方針を貫徹するためには、学校での体育と機関、企業や協同農場でのスポーツ活動を強化するとともに、スポーツ月間活動と模範体育郡創造運動を活発にくりひろげなければならないと指摘した。

そして、スポーツ部門では現代のスポーツ技術発展の趨勢に即したスポーツ技術を発展させ、その水準を一日も早く世界的水準に引き上げるべきだとし、つぎのように述べた。

「われわれは徹底的にわが国の実情と朝鮮人民の要求に即応してスポーツ技術を発展させ、外国の進んだスポーツ技術もこのような原則で取り入れるべきです。そうしてスポーツが朝鮮人民と朝鮮革命に奉仕するものになるようにし、われわれの方式のスポーツ技術と戦術体系、われわれの方式のスポーツ訓練方法を完成すべきです」

総書記は、高まる人民のスポーツ文化にたいする要求とスポーツ技術の急速な発展を考慮して、スポーツ施設の拡充にも深い関心を払った。そして平壌市にメーデー・スタジアムや羊角島（ヤンガクト）サッカー競技場、西山（ソサン）サッカー競技場を設け、万景台地区の青春通りにはバレーボール、バスケットボール、ハンドボール、卓球、重競技、水泳などの競技施設を備えた大規模な体育村を建設するようはからった。ついで、青春通りに跆拳道殿堂を新設するとともに、全国に跆拳道とリズム体操を普及させ、国防体育や民族競技を奨励するようにした。また、各道、市、郡、区域にも多くの体育館を建て、スポーツの発展に大いに寄与するようにした。

総書記は、学校での体育を基本とする大衆スポーツを発展させ

る過程で、マスゲーム『労働党時代』をモデルにして『党の旗のもとに』『朝鮮の歌』『人民は金日成主席を称えます』などを創作するよう導き、これらの作品を特色があって人民に愛される傑作として完成させ、マスゲームの新時代を開いた。

5　人民軍を無敵の隊伍に

金正日総書記は軍建設の指導にあたる日々、人民軍の将官はもとより将校、兵士にも厚い信頼を寄せ、かれらが党から与えられた任務を忠実に遂行するよう導いた。こんにち、人民軍が「一当百」の隊伍としてその威力を誇示しているのは、ただその軍事装備や命令の力によるものではなく、人民軍将兵を厚く信頼し愛する総書記の仁徳によるものである。

その信頼と愛は、人民軍を不敗の革命武力に強化する尽きることなき力の源泉、養分となっている。

総書記は、抗日大戦の時期から戦いつづけてきた老闘士と人民軍の責任幹部をおし立て、厚く信頼している。

1985 年 4 月 13 日、万寿台議事堂では朝鮮人民軍の指揮メンバーに階級章と勲章を授与する儀式がおこなわれた。授与式には、人民軍の強化発展と祖国防衛に大いに貢献した抗日の老闘士、人民武力部の責任幹部、各軍種・兵種の司令官などの指揮要員が参加した。

総書記は式場に赴き、人民武力部長をはじめ人民軍の指揮メンバーに階級章と勲章を授与した。この日、『人民軍を無敵の隊伍

としてさらに強化しよう』と題する演説をおこなった。
　演説では、党の軍事路線を貫徹し、人民軍を敵のいかなる挑発をも粉砕できる無敵の隊伍に強化するための重要な課題を示した。
　そして、人民軍の不敗の威力の源泉は政治的・思想的優越性にあり、ここでなによりも大切なのは革命隊伍の同志的団結であるとし、指揮メンバーは軍人を党の革命思想で武装させ、金日成主席を中心とする党中央委員会を政治的、思想的に擁護するようにし、全軍を党と領袖のまわりにかたく団結させなければならないと述べた。ついで、指揮メンバーをはじめすべての将兵は、党と革命偉業にたいする忠実性と革命的同志愛にもとづいて思想、意志のうえでかたく団結し、将兵一致の精神にのっとって互いにいたわり愛しあうべきだとした。また、人民軍の指揮メンバーが党と革命のために生命を賭して戦う不屈の革命精神を身につけ、すべての軍人が高い階級的自覚と熱烈な愛国心をもち、党と革命のために、祖国と人民のために命をささげて戦うようにするとともに、現代戦の特性と要求に即して主席の主体的戦法と現代軍事科学技術に精通し、各自の職務をりっぱに遂行できるように資質を決定的に高め、指揮メンバーが革命的かつ人民的な指導作風を身につけるよう強調した。
　総書記は、人民軍にたいする党と人民の期待は大であるとし、つぎのように述べている。
　「人民軍の中核である指揮メンバーは、党から任された革命の持ち場を責任をもって守りぬくことによって、人民軍が党と革命の擁護者、防衛者としての使命をりっぱに果たすようにしなければなりません」

総書記は、たびたび人民軍の指揮メンバーに会い、その任務の重要性を説いて、党の厚い信頼と期待にこたえるよう導いた。そして、軍人を主席と党のまわりに結集させることに重点を置き、政治・思想活動を強力に展開するようにした。

総書記は、全軍に党の指導体系を確立してこそ、人民軍を永久に領袖の軍隊、党の軍隊として強化していくことができると強調した。そして、人民軍をそのように強化するのは、武力建設における党の一貫した方針であり、自分の確固たる信条である、全軍が党の思想と意図どおり呼吸し行動し、党の指導に忠実にしたがうようにするのは、つまるところ人民軍を領袖の軍隊、党の軍隊としていっそう強化するためであると述べた。

また、党の指導体系を確立するためには、全軍に党組織観念にもとづく軍紀をうち立てなければならないとし、そうしてこそ党中央の命令にしたがって一糸乱れず行動する指揮系統を確立し、人民軍が党の軍隊としての使命と任務をまっとうすることができると説いた。

党組織観念にもとづく軍紀を確立すべきであるという総書記の教えは、人民軍が歩んできた複雑多端な歴史の教訓を踏まえた綱領的指針であり、人民軍が永久にかかげていくべき軍建設の旗じるしであった。

事実、人民軍の歴史は、全軍に党組織観念にもとづく軍紀をうち立てるための激烈な闘争の歴史であった。朝鮮戦争後、摘発、一掃された反党分派分子や 1960 年代末に暴露、粉砕された軍閥官僚主義者は、例外なく人民軍の革命的軍紀を骨抜きにしようと策動した。党は、人民軍内に党組織観念にもとづく軍紀を確立す

る過程で、このような裏切り者、野心家を適時に革命隊伍から除去したのである。

総書記は、全軍に党組織観念にもとづく軍紀を確立する具体的な方途を示した。そして、人民軍内の党組織と政治機関の機能と役割を高める問題、軍人をチュチェ思想で武装させ、かれらの組織観念を高め、組織・思想生活を強化する問題、各部隊が戦闘訓練を強化し、鉄の軍規を確立し、給養活動を改善する問題など、すべての活動を党の意図どおりおこなうよう強調した。

党と軍の一体化を実現し、軍・政結合を正しくおこなうことは、総書記が示した重要な軍指導原則である。

総書記は、軍・政結合とは、軍事活動と政治活動を密接に結びつけるということであり、それをおこなうということは、軍事指揮官と政治幹部が思想、意志のうえで団結し、部隊の軍事課題を合議して遂行するということであるとした。また、軍・政結合は、軍にたいする党の指導を確固たるものとし、全軍を党のまわりに結集させる統一・団結に関する問題であり、労働者階級の革命武力建設で一貫して堅持すべき路線上の問題であるとした。

そして、軍・政結合を正しくおこなうためには、軍事指揮官と政治幹部の合議制を強化しなければならないとし、政治幹部は軍事指揮官をおし立て、その活動を党の立場で政治的にバックアップし、部隊内に鉄の軍規と指揮官の命令に絶対服従する命令・指揮系統を確立して、すべての活動が人民軍の戦闘力を全面的に強化する方向で進められなければならないと述べた。また、軍隊内に将兵一致、軍民一致の気風がみなぎるようにした。

このように、総書記が人民軍の指揮メンバーにその任務の重要

性を説き、党と軍の一体化、軍事活動と政治活動の密接な結合を実現させることによって、人民軍は党の革命武力としてさらに強化されるようになった。

6　信頼と愛

革命的信義

金正日総書記は、朝鮮革命の第 1 世である抗日革命闘士や解放後、党と革命に忠誠を尽くした活動家をつねに敬い、かれらに深い信頼と変わりない同志的な愛を注いでいる。

国際共産主義運動史には、後輩が先輩を誹謗し、冒涜するという行為が少なからずあった。後輩が先輩を誹謗すれば、革命伝統が骨抜きにされ、領袖の開拓した革命偉業が継承されず、革命の命脈が絶えるようになる。

総書記は、折に触れて幹部たちに、国際共産主義運動史におけるそのような教訓について語り、朝鮮労働党には今後数十年、数百年経っても、そういうことは絶対ありえないであろうと断言した。そしてつねに革命の先輩を尊敬しておし立て、かれらの活動や生活を見守り、停年退官した抗日の老闘士が病気にかからず健康を保つようはからい、毎年、休養所にも送っている。

総書記は、1930 年代初の汪清時代から金日成主席にしたがって戦ってきた朝鮮革命の第 1 世の呉振宇に、大きな信頼と配慮をめぐらした。呉振宇人民武力部長は主席の膝元で成長し、長い間

主席と行をともにしている主席の戦友であるとし、呉振宇を抜きにしては自分の歴史も語れない、かれは自分を忠実に補佐したと語った。また、かれと白頭山にも一緒に登り、中央の大会にはもちろん、外国訪問や地方現地指導の際にも、また新築の建造物を視察するときなども連れ立って行ったのである。それだけでなく、しばしば電話をかけて任務を与えたり、活動上の意見を聞いたりして、かれが課された重責を果たせるよう心を配った。

朝鮮労働党第 6 回大会のときも、かれを傍に座らせ、大会で取り上げられる問題について丁寧に解説してやったりした。会議の進行中にそうした光景を見て不思議に思っていたアフリカのある国の首相は、総書記と人民武力部長の 2 人の間がどうしてあのように親密なのかと主席にたずねた。すると主席は微笑をたたえて、2 人の関係は党と軍隊の関係だと答えた。首相は大きくうなずいて納得した。

その後総書記は、人民軍責任幹部の前でそのことについて語りながら、朝鮮のように党と軍隊が密に結ばれている国はなく、朝鮮人民軍のように党に忠実な軍隊はこの世にないと語った。

総書記は、呉振宇が還暦を迎えたときは、もうこれ以上老けないように心に青春をとりもどし、旺盛な闘志と熱情をもって革命に尽くして欲しいと念じて、還暦祝いをただの「祝宴」にかえて披露し、今後とも党を武力でしっかりと守るべきだと励ました。

総書記は、崔賢(チェヒョン)〔19〕にも厚い信頼と深い愛を注いだ。かれが重病におかされて民族保衛相の職務を遂行できなくなったときには、ただかれが傍にいてくれるだけでも心強いとし、強壮剤を贈り、景色のよい療養所で湯治につとめるようはからった。かれが危篤

に陥ったときには、あらゆる治療対策を講じただけでなく、病床を訪ねて、たとえいくらかの間でも延命の方法はないものかと心を尽くした。総書記は、崔賢は一生、軍服をまとい、武器をとって党と領袖を擁護してきた忠臣であったとし、かれをモデルにした劇映画『革命家』をつくって世に出し、かれが朝鮮人民の心にいつまでも残るようにした。

総書記は、人民軍の要職に任じた抗日革命闘士の一人に、抗日革命の老世代が新世代を白頭山の革命精神で教育し、戦法もよく教えて戦力を全面的に強化することは、党と革命の将来にかかわるきわめて重要な問題であるとし、今後、全軍に党の指導体系を確立することを主眼としていくべきだと強調した。

総書記が老闘士を厚くいたわり愛するがゆえに、老闘士たちは総書記をこのうえなく敬慕した。かれらは総書記を党と人民を導く偉大な指導者として仰ぎしたがったのである。

長い間重病を患い病床に臥していた金一は、1983 年 6 月中旬、総書記が中国訪問を終えて平壌駅に到着するという知らせを耳にした。病床からかろうじて体を起こしたかれは、夫人に服を着せてくれと言った。夫人が、そんな体で駅へ出迎えに行くのは無理ではないか、杖をついて総書記のまえへ現れれば、かえって心配をかけるだけだといって、床につかせようとした。

するとかれは「わたしが死んだならいざ知らず、このように目を開けて生きているからには、床に臥したまま金正日同志を迎えるわけにはいかない。出迎えの幹部たちの中にわたしの姿が見えなければ、わたしが死に瀕しているものと思い、その足でここへ駆けつけるかもしれない。それでなくてもお疲れのはずの金正日同志に、

そんな心配をかけてはいけない」と言って、杖に頼って駅へ行き総書記を出迎えたのである。

半世紀以上も主席にしたがって活動してきたかれは、死期が迫ったある日、長孫を呼び寄せてこう言い残した。「すべてを捧げていつまでも金正日同志に忠実にしたがうのだ。わたしが長い間主席にしたがってきたように、お前たちは金正日同志に忠実でなければならない」

総書記は、抗日革命闘争に参加した老革命家だけでなく、解放後の新しい祖国建設期と祖国解放戦争期、また戦後のチョンリマ大高揚期などそれぞれの時期に主席に忠誠を尽くした古くからの活動家、英雄戦士、労働革新者の社会・政治生命を輝かし、かれらの活動と生活を見守った。

総書記は、許錟(ホダム)[20]の還暦をひかえて、革命のはるかなる道での百戦百勝を誓う一句を手帳にしたためてかれに渡した。また沈(シム)昌完(チャンワン)[21]の訃報に接したときは、闇夜の豪雨をついて危険もものかは鉄橋を徒歩で渡って平壌まで駆けつけたのであった。

総書記の気高い同志愛は、つとに主席が範を垂れた革命的同志愛に根ざし、同志的信頼と革命的信義で結ばれた真の愛と忠誠の結晶である。総書記の同志愛の世界は、同志間の相互一体の信頼にもとづいており、800 金で家を買い 1000 金で隣人を買うということわざがあるが、1000 金をもってしても買えないのが革命の同志であるという革命的同志観に貫かれている。

総書記は、このように革命の前世代や古くからの活動家、新世代の幹部にたいする愛と信頼においても崇高な信義の世界を開く偉大な同志、偉大な人間である。

烈士を永生の丘にまつり

総書記は、抗日革命闘争期から党と革命のために忠実に尽くして世を去った抗日革命烈士、祖国と民族のための愛国愛族の道に一生を捧げた愛国烈士を永生の姿で光輝あらしめている。

もっとも厚い革命的信義と愛の体現者である主席は、共和国創建 20 周年を迎えて、金策（キムチェク）〔22〕、安吉（アンギル）〔23〕、姜健（カンゴン）〔24〕、柳京守（リュギョンス）〔25〕、趙政哲（チョジョンチョル）〔26〕、金京錫（キムギョンソク）〔27〕、崔春国（チェチュングク）〔28〕など革命烈士の銅像をかれらの故郷や由緒ある場所に建立するようにし、また党創立 30 周年を迎えて大城山（テソン）に革命烈士陵を建てるようにはからった。

雪の降るある冬の夜、主席は総書記に電話をかけ、山で戦っていたときのことが思い出される、密営の外で雪に打たれながら、工作に出かけた隊員たちの帰りをいまかいまかと待っていたことが思い出されると追想した。

主席の胸のうちを察した総書記は、幹部たちを呼んだ。そして烈士陵をりっぱに改築して、主席の胸に忘れがたく刻まれている闘士たちを永生の姿で残そうと言い、革命烈士陵の改造・拡張を発議した。その後 1982 年 10 月には、革命烈士陵改造・拡張模型図を見て、この工事をわれわれの代に必ず完成してこそ、われわれが革命伝統を正しく継承することになるとし、工事を主席の意図どおり大々的に進めるよう指示した。

党創立 40 周年をひかえて大城山革命烈士陵の改造・拡張工事が進められていたある日、工事現場を訪れた総書記は、革命烈士陵の背景をりっぱに形象化することが重要であるとし、はためく

赤旗を造形するのがよさそうだ、革命烈士が松林の中にいるよりも、赤旗に包まれていれば、革命烈士を追悼する意義も大きく、陵の荘厳さをいっそう増すことができるだろうと指摘した。

総書記は烈士陵の胸像についても意見を述べた。

人造大理石製の胸像を手で触れて思いにふけっていた総書記は、「革命烈士の胸像を人造大理石でつくっても、知らない人はほんものの大理石でつくったと思うかもしれないが、主席に限りない忠誠を尽くし、祖国と人民のために命を捧げた革命烈士の胸像を人造大理石でつくっては、わたしの良心が許しません」と言って、胸像を銅製にするよう指示した。

1985 年 7 月 5 日、再び革命烈士陵の改造・拡張工事現場を訪れた総書記は、幾人かの胸像だけに英雄メダルがつけてあるのを見て、呉仲洽の胸像には英雄メダルがないが、かれは並みの英雄ではない、抗日革命闘争期に英雄称号を授与する制度があったなら、かれらはみな英雄の称号を受けているはずだ、だから革命烈士陵の花輪献呈台に 5 角の星のかわりに共和国英雄メダルを大きくレリーフしようと述べた。

総書記は闊達な筆致で、扁額に「革命烈士陵」と揮毫した。

1985 年 10 月 4 日、総書記は陵門から背景の赤旗までのすべての建造物を見て回り、大城山革命烈士陵は墓所ではあるが、一つの芸術作品にひとしいとし、革命烈士陵は革命烈士の闘争業績にたいする高い評価の象徴だと語った。

完成された革命烈士陵を見て回った主席は、このような烈士陵は世界的に朝鮮にしかないであろうと、満足してやまなかった。

総書記は、愛国烈士陵の建造にも格別な関心を払った。

大城山革命烈士陵の建設が進められていた 1984 年 4 月、総書記は、幹部の一人を呼んで、主席は大城山革命烈士陵に安置する抗日革命烈士たちを一人ひとり名を挙げて数え、このほかにも祖国と民族のためにたたかって倒れた、忘れがたい革命家や愛国者が多い、それゆえ烈士陵をもう一つ建ててかれらをそこに安置しようと言ったと伝えた。そしてまず、適切な場所を選んで陵の敷地を定めるようにと指示した。その後、平壌市郊外の各地を回って見たが適当な場所が見当たらないという報告を受けた総書記は、兄弟山(ヒョンジェサン)区域新美(シンミ)里に敷地を選定した。

金日成主席と金正日総書記は、チュチェ革命の起原が開かれた当初から半世紀余にわたって、聖なる革命の道で人民の自由と祖国の自主独立、社会主義の勝利のために貴い生涯を捧げた革命家や愛国烈士の偉勲と業績を回顧し、愛国烈士陵に安置する対象を一人ひとり選定した。こうして愛国烈士陵には、梁世鳳(リャンセボン)[29]のような反日愛国烈士や、鄭準沢(チョンジュンテク)[30]、姜永昌(カンヨンチャン)[31]など解放後の革命と建設で功労を立てた幹部たち、朴英順(パクヨンスン)[32]のようなスポーツマン、それに金鍾泰(キムジョンテ)[33]など統一革命烈士や愛国の志士が安置されるようになった。

かれらのなかには、一時南朝鮮かいらい政権に奉仕した政客もいた。主席と総書記は、いまわしい過去と決別して祖国統一の聖業に生涯をささげた、かれらの愛国至誠を尊んで、愛国烈士陵に安置するようはからったのである。

総書記は、愛国烈士陵の建設が最終段階に入っていた 1986 年 3 月、現地に赴き、いろいろな形式や名称でつくられた陵門の扁額図案を検討し、その名称を「愛国烈士陵」とした。

その後、完工段階に至った愛国烈士陵の建設工事を視察した総書記は、陵に安置する対象の名簿をいま一度確かめて詳細な指導を与えた。このような大いなる愛によって愛国烈士陵はりっぱに建設されたのである。

そのころ祖国に滞在していた元南朝鮮「外務部長官」で「国軍」軍団長であった崔徳新（チェドクシン）[34]は、父崔東旿（チェドンオ）[35]、岳父柳東悦（リュドンヨル）[36]の墓碑の前で涙にむせびながらこう言った。「金日成主席と金正日将軍は、祖国と民族のためになにもなしたことのないわたしの親たちに永生の政治的生命を与えてΩ͐ さいました。愛国烈士陵は主席と将軍が愛国烈士たちに施す愛と徳義の極致です」

総書記はまた、革命烈士や愛国烈士、英雄戦士が生まれ育ち、学び働いた郷里や学校にかれらの銅像を建て、村や学校、工場や農場、人民軍部隊などにかれらの名を冠し、その業績を広く宣伝するようはからった。

7　崇高な同胞愛

連邦共和国創立方案の旗をかかげて

民族分裂の悲劇に終止符をうち、祖国を統一することは、歳月の流れとともにますますさし迫った課題として提起されていた。外部勢力の強要によって 1940 年代に始まった民族の分裂は 1980 年代にもつづき、北と南の不信と反目はますます深まっていた。

朝鮮労働党第 6 回大会で金日成主席は、統一問題をめぐる内

外の情勢を分析、評価し、北と南に相異なる思想と体制が現存していても、朝鮮の統一偉業を全民族の利益に即して平和的に解決できる方途を示した。

祖国の統一を民族至上の課題、自らの崇高な使命とする金正日総書記は、主席が示した高麗民主連邦共和国創立方案の実現をめざすたたかいを賢明に導いた。

総書記の発議によって 1980 年 11 月に招集された朝鮮民主主義人民共和国諸政党・大衆団体連席会議は、連邦共和国創立方案が唯一の正しい統一方案であることを確認し、南朝鮮と海外の民主人士、政党および団体の活動家に送る手紙を全会一致で採択した。手紙では高麗民主連邦共和国創立方案を一日も早く実現するために、北と南、海外の各階層代表からなる高麗民主連邦共和国創立準備委員会を結成することを提起し、そのための予備会談を短時日内に開くことを提案した。連邦共和国創立方案は国内外の熱烈な支持を得た。

総書記はまた、北と南、海外の 100 人政治人連合会議の招集提案をかかげるという新たな方針を示した。

1982 年 2 月、100 人政治人連合会議の招集を呼びかける祖国平和統一委員会の声明が通信、放送を通じて国内外に発表された。この声明は、北と南、海外の全同胞を連邦共和国創立方案の実現へと立ち上がらせる統一愛国の宣言であった。

しかし、南朝鮮当局の分裂主義的策動によって、北南対話と接触は実現されず、祖国統一の前途には依然として難関と試練が横たわっていた。

総書記は、朝鮮人民の統一への熱気をひきつづき高め、和解と

団結の雰囲気をつくり、分断による朝鮮人民の不幸と苦痛を軽減し、民族の血脈をつなぐため心血を注いだ。

1984 年 8 月末から 9 月初にかけて、南朝鮮全域が例年にない豪雨による大洪水に見舞われた。南朝鮮の新聞は、洪水で 350 名が死亡し、20 万 7000 余名の罹災者が生まれ、3 万 6700 余戸の家屋が破壊され、多くの農地や道路が流失または埋没したと報じた。

そのころ各地を現地指導していた総書記は、南の同胞が見舞われている不幸に深く心を痛め、かれらに援助を与える方途を考えていた。

ある日の夕方、降りしきる雨を窓から眺めていた総書記は、ある幹部に、今度の豪雨で南朝鮮が大きな水害をこうむったそうだが、どのような救援措置をとったらよいだろうかとたずねた。

その夜、幹部たちは協議の末、南朝鮮の水害の惨状については、新聞や放送を通じて報じるべきだが、水害被災民に救援物資を送ることは提起する必要もないという意見の一致をみた。解放後このかた、同胞愛的救援を一度も受け入れたことがない南朝鮮の歴代当局者の態度からすれば、今度もまた拒否するにきまっていると推測したからであった。

翌朝、協議の内容について報告を受けた総書記は、つぎのように述べた。

「われわれは水害をこうむった南朝鮮の罹災者に深い肉親の情をこめた救援物資を送ってやらなければなりません」

朝鮮民主主義人民共和国赤十字会中央委員会は、ただちに南朝鮮の水害被災民救援問題を討議し、しかるべき決定を採択した。

こうして、南朝鮮の水害被災民に 5 万石の白米、50 万メート

ルの布地、10 万トンのセメント、その他に医薬品を送る措置がとられた。白米 5 万石は罹災者一所帯当たり 250 キロがゆきわたる量であり、布地 50 万メートルは水害被災民全員に服を一着ずつ着せられるものであった。またセメント 10 万トンは 3 万棟の家屋を建てられる量であり、医薬品は水害地域の各種疾病を予防し、治療するに足るものであった。

この消息に接した南朝鮮人民は、血は水よりも濃しと言うが、同じ血筋を引く北の兄弟であればこそ南の罹災者を救ってくれるのだと言って歓迎し、西側資本主義諸国のマスコミさえも「100%同胞愛の産物」と評した。

総書記は救援物資の準備を積極的に推進した。政務院の責任幹部たちによる中央指揮部を設置し、救援物資の生産と輸送の準備を至急進める任務を与えた。そして雨の日もいとわず、救援物資の生産現場を訪れて具体的に指導し、大量に必要な貨車とトラックを出動させる特別指示も与えた。

1984 年 9 月 28 日、救援物資を積んだ数百台のトラックが軍事境界線を越えて坡州（パジュ）へ向けて出発し、大型貨物船が仁川（インチョン）港と北坪（プクピョン）港へ向かって出航した。これは国土分断以来 40 年ぶりの壮挙であった。

閉ざされていた障壁の扉が開かれ、これを契機に北と南の間に多岐にわたる接触と対話が再開された。こうして北南経済会談への道が開かれ、1985 年 5 月には、長い間中断されていた北と南の赤十字団体の会談が 12 年ぶりに再開された。

総書記は、再開された北南対話と協商の幅を広げるため、国会連席会議、スポーツ会談、学生会談など多岐にわたる対話を提起

し、和解と団結の雰囲気をつくりだすため、北南間の芸術団、体育団、故郷訪問団の相互訪問を実現するようはからった。

総書記は、北南赤十字会談に提起する方案についてふれ、祖国解放 40 周年を契機として北南の離散家族や親戚が板門店（パンムンジョム）で会うのでなく、互いに自由往来する問題や芸術団を交換して上演する問題を提起するようにした。そして、これが実現すれば、民族の和解と団結の雰囲気がつくりだされるであろうと指摘した。

こうして、北南芸術団および故郷訪問団の相互訪問が実現し、1985 年 9 月、北と南の赤十字団体に伴われた芸術団および故郷訪問団のメンバーが境界線を越えて平壌とソウルを往来するという民族史的な出来事が起きたのであった。

金剛山（クムガン）1 万 2000 の峰々に虹がかかり、伝説に伝わる 8 天女が羽衣をひるがえして空から舞い降りて踊る舞踊『金剛天女』で幕を開けた北の芸術団は、民族固有の風習と情緒を生かした演目と、人民の幸せで楽天的な生活を描いた多彩な演目を舞台にのせて観衆の絶賛を浴びた。

故郷訪問団のメンバーは 40 年ぶりに家族や親戚と感激的な対面を果たした。

赤十字による芸術団と故郷訪問団の交換は、全同胞に朝鮮は一つであり、朝鮮民族は必ず一つの血筋に結ばれるべきであるという崇高な志向を肌で感じさせ、南朝鮮人民に統一への熱望をさらに高める重要な契機となった。

他方、総書記は民族大統一戦線を結成する活動にも大きな力を注いだ。

総書記は、全民族的な統一戦線を結成するための合理的な諸提

案を示し、南朝鮮と海外の愛国的民主勢力を統一偉業の実現をめざす活動に邁進させるよう導いた。こうしてウィーンやヘルシンキ、東京で、北と海外同胞の対話と会議がおこなわれ、1984 年 12 月には「祖国統一のための民族連合」が結成された。

また、1980 年代後半期には全民族的統一戦線の結成をめざす北南連席会議招集に関する提案を盛り込んだ手紙を南朝鮮の諸政党、大衆団体と個別的人士に送る措置を講じた。その手紙が公開されると、南朝鮮人民の間には、祖国統一問題の解決で民衆が主体となるべきであるという声が高まった。これは朝鮮民族自らの力で祖国の統一を実現する主体的勢力が、かつてなく強化されていることを示すものであった。

在日朝鮮人運動を新たな高い段階へ

在日朝鮮人運動は、1980 年代後半期に入って新しい発展への転換期を迎えた。

解放後、40 余年の歳月の流れとともに、在日同胞のあいだでは世代の交代がなされ、階級構成においても変化が生じた。かつて亡国の悲しみを抱いてなじみのない日本に連行され、植民地奴隷の苦しみを直接体験した第 1 世代は減り、日本に生まれ育った 2 世、3 世が圧倒的多数を占め、かれらが在日朝鮮人運動の担い手として登場するようになった。また在日同胞の中で労働者、農民は少なく、商工人が絶対多数を占め、かれらが総聯の基本大衆をなしていた。

総聯の活動環境も著しく変わってきた。日本の反動層と南朝鮮

の反統一勢力間の癒着関係の深化とあいまって、在日同胞の民族性を除去してかれらを愛国の隊列から切り離そうとする反動攻勢と謀略策動がかつてなく激しくなった。

総聯の活動環境の変化と在日朝鮮人運動発展の要請を洞察した総書記は、1986 年 9 月の演説『現実発展の要請に即して総聯の活動をさらに強化するために』で、総聯が堅持すべき綱領的指針を示した。

総書記は、総聯活動において重要なことは、変化した現実を踏まえて総聯の隊伍を強固にするとともに、思想活動をさらに強化し、愛国活動を活発におこない、民主主義的民族権利を擁護して積極的にたたかうことであると述べた。

また、総聯が自己の任務を成功裏に遂行するためには、すべての部門で新しい活動態度と高度の責任感をもって活動すべきであるとし、かれらの活動と生活に細やかな関心を払った。

そして、一生涯を総聯活動に尽くしている老幹部を尊敬し、かれらの生活と健康をあたたかく見守った。

総書記の義理がたい愛は、老幹部の祖国訪問の措置にも明白に現れている。総書記は老幹部が夫人同伴の代表団を組んで祖国を訪問するようはからい、かれらの祖国滞在中の接待と宿泊、食事、それに滞在日程や参観対象にいたるまで心を配り、朝鮮人蔘や手工芸品などを所帯別に贈った。

総書記は、同胞商工人の愛国衷情の発揚にも関心を向けた。

祖国の隆盛、発展のためにまごころを尽くす商工人こそ真の愛国者であるとし、街や病院、橋や工場などにかれらの名を冠し、忠誠碑も立てるようにした。平壌に建設された安商宅(アンサンテク)通りや金萬(キムマン)

有(ユ)病院、貞(チョンイム)任橋などもこうして生まれたのである。

総書記は、在日青少年学生や科学者、女性や芸術家もたびたび引見して貴重な教えを与え、かれらに限りない信頼と愛を寄せている。

総書記はその後、総聯結成 40 周年に際して総聯と在日同胞に送った書簡『在日朝鮮人運動を新たな高い段階に発展させるために』で、過去 40 年間、折り重なる難関と試練を乗り越えて勝利の道を歩んできた総聯の誇らしい路程に満足の意を表し、総聯をさらに強化し、在日朝鮮人運動を新たな高い段階に発展させるうえで提起される重要な問題を明らかにした。

書簡は、総聯の活動家と在日同胞は、主席を永遠に高く戴き、総聯のすべての活動を主席が意図し望んでいたとおりに進めるべきであると指摘した。そして総聯を組織的、思想的に強化し、その役割を高める問題、各階層の同胞大衆との活動を正しくおこなって、総聯の大衆的基盤をさらに強固にする問題、活動家と同胞のあいだでチュチェの思想体系を確立し、真の愛国愛族の思想で武装させる思想教育活動を強化する問題、総聯活動家の活動方法と作風を改善する問題などを明示した。

総書記によって、総聯組織は一心団結の不敗の隊伍にかためられ、在日朝鮮人運動の前途が明らかにされた結果、すべての総聯活動家と在日同胞は、チュチェの愛国偉業を代々継承し達成するための進軍をさらに促すことができたのである。

8　平壌祭典

1989 年 7 月、平壌で開催された第 13 回世界青年学生祭典は、金正日総書記の指導によりトップレベルの国際的大政治祭典として、世界青年学生祭典運動の歴史を飾った。

1947 年 7 月にチェコスロバキアのプラハで開催されて以来約 40 年間、10 余回にわたって開かれた世界青年学生祭典は、世界の進歩的青年学生の連帯を強める行事として、戦争と帝国主義に反対して世界の平和と安全を保障し、世界各国の青年学生の友好と団結を強化することに寄与した。

総書記は、祭典を世界の反帝闘争の第一線である朝鮮で、祭典の理念を正しくかかげて催すことによって、その進歩的性格を生かし、反帝連帯、反帝共同闘争を強化する契機を開く大政治祭典にすることにした。ところが、これまで一度も祭典が催されたことのないアジア地域で、しかも国土が両断され、帝国主義者の侵略と新たな戦争策動がひきつづき強行されている朝鮮で開催するということは、決して容易なことではなかった。

総書記はこうしたすべてのことを洞察し、平壌祭典の開催準備をとどこおりなくおし進めるよう詳細な指導を与えた。開幕と閉幕のイベントに格別な意義を付与した総書記は、行事の国際的性格に合わせながらも朝鮮的なものを適切に取り入れて特色づけることに大きな関心を払った。

総書記は、開幕と閉幕のイベントが、5 大陸人民の好みに合うように祭典の雰囲気をもりあげて、参加者を祝賀し歓迎する内容

で貫かれるようにすべきであると指摘した。

そして、開幕の章『祭典の歌』や閉幕の章『友よ！　平和をめざす道でまた会いましょう』のような祝賀、歓迎、親善、団結の内容を多く盛り込むようにし、朝鮮についての宣伝は、開幕、閉幕イベントのときでなくても、「朝鮮の日」におこなうマスゲームなど各種のイベントを通じておこなえると指摘した。また祭典の開幕を告げる場面も、開幕信号手を甲冑姿の高句麗の武将の扮装にし、信号も外国でのように信号ラッパやトランペットなどではなく、太鼓と角笛を用いるようにするのがよいと指摘した。

総書記は物質的準備を十分に整えることにも大きな力を入れ、15 万席のメーデー・スタジアム、一部のゲストの宿所にあてる光復通りの 5000 所帯住宅、総合的なスポーツ施設を備えた青春通りなど 260 余の建築物を短時日内に完成させた。

総書記は、祭典をひかえた 1988 年 10 月に著作『現代と青年の任務』を発表した。

著作では、新しい世代の青年が、自らの時代的使命と任務を深く自覚し、反帝自主偉業遂行の先頭に立つよう指摘した。

総書記は、祭典の開幕をひかえて現場に出かけて開幕と閉幕のリハーサルを指導した。

第 13 回世界青年学生祭典は 1989 年 7 月 1 日から 8 日にかけて盛大に開催された。祭典には世界 5 大陸の 180 カ国の青年学生代表と 64 の国際機構および地域機構の代表をはじめ 2 万余名の外国人が参加した。祭典にはまた世界各国の党および政府の首班をはじめ多くの名誉ゲストや各界人士、海外同胞が参加した。このような国際的祭典が平壌で催されたことは、実に大きな意義のあ

る一大慶事であった。

祭典には南朝鮮の 100 万青年学生の組織である「全大協」の代表も参加した。熱い統一意志を抱いて祭典に参加した「全大協」代表の愛国的行為を高く評価した総書記は、彼女が滞在中、北の青年学生や 5 大陸の青年学生の中で思う存分活躍できるようはからった。

世界の耳目を集めて幕を開けた平壌祭典でことに異彩を放ったのは、メーデー・スタジアムでの開幕、閉幕のイベントであった。

開幕イベントでの金日成主席の祝賀演説『青年学生は時代の先駆者になろう』は、祭典の理念をさらに浮き彫りにした。

祭典の聖火台に燃え上がる炎、朝鮮民族の気象と尊厳を示す高句麗武将の装束と角笛、魅惑的な吹奏楽隊と小太鼓隊、虹をつたって舞いおりる金剛山 8 天女、惜別の情をそそる『友よ！　平和をめざす道でまた会いましょう』の合唱と踊りなど、開幕、閉幕イベントのすべての場面は、人知の最高峰を飾る恍惚境の極致であった。

開幕、閉幕イベントだけでなく、数百カ所で盛大に催された政治・文化・芸術・スポーツ行事や民族クラブ、「朝鮮の日」などすべての行事は、その政治的・思想的内容とユニークな形式、民族的色彩、高度の組織性と芸術性によって最上の境地をなした。

五　1990 年 1 月～1994 年 6 月

1　一心団結

朝鮮労働党の革命哲学

1990 年代は、朝鮮人民の政治生活、思想・精神生活において特筆すべき出来事の多い歴史的時期であった。

歴史の前進運動を逆戻りさせようとする帝国主義者や反動勢力の反社会主義戦略に便乗した修正主義者の策動により、ソ連をはじめ東欧諸国で社会主義が挫折するという異常事態が発生した。とりわけソ連の崩壊によって東西間の 2 極構造が崩れ去った後、唯一超大国として君臨したアメリカ帝国主義は、無謀な侵略戦争策動に拍車をかけ、社会主義のとりでである朝鮮を孤立させ圧殺しようと狂奔した。

内外の情勢は、党と革命隊伍の一心団結を新たな高い段階へと発展させ、人民大衆中心の朝鮮式社会主義を断固擁護し輝かせていくことを求めた。

金正日総書記は 1990 年 1 月、党中央委員会の責任幹部に、意義深い 90 年代を迎えてチュチェの社会主義の信念を貫き、歴史の逆風をついて進み、90 年代の新しい歴史を創造する決意を披瀝した。そして、革命の前途には紆余曲折があるものだとし、いま社会主義は試練をなめているが、これはあくまでも一時的なものであり、勝利は永遠なるものだ、社会主義は人民の志向であり意

志であるため必ず勝利する、必勝の信念、必勝の気質、必勝の気概がある人のみが 90 年代の進軍に参加することができると語った。

総書記は、アメリカをかしらとする帝国主義連合勢力とその手先の反共和国、反社会主義孤立・圧殺策動によって日増しに厳しくなる情勢を鋭く洞察し、全党と全社会の不敗の統一団結、領袖、党、大衆の一心団結の威力で敵のあらゆる挑戦を粉砕し、人民大衆中心の朝鮮式社会主義を擁護し輝かす活動を精力的に展開した。

総書記は 1992 年 1 月 1 日の党中央委員会責任幹部との談話『党活動を強化し、朝鮮式の社会主義をさらに輝かそう』で、昨年は朝鮮労働党と人民が四方八方から加えられる帝国主義者と反動勢力の圧力をはねのけ、社会主義の赤旗を高く翻した勝利の年であったとし、つぎのように述べている。

「『一心団結の威力で朝鮮式社会主義をさらに輝かそう！』、これが現段階においてわが党が提示している戦闘的スローガンです」

そして一心団結は朝鮮革命の生命であり、われわれが最後までかかげていくべき旗じるしである、換言すれば、チュチェの革命偉業を代を継いで完成する道で、敵のあらゆる挑戦を退け、人民大衆中心の朝鮮式社会主義を擁護し輝かすもっとも強力な武器はまさに一心団結であると述べた。

金日成主席が築いた一心団結の伝統を代を継いで強化しようとするのは、総書記が早くから抱いてきた遠大な志であり、かたい決心であった。

総書記は、朝鮮革命のれい明期に主席がその起源を開き、厳し

い抗日革命闘争の時期に革命の万代の礎として築いた一心団結の伝統をりっぱに受け継ぎ、全党と全社会を、一つの社会的・政治的生命体、運命共同体をなす一心団結の大家庭につくりあげるため全力を傾けてきた。

すでに幼いころから革命は団結であり、団結は勝利であるという真理を体得した総書記は、大学時代には統一団結の中心と思想的基礎に関する独創的な思想・理論をうちだし、党中央委員会で党活動の指導にあたった後は、反党反革命分派分子の策動を断固粉砕し、全党と全社会に唯一思想体系を確立し、大きな度量と包容力、仁徳政治、幅の広い政治ですべての大衆を党のまわりに結集させた。

一心団結の聖なる旗を高くかかげた総書記は、「一心団結の旗を高くかかげて進もう！」というスローガンを示し、団結にはじまったのが朝鮮革命であり、団結を武器として勝利をおさめてきたのが朝鮮革命であるとし、つぎのように述べている。

「わたしは、栄えあるチュチェの革命偉業を継承し完成するたたかいに身を投じた当初から、一心団結を革命の武器としてきました。一心団結はわたしの革命哲学です。

…

こんにち、全党と全人民は金日成同志を中心とし、偉大なチュチェ思想にもとづいて思想、意志のうえで、道徳的信義のうえでかたく団結しています。わが党は一心団結の党であり、わが国は一心団結の国です。

われわれの一心団結は党と領袖、人民の一心団結です。党と領袖は人民を信頼し、人民は党と領袖に忠誠を尽くすというところ

にわれわれの一心団結があります。人民にたいする党と領袖の信頼と愛、党と領袖にたいする人民の忠誠の結晶体がすなわちわれわれの一心団結です」

総書記は、1980 年代末から 1990 年代初にかけて激変する世界の政治情勢に対処して、全社会の一心団結を強化することをチュチェの革命偉業の運命にかかわる根本問題、朝鮮式社会主義の優越性を高く発揮させる重要な要因とみなし、その活動をさらに強力におし進めた。

総書記は、1989 年 10 月 26 日のキューバ共産党中央委員会機関紙『グランマ』社長の質問にたいする回答や 1990 年 10 月初の党中央委員会の責任幹部との談話をはじめ多くの機会に、国際共産主義運動の深刻な教訓を分析し、党の統一団結を代々継承、発展させるための綱領的指針を示した。そして、党活動において一つの思想にもとづく行動の統一性は唯一的な指導によって実現されるとし、党事業と党活動において党中央の唯一的指導を実現する過程は本質上、党の方針を貫徹する過程であるため、党の方針を絶対性、無条件性の精神で貫徹すること、全党が一糸乱れず行動する鉄のような中央集権的規律を確立するところに、党の唯一的指導を実現する根本的裏付けがあるということを強調した。

総書記は、全社会の一心団結を強化するため、党員と勤労者に主席の偉大さを深く認識させ、主席の不滅の功績を擁護し輝かせる活動をさらに深化させることによって、主席への忠実性を信念化、良心化、道徳化、生活化するよう指導した。また、いかなる試練にさらされてもひたすら党を信頼しようとする朝鮮人民のりっぱな思想・感情と心理を汲んで、大衆との活動をひきつづき正

しくおこない、かれらを党のまわりにかたく結集させることによって、領袖、党、大衆の一心団結をゆるぎないものにした。

人民大衆に愛と信頼を寄せる総書記は、人民への党の関心と配慮をさらに深め、幹部が人民のために献身するよう導いた。その結果、人民は党を絶対的に信頼してしたがうようになり、党と人民大衆は一つの血脈としてかたく結ばれた。そうして人民は「党が決心すればわれわれは実行する！」というスローガンを生活の要求とし、党の路線と政策を絶対性、無条件性の原則で貫徹するという高い忠誠心を発揮した。

総書記は、一心団結のスローガンを高くかかげ、社会主義の赤旗をいっそう高くなびかせるため、人民軍の軍種・兵種別の大会や職階別の軍人大会を催し、党と領袖を決死擁護する銃弾・爆弾になるという人民軍軍人のかたい誓いと決死の覚悟、革命的軍人精神を大いに高めた。そして全国烈士遺族大会や社会主義労働青年同盟第 8 回大会、全国共産主義的美風先駆者大会などを開き、党と領袖のまわりにかたく団結した人民大衆中心の朝鮮式社会主義の威力と不敗性を誇示した。また 1992 年 12 月には朝鮮知識人大会を開催し、偉大な領袖、偉大な党のふところで生き、革命を進める朝鮮の知識人こそ領袖の福運に恵まれた誇り高い知識人であること、そして科学には国境がないが朝鮮の知識人にはチュチェの社会主義祖国があり、かれらはどのような嵐にもめげず、革命の赤旗を守って雄々しくたたかうであろうことを全世界に示した。

総書記は一心団結の革命哲学により、全社会を「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という集団主義的原則にもと

づいて結ばれたむつまじい大家庭につくりあげた。

総書記は、領袖を擁護し、革命同志のために自分を犠牲にし、骨の折れる現場に真っ先に駆けつけ、組織と集団のためにすべてを捧げるといった人民の共産主義的美挙について報告を受けると、誰よりも喜び、りっぱな人、よい行いだと高く評価し、感謝や直筆の返書、貴重な贈り物を送った。そして、新聞や放送、テレビ、映画などを通じて全国に紹介するとともに、党および勤労者団体の各組織がその模範を見習う社会的運動をくりひろげるようにした。

こうして、社会主義の優越性と不敗性を示す共産主義的美挙が相次いで生まれ、領袖、党、大衆が運命をともにする一心団結は、もっとも崇高なものとして強化された。

信頼と愛の書簡

このころ、朝鮮人民は総書記に多くの手紙を送った。それは、どんな風が吹き荒れようとひたすら朝鮮労働党を信頼し、党と運命をともにすべく決意を表明し、総書記の健康はすなわち祖国の運命、党の生命、人民の幸せであるとし、チュチェの革命偉業の完成のために総書記の健康を切に祈るものであった。

総書記は党中央委員会の責任幹部との談話でつぎのように述べている。

「いま人民は、帝国主義者と反動勢力の策動のため社会主義か資本主義かという厳しい時期に、わが国の社会主義が微動だにしないのは党の指導があるからだとし、どんな試練に見舞われよう

と党を信頼し、チュチェの革命偉業をあくまで完成するという覚悟と決意をこめた多くの手紙をわたしに寄せています。…戦後朝鮮革命が試練を経ていたとき、台城（テソン）のおばあさんが金日成同志に確信と力を与えたとすれば、いまは数多くの 90 年代の台城のおばあさんがわたしに確信と力を与えてくれています」

朝鮮中央通信社 5 局 2 細胞の党員たちは、朝鮮労働党創立 45 周年をひかえたある日、激変する情勢、すなわち多くの国で社会主義の挫折という重大な事態をまねいている深刻な情勢のもとで、党と人民を社会主義偉業の勝利へと確信をもって導いている総書記に、永遠に党にしたがって忠誠の道を進むというかたい意志をこめた手紙を送った。

かれらは手紙につぎのようにしたためた。

「偉大な思想があり賢明な指導があるかぎり、わたしたちにはつねに百戦百勝の栄光があるのみです。

…

わたしたちは党中央を命を賭して擁護し、わが党の出版・報道部門でチュチェ思想の旗を先頭に立ってかかげる旗手となります。わたしたちがかかげた赤旗には『卑怯者去らば去れ、われらは赤旗を守る！』という文字が輝くことでしょう」

これにたいし、総書記はつぎのような返書を送った。

「2 細胞の党員のみなさんに

みなさんの手紙を拝見しました。

わたしはみなさんの労をねぎらい、謝意を表します。

手紙をもらったわたしは発奮し、党員のみなさんの期待にそむかず党と革命偉業に限りなく忠実であることを確言するものです。

同志的な挨拶を送りつつ

金正日　1990 年 11 月 1 日」

細胞の党員たちは、多忙な日々を送る総書記から返書がもらえるとは思ってもいなかった。

新聞、放送を通じてこのニュースが伝わるや、人民は限りない感激と興奮に包まれた。

ほどなくして、朝鮮文学創作社の詩人たちから、さらなる創作的高揚をもたらすべく決意をこめた手紙を受け取った総書記は、かれらに「わが党の建設と活動において永遠の同行者、忠実な援助者、りっぱな助言者になることを望みます」という直筆の返書を送った。

これらの返書は、総書記を天のごとく信じ慕い、どんな狂風が吹き荒れようとも党にしたがい、革命の赤旗を高くかかげて進むという朝鮮人民のゆるぎない信念と熱情をいちだんともり立てた。

その後も、多くの党員と勤労者は、朝鮮革命を勝利の道に導く総書記に、忠誠の誓いを述べ、総書記の健康を祈る手紙を送った。そのなかには、抗日の老闘士や党と国家の指導幹部、剣徳の鉱夫や徳川の炭鉱夫、青山里の農民、人民軍の将兵、知識人や学生、帰国同胞や共和国の公民となった日本人女性の手紙もあった。

総書記は各階層の人民から寄せられた素朴な手紙を読み、このような人民、このような党員、このような同行者がいるかぎり、われわれはつねに勝利し、最後まで革命の旗を高くかかげて進み、最終的勝利をおさめることができるという強い確信を得たとし、かれらを励ます返書を送った。

そのなかには、1993 年 9 月初、朝鮮人民軍の 8 兄妹に宛てた

つぎのような返書もある。

「祖国と人民、党と領袖の忠実な革命戦士たちにわたしは、わが人民と軍隊がみなさんのように革命偉業に身を尽くしているりっぱな戦士をもっていることを大きな誇りに思っています」

総書記が朝鮮人民軍最高司令官に推戴されたというニュースに接した平壌市東大院（トンデウォン）区域のある母親は、人民軍に服務している 2 人の息子はもとより、職場に勤める 6 兄妹にも、人民軍に入隊し銃を手にとって総書記にりっぱに仕えるようにと説いた。

この話を伝え聞いた総書記は、その母親が 6 人の息子、娘まで人民軍に入隊させれば、その家庭では 8 兄妹がみな人民軍に服務することになるが、これはなんと誇らしいことであろうかと語った。

その後、軍人になった 8 兄妹は、銃をもって先頭に立ち、総書記を擁護するという誓いをこめた手紙を総書記に送った。

総書記はその手紙の行間に、自らの運命を党に託し、党の呼びかけにこたえてどんな困難や試練にもめげずつき進む朝鮮人民、朝鮮人民軍の一致した心を読み取り、かれらに返書を送ったのである。

信頼と愛が一つに結び合った手紙と返書は、一つの大家庭をなすむつまじい人民大衆中心の朝鮮式社会主義をいっそう不敗のものにした。

2　朝鮮式社会主義の固守

党の指導は社会主義偉業の生命線

党を強化しその指導的役割を高めることは、社会主義の運命を左右する根本問題である。党を強化しその指導的役割を高めてこそ、革命と建設をおし進め、社会主義の完全な勝利をもたらすことができる。

ソ連と東欧諸国において社会主義が挫折した状況のもとで、党の指導を強化することは朝鮮労働党と人民の運命にかかわる深刻な問題となった。

1980 年代末から 1990 年代初にいたり、修正主義者、社会改良主義者は党の指導を否認し、政治において「多党制」を実施することによって、労働者階級の党そのものを破滅させる結果をまねいた。

一部の社会主義諸国で資本主義が復活している事態は、党を弱体化させ、党の指導を否認すれば、社会主義制度を強化することができないばかりか、既存の革命の獲得物さえ失うことになるという深刻な教訓を示した。

総書記は、現実的要求に即して党を強化し、その指導的役割を高めるための原則的問題を明示し、それを実現する活動を指導した。

総書記は 1990 年 10 月、朝鮮労働党創立 45 周年に際して発表した『朝鮮労働党は朝鮮人民のすべての勝利の組織者であり導き

手である』をはじめ多くの著作で、党を強化し、その指導的役割を高める課題と方途を示した。

総書記は、党の指導は社会主義偉業の勝利の決定的保証であるとし、つぎのように述べている。

「党の指導は社会主義偉業の生命線である。

わが国における社会主義偉業はわが党の指導のもとに前進し、勝利の道を歩み、それはこれからも党の指導のもとでのみりっぱに完成される」

党の指導は、社会主義偉業の主体を強化し、その役割を高める決定的保証である。社会主義偉業の主体としての人民大衆の生命力は労働者階級の党の革命的指導をぬきにしては考えられず、また党の指導によってのみ正しい戦略と戦術にもとづき社会主義偉業を成功裏に前進させることができる。

国際共産主義運動は、全社会にたいする党の政治的指導を弱めたり排除するならば、社会主義は生命力を失い挫折してしまうということを実証している。

総書記は、党を強化しその指導的役割を高めることに第一義的な力を注いだ。なによりも党の指導思想を純正に継承し、党の革命的性格を変わることなく固守し、一つの思想、領袖の革命思想にもとづき全党を思想、意志のうえでかたく団結させる活動に深い関心を払った。そして対人活動を基本としてとらえ、母なる党としての本分を果たし、党活動を党的、政治的方法に確固と転換させるよう導いた。

当面の緊張した情勢と関連して、総書記は幹部と党員のあいだに革命的党風を確立した。

総書記は、労働者階級の党は自らの性格と使命に即して党建設と党活動において固有な党風をもつものだとし、チュチェ型の党である朝鮮労働党の党風は、領袖にたいする忠実性を第一の生命とし、領袖と党、人民のためにすべてをささげてたたかう党生活気風、党活動気風であるとした。

総書記はとくに、党と大衆の血縁的つながりを強め、革命的大衆路線を貫徹することに関心を払った。

総書記は 1990 年 1 月 1 日、党中央委員会および政務院の責任幹部との談話でつぎのように述べている。

「人民に忠実に奉仕し、人民から支持され愛される活動家であってこそ、真のチュチェ型の党活動家であるといえます。軍隊には『祖国に奉仕する！』というスローガンがありますが、党活動家のスローガンは『人民に奉仕する！』でなければなりません」

総書記はこのスローガンを大衆との活動の原点、目標とし、党事業と党活動を 1 から 10、100、1000、1 万にいたるまで、人民の利益を徹底的に擁護し、人民に忠実に奉仕する方向で進めるよう指導した。

総書記は「全党が大衆のなかに入ろう！」というスローガンを示し、幹部が大衆のなかに深く入り、かれらと生死、苦楽をともにするようにした。こうして、党と大衆との血縁的つながりはいっそう強まった。

党が人民の運命に責任をもち、母なる党としての本分を果たすうえでなによりも重要なのは、幹部の活動方法と作風を改めることであった。

総書記は早くから政権党の活動にあらわれうる権柄や官僚主義、

不正・腐敗の危険性を見ぬき、幹部のあいだでそういう弊害をなくすことは党の運命にかかわる重大な問題であるとし、種々の革新的対策を講じた。

総書記は 1990 年 10 月の朝鮮労働党中央委員会責任幹部との談話で、党活動の方法と作風を改善することについて強調し、つぎのように述べている。

「わたしがつねづね指摘していることですが、党活動家が大衆のなかに入って大衆のために献身するのは補薬を使うのと同じですが、権力を乱用して官僚主義的にふるまうのは自ら毒薬をあおぐにひとしいことです」

総書記は党の権威乱用や官僚主義、不正・腐敗をなくすたたかいを通じて、党活動家が官僚ではなく人民の忠僕として大衆のなかに深く入り、人民のために献身する気風を確立するよう導いた。

同時に、活動家の党組織観念を高め、党生活を強化することにも大きな関心を払い、自ら革命的党組織観念の模範を示した。

中央機関の某責任幹部が党費を納めるため席を外していたときのことである。

電話をかけた総書記はかれが党費を納めるために細胞書記の部屋に行っていることを知り、呼び戻さないようにと言って受話器を置き、かれが自分の部屋に戻ってくるのを見計らって電話をかけ直した。そして急を要する問題について指示を与えた。総書記にとって各部門や部署の幹部に電話を入れるその 1 分、1 秒が貴重なものであったが、このように党員や幹部が党の組織・思想生活規範を犯さないようにしたのである。

総書記は党細胞を党と領袖に限りなく忠実な細胞につくりあげ

るため、その活動をエネルギッシュに指導した。

細胞は党の末端基層組織である。人間はその身体を組成する細胞が健全で円滑に作用してこそ健康でありうるのと同様に、党はそれを構成している細胞が健全で機能と役割を十分に果たしてこそ強大になる。

総書記は 1991 年 5 月、党の歴史上はじめて催された全国党細胞書記講習会の参加者に『党細胞を強化しよう』と題する書簡を送った。

書簡では、党員を忠臣に育てあげること、党生活の組織と指導を正しくおこなうこと、大衆との活動を強化すること、細胞書記の役割を高めることなどについて指摘し、「すべての党細胞を忠誠の細胞にしよう！」、これがこんにち党が示している重要なスローガンであり、党組織の中心的な課題であるとした。

全国党細胞書記講習会を契機に、忠誠の党細胞をつくる運動が全党的に力強くくりひろげられ、この過程で党細胞の戦闘力はいちだんと強まった。

総書記は、党細胞を忠誠の細胞にする運動が新たな高い段階に入っていた 1994 年 3 月末から 4 月初にかけて全党細胞書記大会を開くことを発議した。そして大会が成功裏におこなわれるよう報告書をはじめ大会の文書を逐一検討し、大会の議事に関する諸問題を解決した。そして、大会に先だって再び講習会を催し、細胞書記の政治的・実務的資質と党活動の水準をいちだんと高めた。

全党細胞書記大会は、党と革命発展の要請に即して党細胞の機能と役割を高めて党の威力をさらに強め、社会主義総進軍を促すうえで重要な転機となった。

総書記は、領袖の思想と指導を具現することを人民政権建設の根本原則とし、人民政権の革命的性格を変わることなく固守するため、人民政権にたいする党の指導を否認したり弱めようとするあらゆる傾向や試みを断固排撃し、党の指導体系を確立した。同時に、人民政権が党の路線と政策を正しく具現するための種々の人民的施策を講じ、あくまで実行するよう指導した。

総書記は 1992 年 12 月、全国人民政権機関活動家講習会の参加者に『人民政権の優越性をいっそう高く発揮させよう』と題する書簡を送った。

書簡では、人民政権の優越性を高く発揮させ、社会主義制度をいっそう輝かすべく人民政権建設の根本原則を示し、党の指導は人民政権建設の生命線であるとした。

総書記が党建設と党活動全般を賢明に指導した結果、党と人民大衆は一つの社会的・政治的生命体として結びついた強力な主体をなすようになり、革命の最高指導組織としての党の機能と役割はいっそう高まった。

青年前衛

総書記は、チュチェの革命偉業を継承、完成する過程で党・軍・青年重視の思想をうちだし、党は青年を信頼して革命を進めており、青年の運命はすなわち党の運命、社会主義の運命であるとし、党建設、軍建設とともに青年活動の強化発展に大きな力を傾けた。

社会主義建設を進めていた国々で真っ先にブルジョア自由化の

風潮に染まり、社会の禍の種となり、社会主義を崩壊させる突撃隊となったのは青年であった。歴史的教訓は、青年問題をどう解決するかは社会主義偉業の成否にかかわる要の問題であることを示していた。

青年問題の重要性を見きわめ、早くから青年活動に大きな力を注いできた総書記は、青年同盟に最高司令官の強力な予備戦闘部隊、別働隊という称号を与え、青年が党の真の前衛としての誇りと自負をもち、チュチェの革命偉業を継承、完成すべく聖なる使命と任務をりっぱに果たすよう、精力的に導いた。

1990 年 4 月、全国青年活動者大会に際して、総書記は「党が決心すればわれわれは実行する！」というスローガンを大会の基本精神とし、大会の活動全般を細かく指導した。主席の参加のもとに開かれたこの大会は、党と領袖のまわりに一心団結し、社会主義の旗を高くかかげてチュチェの革命偉業の道を進む前衛的朝鮮青年の革命的気概を誇示し、青年を 90 年代の進軍へと奮起させる総動員大会となった。

総書記は、主席が朝鮮共産主義青年同盟を結成し、チュチェの青年運動の起源を開いた 1927 年の歴史的な日である 8 月 28 日を「青年デー」として制定した。そして 1991 年 8 月 26 日に初の青年デーを迎える全国の青年と社労青活動家に『青年は党と領袖に限りなく忠実な前衛になろう』と題する書簡を送り、社会主義偉業を固守し輝かすべき革命発展の要請に即して青年運動をさらに発展させる課題を示した。

書簡では、「青年は党と領袖に限りなく忠実な前衛になろう！」、これが青年がかかげていくべきスローガンであるとし、

すべての青年はこのスローガンを高くかかげ、チュチェの革命偉業のたのもしい前衛になるため積極的に努力すべきであると強調した。

総書記は社会主義労働青年同盟第8回大会の開催を発議し、大会が朝鮮の青年運動が歩んできた栄光にみちた道のりを総括すると同時に、党を擁護する近衛隊、決死隊としての青年の闘争課題とその対策について十分討議するようはからった。

大会をひかえた1993年1月5日、総書記は青年事業部門の責任幹部に会い、青年運動を新たな高い段階へと発展させる課題と方途を示し、つぎのように述べている。

「『青年は人民大衆中心の朝鮮式社会主義を擁護し輝かす党の近衛隊、決死隊になろう！』、まさにこれが現段階においてわが党が青年に提示している革命的スローガンです」

1993年2月18日、平壌では社会主義労働青年同盟第8回大会が盛大に開かれた。

大会に参加した代表たちは赤旗を翻しながら「金日成」「金正日」「青年前衛」のスローガンを連呼し、『あなたがいなければ祖国もない』の歌を歌った。そして、万一、敵が無謀な侵略戦争を引き起こすならば、こぞって立ち上がり、500万の銃弾、爆弾となって侵略者を撃滅し、党と領袖、社会主義祖国を命を賭して守るという決死の覚悟をかためた。

かれらは、大会に臨席した総書記につぎのように誓った。

党はわれらの運命

われらは社会主義偉業の断固たる擁護者、貫徹者

われらは社会主義建設の先鋒隊、突撃隊

祖国防衛は青年の神聖な義務
党の指導は社労青の第一の生命
…

アメリカ帝国主義とその手先の反共和国、反社会主義策動が極度に達するや、青年は社労青第 8 回大会での誓いを実践に移した。

1993 年 3 月、準戦時状態を宣する最高司令官の命令が下達されてわずか 10 余日のあいだに、150 余万人もの青年が人民軍への入隊を志願した。

社労青第 8 回大会における 500 万の青年の銃弾・爆弾宣言について、1994 年 6 月に開かれた朝鮮少年団第 5 回大会では 800 万の青少年が銃弾・爆弾になることを宣言した。

数百万の朝鮮青年が、総書記の指導にしたがい、党を擁護し、社会主義偉業を固守し輝かすうえで、朝鮮労働党の青年前衛としていっそう力強く前進するようになった。

革命的経済戦略の貫徹へと

朝鮮労働党第 6 回大会がうちだした社会主義経済建設の新たな展望目標を達成するための朝鮮人民のたたかいは、内外の情勢が複雑をきわめるなかで進められた。帝国主義者と反動勢力は反社会主義攻勢のほこ先を朝鮮に向け、政治的、軍事的にだけでなく、経済的に孤立させ圧殺しようと策動した。一方、多くの国における社会主義の挫折と社会主義世界市場の崩壊は、朝鮮の対外経済関係にも根本的な変化をもたらした。このような状況のもとで社

会主義を固守するためには、人民生活を向上させ、人民に社会主義にたいする確固たる信念を抱かせる必要があった。

1993 年 12 月の党中央委員会第 6 期第 21 回総会で主席は、今後数年間を調整期とし、この期間に経済建設で農業第一主義、軽工業第一主義、貿易第一主義を実現する方向をとり、人民生活をいちだんと向上させなければならないと述べた。

総書記は主席が示した党の革命的経済戦略の貫徹へと全党、全民、全国を奮い立たせた。

総書記は幹部に革命的経済戦略の要求と党の意図を認識させ、かれらが確信をもって経済活動を強力に推進するよう指導した。

総書記は 1994 年 3 月 1 日の党中央委員会責任幹部との談話『党の革命的経済戦略を貫徹しよう』で、革命的経済戦略の要求と基本目標、党の意図とその遂行方途を明示した。

談話では、革命的経済戦略を貫徹し社会主義経済建設に転換をもたらすことは、こんにちわれわれに提起されているもっとも重要な革命課題であるとし、つぎのように指摘した。

「わが党が示した革命的経済戦略は、調整期に農業第一主義、軽工業第一主義、貿易第一主義の方針を貫徹し、人民経済の先行部門である石炭工業、電力工業、鉄道輸送を確固として優先させ、金属工業をひきつづき発展させることです。これは、変化した国際的環境と人民経済の現実的要請に即して、国の経済構造を重工業を基本とする経済から農業と軽工業を基本とする経済へと改造し、対外貿易で方向転換をおこなうという経済戦略です」

農業と軽工業、貿易の発展に力を集中して人民生活の問題を抜本的に解決し、人民経済の先行部門を優先させ、すべての部門で

生産を正常化し、既存の経済的土台の威力を十分に発揮させること、これが党がうちだした経済戦略の基本目標である。

総書記は党の革命的経済戦略の重要性について指摘し、祖国解放戦争の時期に 1211 高地を守ることが戦争の勝利を保障する要の問題であったとすれば、こんにち経済戦略目標を実現することは、帝国主義者のあらゆる反共和国策動を粉砕し、社会主義を守り輝かせるカギであると述べた。

その後総書記は、幹部が党中央委員会第 6 期第 21 回総会での主席の教示と総会決定にたいする学習をやり直し、再出発するよう措置を講じた。

党の革命的経済戦略を貫徹するうえで重要な問題は、この戦略の要求に即して経済組織活動を綿密におこない、経済管理を正しくおこなうことであった。

総書記は党の経済戦略の貫徹において、政務院をはじめ行政・経済機関の機能と役割を高めることに大きな関心を払った。

政務院責任制、政務院中心制を強化し、政務院が国の経済活動に責任を負う主人として、党の経済政策と方針にそって経済活動全般を統一的に掌握し、経済作戦を正しくおこなうとともに、経済活動で提起されるすべての問題を政務院に集中させ、政務院の主管のもとに解決していくようにした。同時に、すべての活動家が政務院の決定、指示を無条件に実行する厳格な規律をうち立てた。

そして党の革命的経済戦略を貫徹するため、計画化を抜本的に改善し、資材供給活動を正しくおこない、経済幹部が確たる信念をもち、自力更生、刻苦奮闘の革命精神を高く発揮して仕事に打

ち込むべきであると強調した。

総書記は多くの機会に、党の革命的経済戦略は展開力のある指揮メンバーを求めているとし、すべての幹部はチュチェの観点に立って現実を直視し、必勝の信念と不屈の闘志をもって仕事にあたらなければならないと述べた。そして、党が革命的な経済戦略を示しており、自立的民族経済の強固な土台がある以上、社会主義経済建設に必ず革命的転換をもたらすことができる、という確信を与えた。

3　偉大な将軍

最高司令官

朝鮮人民と人民軍将兵は以前から、金正日総書記の指導を受けることを大きな栄誉とし、誇りとしてきた。

金日成大元帥と金正淑女史の天稟をそのまま受け継ぎ、幼いころから軍事的気質と資質を備えてきた総書記は、主席の主体的な軍事思想と理論、戦法を深く研究、体得し、それをさらに発展させ豊富にした。そして人民軍を一当百の革命武力に強化し、社会主義の獲得物を守るうえで不滅の功績を積み上げた。

チュチェの軍建設偉業に卓越な貢献をした党中央委員会政治局常務委員会委員、党中央委員会書記である金正日将軍は、1990年 5 月に朝鮮民主主義人民共和国国防委員会第一副委員長に、1991 年 12 月 24 日には党中央委員会第 6 期第 19 回総会で朝鮮人

民軍最高司令官に推戴された。

主席は朝鮮人民軍中隊政治指導員大会で、参加者と大会を通じて人民軍の全将兵に党中央委員会総会の決定を伝えてつぎのように述べた。

「昨日の党中央委員会総会では、全人民軍軍人と人民の一致した意思にしたがい、金正日同志を朝鮮人民軍最高司令官に推戴しました。

…

わたしは、全人民軍将兵が、金正日最高司令官の命令をわたしの命令と同じくみなし、その命令に絶対服従し、最高司令官の指導に忠実にしたがうよう期待します」

全朝鮮人民と人民軍将兵の期待を担った総書記は、主席の軍建設偉業をあくまで継承、完成するために精力的に活動した。

総書記は、人民軍が名実ともに領袖の軍隊、党の軍隊、人民の軍隊としての使命と任務をりっぱに果たせるようにするため、なによりもすべての軍人を党と領袖に限りなく忠実な真の革命家に育てることに主力を注いだ。そして最高司令官の命令、指示を無条件に実行する革命的軍紀を確立した。同時に、緊張を緩めることなく戦闘準備を完成し、すべての軍人を一当百の戦士に育てることに力を集中するよう導いた。

総書記は 1990 年 5 月、朝鮮人民軍訓練担当者講習参加者に送った書簡『戦闘・政治訓練を力強くくりひろげ、人民軍をさらに強化しよう』で、つぎのように述べている。

「全軍に革命的訓練気風を確立するためには、軍人がチュチェの訓練観をもたなければなりません。チュチェの訓練観は、革命

武力の主人であり革命戦争の直接の担い手である軍人大衆を中心にすえて訓練に臨む観点と態度です。チュチェの訓練観を確立するということは、訓練を革命戦争勝利のための重要な保証とみなし、訓練に鋭意専心することを軍人の真の生きがいとみなすということです。

軍人大衆は武力構成の基本要素であり、革命戦争の主体です。軍人大衆をどのように準備させるかによって、軍隊の戦闘力と戦争の勝敗が左右されます」

総書記は、軍人を政治的、思想的に鍛えられた忠誠の隊伍にし、主席が示した強靭な革命精神と絶妙な戦術、屈強な体力、百発百中の射撃術、鉄の規律を内容とする 5 大訓練方針を貫くため、主体性、政治性・思想性、戦闘性、科学性の 4 大原則を基本とする革命的訓練観を確立するよう導いた。

また、指揮官、政治幹部の陣容をうちかため、かれらの責任感と役割を高めることに深い関心を払った。とくに、人民軍の基本戦闘区分隊であり全軍強化のキーポイントである中隊を強化するため、朝鮮人民軍中隊長大会、中隊政治指導員大会、下士官長大会などを開き、中隊を政治的、思想的にうちかため、中隊の戦闘準備を現代戦の要求に即して完成するうえで提起される原則的問題を明らかにした。そして砲兵大会、工兵大会をはじめ軍種、兵種、専門兵別大会を招集し、人民軍内の幹部を党と領袖に限りなく忠実で、革命的展開力と決断力のある有能な軍事指揮官、政治幹部に準備させるとともに、人民軍の戦闘力を強化し、武力装備の現代化をいっそう促すようにした。

総書記は将兵一致、軍民一致、党青一致の美風を人民軍が備え

るべき大切な品格と規定し、この 3 つの一致が軍人の軍務生活に十分に具現されるよう細心に指導した。

チュチェの軍建設偉業を賢明に導き、社会主義祖国を守りぬいた総書記は、1992 年 4 月に朝鮮民主主義人民共和国元帥称号を授与され、1993 年 4 月 9 日には最高人民会議第 9 期第 5 回会議で国防委員会委員長に推戴された。

1992 年は、主席の誕生 80 周年と総書記の誕生 50 周年にあたる意義深い年であった。

主席は 1992 年 2 月 7 日、総書記の誕生日である 2 月 16 日を祝日とすべく中央人民委員会の政令を裁可した。しかし、総書記が重ねて辞退したため政令は公布されなかった。政令が公布されたのはそれから 3 年後の 1995 年 2 月であった。

主席は総書記の誕生 50 周年を祝って、つぎのような頌詩をつくった。

白頭山頂に　正日峰そそり立ち
小白水の碧き流れ　よどみなし
光明星誕生し　いつしか 50 年
文武忠孝兼備せるを　こぞって称えけり
万民称賛の心　ひとしくして
歓呼の声　天地をゆるがす

1992・2・16

金　日　成

頌詩を手にした総書記は、この頌詩の一節一節を心に刻み、今

後、革命にいっそう忠実であることを誓った。

同年 4 月 25 日、平壌の金日成広場では金日成大元帥と最高司令官金正日元帥の臨席のもとに、朝鮮人民軍創建 60 周年慶祝閲兵式が盛大におこなわれた。

総書記は閲兵式で人民軍の全将兵につぎのように答礼した。

「英雄的朝鮮人民軍将兵に栄光あれ！」

瞬間、全閲兵隊伍は「金日成」「金正日」「一心団結」の喊声をあげた。

総書記は 1993 年 7 月、祖国解放戦争勝利 40 周年を迎え、老兵大会とともに再び盛大な閲兵式を催し、祖国解放戦争勝利記念塔を大記念碑として建立することによって、それが革命武力の威力を誇示し国防力をいっそう強化する重要な契機となるようにした。

朝米対決

総書記は朝鮮人民と人民軍を正しく導いて、帝国主義連合勢力の反共和国・反社会主義圧殺策動を粉砕し、民族の尊厳と国の自主権をゆるぎなく守りぬいた。

ソ連および東欧諸国における社会主義の崩壊後、アメリカは社会主義朝鮮の抹殺をはかって執拗に策動した。こうして、1993 年の初めから、朝鮮は帝国主義と社会主義の厳しい対決場となった。

アメリカは一時中断していた「チーム・スピリット」合同軍事演習の再開を公表し、20 余万の大兵力と核爆弾投下用の戦略爆撃機、超大型核空母などの現代的大量殺戮兵器を投入して史上最大規模の「チーム・スピリット 93」合同軍事演習を強行し、朝鮮人

民を威嚇した。同時に「核疑惑」騒動を起こして、朝鮮の情勢をますます緊張させた。

朝鮮はアメリカの核恐喝を排し、朝鮮半島の非核化を実現するため、1985 年 12 月に核拡散防止条約に加入していた。

その後も核恐喝を続けてきたアメリカが、南朝鮮からの核兵器の撤収を公言し、「チーム・スピリット」合同軍事演習の中止を宣言したことと関連して、朝鮮は、1992 年、国際原子力機関と核保障協定を結び、国際原子力機関の特定査察を順調に受けてきた。ところが、第 6 次特定査察を前にして、かれらは突然、2 カ所の軍事対象の査察を要求してきた。

かれらはこの要求が断固拒絶されると、集団的制裁を云々して恐喝した。日本の反動派と南朝鮮当局者も、アメリカの片棒をかついで反共和国騒動に熱をあげた。アメリカの策動によって、北南朝鮮間の対話は全面的な凍結状態に陥り、ようやく成立した北南間の不可侵合意書の実行は重大な障害に直面した。こうして朝鮮では一触即発の超緊張状態がかもしだされたのである。

総書記はこの重大な時局にあたって、1993 年 3 月 8 日、アメリカ帝国主義の圧力と戦争策動に断固として対処すべく、朝鮮人民軍最高司令官命令第 0034 号「全国、全民、全軍に準戦時状態を宣布することについて」を下達した。

総書記は、アメリカ帝国主義はあらゆる現代的戦争手段を総動員して共和国北半部に侵略のほこ先を向け、新たな戦争挑発の機会を虎視眈々と狙っているが、誤算もはなはだしい、かれらが数十万の大兵力と大量殺戮兵器を投入して「チーム・スピリット」合同軍事演習を展開するからといって驚く朝鮮人民ではないし、

戦争が怖くて引き下がるような人民軍ではない、いまわれわれには、白頭の厳寒のなかで 100 万の日本関東軍を撃破し、熾烈をきわめた祖国解放戦争でアメリカ帝国主義と 15 の追随国軍を打ち破った英雄的人民と一当百の朝鮮人民軍があり、領袖、党、大衆の一心団結した力、軍と人民が血縁的にかたく団結した不抜の威力がある、朝鮮人民軍は現代的な攻撃手段と防衛手段をともに備えた百戦百勝の革命武力に成長しており、全人民が武装し、全国土が要塞化されているため、いかなる侵略者をも一撃のもとに掃滅する万端の準備が整っている、民族の尊厳と国の平和を貴ぶ朝鮮人民は、戦争を望まないが、自己の尊厳をじゅうりんされてまで平和を哀願するようなことはしないであろう、もしアメリカ帝国主義と南朝鮮かいらい一味が新たな戦争を起こすならば、朝鮮人民と人民軍は党と領袖のため、血潮をもってかちとった人民大衆中心の朝鮮式社会主義のため、最後まで戦って侵略者に殲滅的な打撃を与え、英雄朝鮮の尊厳と栄誉をいま一度とどろかせるであろう、アメリカ帝国主義と南朝鮮かいらい一味は共和国の寸土、一木一草をもみだりに侵すことができないことをはっきりと知るべきである、としてつぎのように命令した。

「わたしは、アメリカ帝国主義と南朝鮮かいらい一味の新たな戦争挑発策動によってわが国にかもしだされた重大な情勢に対処し、わが共和国と人民の安全を守るための自衛的措置として、つぎのように命令する。

1　全国、全民、全軍は 1993 年 3 月 9 日から準戦時状態に移ること。

2　朝鮮人民軍陸海空軍部隊および朝鮮人民警備隊、労農赤衛

隊、赤い青年近衛隊の全隊員は、高度の革命的警戒心をもって敵の一挙一動を鋭く注視し、かれらがいついかなるときに攻撃を加えてこようとも、一撃のもとに掃滅する万端の戦闘動員態勢を整えること。

3　全人民はわが党の主体的な戦争観点でしっかり武装し、片手にはハンマーと鎌を、片手には銃を取って、社会主義経済建設で一大高揚を起こすこと。

朝鮮人民軍最高司令官

金　正　日」

最高司令官命令はただちに嵐のような反響を巻き起こした。

朝鮮人民軍陸海空軍部隊、朝鮮人民警備隊、労農赤衛隊、赤い青年近衛隊の全隊員は万端の戦闘動員態勢を整え、陸海空にわたって祖国の安全をゆるぎなく守った。労働者や協同農民、知識人もみな、片手にはハンマーと鎌、片手には銃を取って、人民軍と全人民的防衛体制のさらなる強化のために立ち上がり、社会主義建設でも革命的高揚を起こした。他方、数多くの青年が人民軍への入隊および復隊を志願した。

総書記は準戦時状態の期間、作戦台から離れず、時々刻々と変化する敵情と前線の状況を鋭く分析、判断しながら全兵力を指揮統率し、ともに夜を明かす総参謀部の幕僚が銃声なき戦争で勝利するよう導いた。

ついで 3 月 12 日、朝鮮民主主義人民共和国政府は、アメリカと国際原子力機関の不当な「特別査察」強要に対抗し、民族の自主権と国の最高権益を守る措置として、核拡散防止条約からの脱退声明を発表した。これは、朝鮮にたいするアメリカの核戦争策

動と国際原子力機関の不当な行為にたいする当然の自衛的措置であった。

朝鮮労働党と共和国政府の断固たる措置により、アメリカは「チーム・スピリット 93」の中止を発表し、国際原子力機関も「特別査察」の要求を撤回せざるをえなかった。

総書記は 3 月 24 日、全国、全民、全軍に準戦時状態の解除命令を発した。

鋭い朝米対決は、朝米会談へと移行した。アメリカは会談で朝鮮に、国際原子力機関の査察の受容、北南対話の再開などの「前提条件」を持ち出し、会談をずるずると引きのばした。

こうした時期の 1994 年 6 月、金日成主席は元米大統領カーターと会見し、膠着状態に陥っていた朝米会談再開の決定的な契機をつくった。

総書記はアメリカ帝国主義者との対決戦を指揮する一方、朝鮮半島にかもしだされた新局面に即して、平和をかためるための重大措置を講じた。

アメリカによって停戦協定と停戦監視機構が歴史的に、系統的に破壊じゅうりんされてきたため、朝鮮半島には安保上危険な空白が生じ、アメリカ帝国主義の軍事的冒険と大規模な戦争演習によって非武装地帯は事実上存在しなくなっていた。

総書記はこうした状況を深く分析し、古い停戦システムを新たな平和保障システムに替えることを発議し、共和国政府の名でその提案を示すようにした。

4　民族の大団結をはかって

金正日総書記は、金日成主席の祖国統一構想を体して、全民族を新たな統一の熱気で沸き立たせた。

つとに主席は、人民への最大の贈り物は祖国の統一であるとして、これに全精力を注いできた。

総書記は、主席が頭に霜をいただいたのは、朝鮮民族が一日千秋の思いで待ち望んでいる祖国統一のためにあまりにも心を砕いているからだと、切々と語った。

総書記は、一時的な分裂が生んだ体制と思想の違いよりも、5000 年の歴史を通じてかたまった民族の共通性の方がはるかに大きく、個々の階級や階層の利害よりも、民族の団結によって統一を成就しようという民族共通の利害の方が貴重だとする主席の志を体し、主席の連邦制方式による祖国統一方案を実現するため、北と南、海外のすべての政党、団体、各階層人民が連合して全民族的な統一運動をくりひろげるよう導いた。

共和国北半部の各政党、大衆団体は、民族の団結を実現し、祖国統一の局面を開くための汎民族大会開催に向けて幅広い活動をくりひろげた。

南朝鮮の在野民主勢力の連合組織「全国民族民主運動連合（全民連）」はこれに全的な共感を示し、実務代表の接触をはかった。「全民連」顧問の文益煥（ムンイクファン）牧師は、1989 年の春、70 の老躯をおして分断の障壁を越え平壌を訪れた。かれは夢にも慕ってやまなかった主席の接見を受け、北半部に滞在する間、統一愛国活動を積

極的にくりひろげた。

文益煥牧師と「全大協」代表の平壌訪問を機に、朝鮮民族の統一の熱気はいっそう高まった。こうしたなかで、第 13 回世界青年学生祭典に参加した国内外の同胞は、「白頭から漢拏（ハンナ）まで」のシュプレヒコールを叫びながら平和統一大行進をおこなった。ついで板門店で祖国統一推進大会を開催したかれらは、祖国解放 45 周年にあたる翌 1990 年 8 月に板門店で、北と南、海外の同胞が祖国の平和と統一のための汎民族大会を開催することを決議し、1995 年を祖国統一実現の歴史的な年にならしめようと、全同胞に呼びかけた。

しかし、汎民族大会の準備は分裂主義者の妨害によって難航した。南朝鮮当局者は汎民族大会の発起団体を「利敵団体」と規定し、関連人士を弾圧する一方、右翼反動団体を操って大会を破綻させようとした。

けれども 1990 年 8 月、白頭山頂から出発した北と海外同胞の「祖国統一白頭－漢拏大行進」隊は、板門店で汎民族大会を開催した。大会は、主席が示した連邦制方式の統一方案を唯一の正当かつ合理的な統一綱領として全会一致で受け入れた。ついで同年 11 月、全民族的な統一愛国勢力の連合組織として、祖国統一汎民族連合（汎民連）が結成された。「汎民連」の結成は、民族の大団結によって祖国統一の主体的勢力を整えることをめざす北と南、海外の統一勢力のねばり強いたたかいの輝かしい成果であり、統一運動の組織化において画期的な意義をもつ出来事であった。

総書記はその後も、同胞の接触するあらゆる機会が、志を合わせ力を集めて祖国統一勢力を整える機会となるよう導いた。1990

年の秋、北と南の間ではじめてサッカー競技がおこなわれることになったとき、解放前におこなわれていた「京平サッカー競技」の名称を復活させてはという南朝鮮当局者の提案にたいし、北南「統一サッカー競技」とする代案を示した。また、北南海外同胞音楽会を開催するときにはその名称を「汎民族統一音楽会」と呼称するようはからった。

総書記は、「90 送年伝統音楽会」の開催問題が持ち上がったときも、90 年代初年の暮れを統一の熱気で飾るべきだとして、音楽会の目的と意義を祖国統一と結びつけて「90 送年統一音楽会」と呼称するようにした。

こうして、北京における第 11 回アジア競技大会では北と南の共同応援が実現し、ついで平壌とソウルで統一サッカー競技がおこなわれ、「汎民族統一音楽会」や「90 送年統一音楽会」も成功裏に開催された。こうしたなかで卓球とサッカーの北南単一チームが誕生し、第 41 回世界卓球選手権大会および第 6 回世界ユースサッカー選手権大会にそれぞれ出場した。

総書記は主席が 1993 年 4 月に発表した、民族大団結の大憲章であり統一綱領である『祖国統一のための全民族大団結 10 大綱領』を高くかかげて、全民族の団結した力で祖国統一の転機を開くためのたたかいを力強くおし進めた。

共和国政府と諸政党、大衆団体、それに海外同胞組織と汎民連組織は、全民族大団結 10 大綱領を支持してつぎつぎに声明、談話を発表する一方、集会や研究討論会を催し、署名運動をくりひろげた。

総書記は、南朝鮮に抑留されている李仁模(リインモ)をはじめ非転向長期

囚の送還問題を祖国統一のたたかいの一環とみなし、その実現に腐心した。

李仁模は祖国解放戦争の時期、朝鮮人民軍の従軍記者として前線に赴き、のち智異(チリ)山人民遊撃隊で活動中、銃創を負って逮捕された。34 年という長い歳月、獄中で祖国統一の意志を守りつづけた李仁模の手記が南朝鮮で発表され、その存在が世に知られたとき、誰よりも喜んだのは、主席と総書記であった。

朝鮮の政党、大衆団体は南朝鮮赤十字社に李仁模の送還を要請する手紙を送る一方、各国の赤十字団体や国際機関にもアピールして、かれの送還を求める連帯運動を展開した。また北南間の対話の場でもかれの送還を強く要求した。

総書記は 1993 年 2 月に、「信念と意志の化身・李仁模同志をわが党は忘れていません」という親書をかれの家族に送った。そして、その送還が決まると、準戦時状態が宣布され、一触即発の重大な情勢がかもしだされていたときであったにもかかわらず、全国家的な歓迎行事を組織し、かれの健康回復と生活上の便宜をはかった。

分裂主義者の策動を粉砕し祖国統一をめざすたたかいが強くおし進められていた時期、そして国際舞台で社会主義が試練に直面していた時期、李仁模が社会主義祖国のふところに抱かれたことによって、朝鮮人民の社会主義祖国への自負と信頼感はいやがうえにも強まり、祖国統一の意志がいっそうかたまった。

このように祖国統一をめざすたたかいが北と南、海外で組織的に力強く展開され、民族の主体的勢力がいっそう強化されていくなかで、全同胞の統一への熱望はかつてなく高まり、統一運動を

全民族的な規模で拡大、発展させる新たな局面が開かれた。

5　社会主義の再建をはかって

一部の国で社会主義が挫折し資本主義が復活するという事態を前にして、帝国主義者と反動派はあたかも資本主義が「勝利」し、社会主義が「終焉」を告げたかのように喧伝し、人々のあいだに思想的混乱を引き起こしていた。

金正日総書記は、1992 年 1 月 3 日、朝鮮労働党中央委員会の責任幹部との談話『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』で、社会主義が挫折した原因とその教訓について明確な解答を与え、社会主義偉業の勝利と完成の道を明示した。

総書記は、社会主義への道は新しく開拓していかなければならない前人未踏の道であり、帝国主義との鋭い対立と闘争のなかで前進しなければならない厳しい革命の道であり、したがって社会主義の前進途上には難関と試練があるはずであり、不測の事態が発生することもある、一部の国での社会主義の挫折と資本主義の復活は、歴史発展の主流から見るとき、部分的で一時的な現象にすぎない、と指摘した。

そして社会主義が挫折した根本的原因を正しく解明し、そこから教訓を汲みとってこそ、社会主義偉業を固守し前進させることができるとして、つぎのように述べている。

「社会主義を建設していた一部の国で社会主義が挫折した根本的な原因は、一言でいって、社会主義の本質を歴史の主体である

人民大衆を中心にして理解しなかったため、社会主義建設における主体の強化と主体の役割の向上問題を基本としてとらえられなかったところにあります」

総書記は、社会主義が挫折したのは、社会主義の根本的な原則を一貫して堅持せず、社会主義諸国各党間の関係で自主性にもとづく国際的連帯を強めることができなかったところにも原因があるとし、ここから教訓を汲みとって、社会主義運動を新たな基盤の上で再建し、社会主義偉業を高揚へと導かなければならないと指摘した。

世界の多くの国の共産党、労働者党は、ソ連と東欧諸国の事態から深刻な教訓を汲みとり、国際共産主義運動を新しい基盤の上で再建する動きを見せはじめた。

こうしたなかで、1992 年 4 月に、世界各国の共産党、労働者党、社会主義をめざす進歩的政党の党首あるいは代表団が主席の誕生 80 周年を祝って、朝鮮を訪れた。

朝鮮滞在中、かれらは朝鮮こそ社会主義のとりでであるとし、朝鮮を中心に社会主義の再生をはからなければならないという確信を抱くようになった。かれらは多党間ないし 2 党間の接触を通して、この機会に社会主義偉業を固守する確たる意志を表明する文書を作成し、発表することを一致して認めた。

こうして 1992 年 4 月 20 日、朝鮮労働党を含めた 5 大陸 70 政党の 48 名の党首をはじめ各党代表が連名で署名した歴史的な平壌宣言「社会主義偉業を擁護し、前進させよう」が採択された。

「平壌宣言」は、一部の国で社会主義が挫折した事態とその原因、社会主義の真理性と勝利の必然性を明らかにするとともに、

社会主義偉業を擁護し、前進させる課題を明確に示し、つぎのように宣言した。

「われわれは、社会主義を固守し、資本主義と帝国主義に反対してたたかう世界のすべての進歩的政党、団体、人民とかたく団結し、社会主義の旗を高くかかげて前進するであろう。

みな社会主義偉業にたいする確たる信念をもって、人類の未来を開拓するため最後までたたかおう。

終局的勝利は社会主義をめざし団結してたたかう人民にある。

社会主義偉業は必勝不敗である」

各国の共産主義者と革命家は、「平壌宣言」を現代の『共産党宣言』であるとして熱烈に歓迎した。「平壌宣言」の発表後わずか数年の間に 220 余の政党が、この宣言を共同綱領としてかかげ、新たなたたかいの道に立つことになった。

総書記は、各国の進歩的政党を自主的に思考し、行動する強力な勢力として立ち直らせるよう支援することを崇高な使命とみなした。

総書記は、1992 年 10 月 10 日、朝鮮労働党創立 47 周年に際して発表した論文『革命的党建設の根本問題について』で、労働者階級の党をいかに建設すべきかという問題に科学的な解答を与えた。

まず、朝鮮労働党建設の歴史的な経験にもとづいて、労働者階級の革命的党の建設で堅持すべき根本的な原則は、第一に、党を科学的かつ革命的な指導思想によって建設することであり、第二に、党を勤労人民の大衆的政党として建設することであり、第三に、党内に思想と指導の唯一性を確固として保障することである、

と指摘した。

ついで、党の統一の強化を党建設の中心課題として規定する一方、思想を基本にして党を建設することが党建設の一貫した方針であるとし、思想の一色化を実現することが党の基本的な任務であり、全社会にたいする政治的指導を確固として実現することが党の基本的な使命であるとした。

社会主義偉業を擁護し、固守するたたかいは、社会主義を不当に非難し中傷する勢力との深刻な思想的・理論的対決を伴った。帝国主義者と反動派は、一部の国で社会主義が挫折し、資本主義が復活したのを奇貨として、社会主義を「全体主義」「兵営式」「行政命令式」と誹謗し、荒唐な詭弁を流布した。

総書記は、1993 年 3 月 1 日、朝鮮労働党中央委員会機関誌『勤労者』に発表した談話『社会主義にたいする誹謗は許されない』で、社会主義を誹謗する詭弁を思想的、理論的に論破した。

総書記は、「全体主義」「兵営式」「行政命令式」という非難は、地球上に社会主義が出現した当初から帝国主義者によって悪辣に繰り返されてきた反社会主義的悪宣伝と本質上なんら異なるところがなく、社会主義が自由も民主主義もない非人間的な社会であるかのように宣伝してきた帝国主義者の悪宣伝を、表現を変えて繰り返しているにすぎないとした。そして、そのような非難は社会主義の背信者が社会主義を崩壊させた裏切り行為を正当化し、社会主義の再生を防ごうとするあがきにすぎない、と指摘した。

総書記の精力的な活動によって社会主義の優越性と勝利の必然性が実証され、挫折と試練の苦しみをなめていた社会主義は再生、再建の道をより確実に歩むことができるようになった。

六　1994 年 7 月～2000 年 12 月

1　領袖永生の大業成就

1994 年 7 月、金正日総書記は耐えがたい喪失の悲しみに沈んだ。人民大衆の自主偉業のため、祖国の繁栄と人民の幸せのため、そして国の統一のためにすべてを尽くして精力的に活動した金日成主席が、1994 年 7 月 8 日に思いがけなく急逝したのである。

朝鮮革命と祖国統一の前途に新たな局面が開かれつつあった時期に主席が死去したことは、朝鮮労働党と革命にとって最大の痛恨事であった。

総書記は 7 月 8 日から 7 月 17 日までを追悼期間とするよう指示した。そして主席の霊柩が安置されている錦繍山議事堂で自ら葬儀の世話役を務めながら、万寿台の主席の銅像を何度も訪ねた。

折しも雨が降りしきる深夜、主席の銅像を訪ねて弔意を表する平壌市民の列は延々とつづいた。そのなかには上着を脱いで花輪にかぶせ、びしょぬれのまま銅像に向かう青年学生たちの姿も見られた。しばしそうした光景を見守っていた総書記は翌日、幹部たちに感慨をこめて語った。朝鮮人民の領袖を欽慕する思想・感情、精神道徳的品性はどの国の人民とも比較できない高尚の極みだ、朝鮮人民は領袖の福運に恵まれたが、幹部はまた人民の福運に恵まれている、主席は人民を領袖と党のありがたさを知るりっぱな人民に育てた、われわれはこれを永久に大きな誇りとして持ち続けなければならない、と。

朝鮮人民は老若男女を問わずみなが喪主となり、日夜引きも切らず主席の霊柩や銅像、事績碑、それに追慕行事の場を訪ねて熱い涙を流し、深い哀悼の意を表した。

訃報に接した南朝鮮人民や海外同胞、それに世界の諸人民も悲しみに沈んだ。

南朝鮮の人民はソウルをはじめ各地に焼香所を設け、さまざまな追悼会や哀悼行事をおこなった。そして青年学生や在野の人士は、当局の北への公式弔問団派遣忌避と弔意表示にたいする弾圧行為を憤怒を込めて糾弾した。

総聯をはじめ海外同胞組織や同胞の居住するすべての地域から弔電や花輪が寄せられ、弔意行事がとりおこなわれた。そして数多くの弔問代表団や弔客が祖国に来て主席の霊前に深甚なる弔意を表した。

166 カ国の国家元首および党首、それに数多くの弔客が朝鮮民主主義人民共和国の在外大使館や代表部を訪ねて弔意を表した。そして約 4000 通の弔電、3300 余本の花輪が寄せられた。かれらは「社会主義の巨星墜つ」、「現代のもっとも偉大かつ老練な政治家、世界革命運動の偉大なとりでを失った」と、それぞれ深い哀悼の意を表した。そして世界各国と国連をはじめ各種国際機構では追悼の日、追悼期間を定めて弔旗をかかげた。また国連事務総長は「金日成主席は歴史に長く残る偉人」だとし、弔意声明を発表した。

追悼期間は言うに及ばず、主席との永別の時が迫るにつれ、朝鮮人民の痛惜の念はいや増した。朝鮮人民のこの心情を推し測った総書記は、追悼期間を延ばすようはからい、告別式を朝鮮式の

最上のものにするため心を砕いた。国家元首の霊柩を火砲牽引車が引く慣例を破って、主席が生前に利用していた乗用車を霊柩車とし、それをオオヤマレンゲで飾った。そして霊柩車の前車に主席の大肖像画をかかげ、花輪の自動車隊列をしたがわせた。大肖像画は告別式に先立って総書記が選択し形象化させた明るい笑顔の遺影であった。

肖像画ができあがったという報告を受けて現場に出かけた総書記は、遠目近目に足を移して肖像をあらためた。そしてその場を去りかけては三度も引き返し、主席の影像は見れば見るほど生前の明るい笑顔を彷彿させる、生前にこういう笑顔の肖像をかかげていたらどんなによかったろうか、と何度も繰り返した。

7 月 19 日の告別式の日、この肖像画を仰ぎ見た朝鮮人民は、主席にたいする懐かしさと哀惜の念にたえかねて誰もがむせび泣いた。

この告別式の光景を目撃した外国人は、「一人の笑顔が万人を泣かせた写真」と感服した。

7 月 20 日、中央追悼大会が金日成広場で厳かに挙行された。

告別式の模様を実況中継したアメリカの CNN テレビは、「今回北朝鮮の人々は金日成主席の葬儀を実父の葬儀としてとりおこなった。金日成主席は生前、北朝鮮は一つの家庭だと述べたが、当時西側の人たちはその言葉が理解できなかった。ところが、火曜日にとりおこなわれた葬儀は、北朝鮮の人民が金日成主席を父と仰いできたことを明白に示した」と報じた。

総書記は、追悼期間に人民が流した涙はとりもなおさず領袖、党、大衆の一心団結の証だとし、主席を永遠なる太陽、社会主義

朝鮮の始祖として仰ぎつづけようとする朝鮮人民の切々たる心情を汲んで、「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにある」「偉大な領袖金日成同志の革命思想でいっそうしっかり武装しよう！」というスローガンを提示した。

この期間に、記録映画『偉大な領袖金日成同志はとわに生きる』『偉大な生涯の 1994 年』、叙事詩『永遠なるわれらの領袖金日成同志』、頌歌『金日成主席は永遠にわれらとともに』などの名作が発表され、普及した。そして明るい笑顔の主席の大肖像画と「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにある」という標語が街や村ごとにかかげられ、金剛山や妙香（ミョヒャン）山の天然岩には主席を称賛する文字が刻まれた。

総書記は錦繍山記念宮殿をチュチェの最高聖地として整備し、主席をより丁重に安置することに腐心した。記念宮殿の形象図案をあらためた総書記は、ホールを別個に設け、そこに主席の大理石の立像を立てるよう指示した。主席が錦繍山議事堂で執務していたときの姿、人民や外国からの訪問客と会見したり記念撮影をしたりしたときの姿がいちばんよく知られている、だから立像はそのような姿にするようにと命じた。そして立像のバックには朝焼けをあしらうようにした。

こうして、主席の一周忌に際して錦繍山記念宮殿が開館されることになった。

その後、1997 年 7 月 8 日に、朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会、朝鮮民主主義人民共和国政務院の共同決定「偉大な領袖金日成同志の革命的生涯と不滅の業

績を末長く輝かせるために」が採択された。これによって、主席が誕生した 1912 年を元年とするチュチェ年号および 4 月 15 日の太陽節が制定された。

1998 年 9 月 5 日の最高人民会議第 10 期第 1 回会議では新たな社会主義憲法が採択された。この憲法の序文には、金日成主席を共和国の永遠なる主席とすること、そしてこの憲法は主席の国家建設に関する思想および業績を法制化した金日成憲法であることが明記された。

革命実践によって革命の先輩をおし立て、共産主義的道徳観の模範を示した総書記は、1995 年 12 月に『革命の先輩を敬うのは革命家の気高い道徳的信義である』と題する談話を発表した。

この談話で、革命の先輩を敬い、とくに革命先輩の最高代表者である領袖に忠誠を尽くすというもっとも気高い道徳的信義を守ってこそ、人民大衆の自主偉業、社会主義偉業を継承し達成することができることを明らかにした。

この談話は、朝鮮共産主義者の高潔な道徳的信義と人間的品格をあらためて明白に示すものであった。

2　主席の遺訓を体して

金正日総書記は言い知れぬ喪失の悲しみを強靱な意志で耐えぬき、主席の遺訓貫徹へと全党、全国、全民を奮い立たせた。

総書記は耐えがたい悲しみに身もだえる幹部たちを慰撫し、わが国のように全人民が主席のまわりにかたく団結している国はな

い、いま人民が慟哭し流している涙は、主席を亡くした悲しみの涙であるだけでなく、主席の遺志どおり党の指導に忠実にしたがい、主席が切り開いたチュチェの革命偉業をあくまで達成せんとするかたい信念と誓いの涙でもある、われわれにとってこれがもっとも貴いものだと語った。そして、主席の遺訓貫徹のため、悲しみを 100 倍、1000 倍の力と勇気に変えて奮起すべきだと、こんこんと諭した。

総書記は 1994 年 7 月 17 日の党中央委員会政治局会議で、主席の遺志どおり経済活動を早急に活性化し、1994 年 7 月 5 日と 6 日の経済活動に関する協議会での主席の教示を実行する対策を討議にかけた。協議会での主席の結語は、国の経済を帝国主義者のいかなる経済封鎖にも微動だにしない主体的なものに発展させる経済建設綱領であった。

総書記はこの結語をすべての幹部に録音で聴取させ、こぞってその実行に立ち上がらせた。

100 日追悼会当日の 10 月 16 日、総書記は党中央委員会の責任幹部との談話『偉大な金日成同志をとわに戴き、その偉業をあくまで達成しよう』で、主席の遺訓貫徹をあらためて強調した。

総書記は、主席亡き後になって主席の偉大さをことさらに胸熱く感じる、主席は最期の瞬間まで党と革命、祖国と人民のため精力的に活動し、執務室で逝かれた、このように最後をきちんと締めくくったという点でも、主席は偉人の中の偉人だった、われわれは 100 年、1000 年と子孫代々主席を領袖として戴き、すべての事業を主席式におこなっていくべきだと語った。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「わたしはこれから、金日成同志が革命と建設を指導する歴史的過程で残した教えを幾百、幾千年が過ぎても変わることなく唯一の指導指針とし、あくまで実行していくつもりです」

総書記は7月5日と6日の教示にかぎらず、生前の教示のすべてが主席の遺訓だとし、各部門、各分野でその遺訓を貫徹すべく精力的に指導した。

100 日にわたる追悼期間にも、主席の延白（ヨンベク）原現地指導一周年の際、党及び政府の幹部、中央機関の責任幹部を現地に送り、主席の現地教示をりっぱに実行した農業勤労者を励ますようはからった。

総書記はまた、主席がかねてから構想していた清流（チョンリュ）橋と錦綾（クムルン）トンネルを完成させることにし、1994 年 11 月に朝鮮人民軍最高司令官命令「平壌市に清流橋（2 段階工事）と錦綾第 2 トンネルを建設すること」を発し、朝鮮労働党創立 50 周年に当たる 1995 年 10 月 10 日を契機に完工させた。

さらに進行中であった檀君（タングン）陵の改築工事にも深い関心を払い、必要な措置を講じた。1994 年 10 月末には新装なった檀君陵を見て回り、長い年代神話としてのみ伝えられてきた檀君が実在した朝鮮民族の始祖であることを実証させ、その陵墓をりっぱに改築させた主席のはからいを感慨深く回想した。そして、主席がこの檀君陵を見たらどんなに喜ばれたことだろう、檀君陵は子々孫々に伝えるべき国宝であるから、いささかも遜色がないように整備し、保存、管理にも最善を尽くすようにと強調した。

総書記は平壌―香山（ヒャンサン）観光道路の建設についても、主席の生前に完成できなかったことを残念がり、工事を急ピッチで完成させた。

総書記は 1995 年の新春を迎える人民に、「血の涙のうちに 1994 年を送り、新年を迎えました。金日成同志の戦士、金日成同志の教え子らしく、わが国、わが祖国をより富強にするため、われらすべてが一心一体となって奮闘しましょう」という親筆書簡を送り、早朝、主席の霊前にもうでた後、その足で現地指導の途についた。

総書記は、党創立 50 周年を盛大に記念すべく主席の遺訓を体して党創立記念塔の建立を発議し、それをりっぱに完成させるため精力的に指導した。記念塔の主題と内容を示し、塔の位置を万寿台の主席の銅像からまっすぐに望める東平壌地区に定めた。そして塔身の周りに「朝鮮人民のすべての勝利の組織者であり導き手である朝鮮労働党万歳！」というスローガンを配するようはからい、ハンマーと鎌、筆からなる塔身やレリーフ像の形成方法についても具体的に提示した。こうして党創立記念塔はりっぱに建立され、党を創立しそれをチュチェ型の党に強化、発展させた主席の指導業績を子孫万代に伝えることができるようになった。

総書記は 1995 年 10 月 2 日に『朝鮮労働党は偉大な領袖金日成同志の党である』と題する論文を発表し、主席の思想と業績を忠実に継承し発展させ、その偉業を代々継いであくまで達成せんとする確たる決意をあらためて表明した。そして歌謡『高くかかげよう赤旗を』の創作、普及に努めた。

1995 年 8 月に新義州（シンイジュ）地区が水害をこうむったとき、総書記は人民軍に命令を下し、多数の軍人とヘリコプター、水陸両用車などを動員して死に瀕した水害被災民を救助し、食糧、医薬品、生活必需品などを送って被災地住民の生活安定をはかった。

民族の分裂に終止符を打って祖国を統一するのは朝鮮人民の至上の課題であり、主席の遺訓である。主席が生涯を終える最後の瞬間まで、最大の関心を払った問題の一つが、まさに一日も早く祖国の統一を実現することであった。1994 年の夏、反目と対決が極限に達した情勢を対話と協商の雰囲気に変え、統一の前途に新たな局面を開いた主席は、7 月 7 日、朝鮮人民が統一なった祖国で暮らすその日を思い描きながら、祖国統一問題に関する文書に署名した。

総書記は主席が逝去前日に署名した尊名と日付を刻んだ記念碑を板門店に建立するようはからった。そして主席によって示された自主、平和統一、民族大団結の 3 大原則にもとづき、統一に向けてのさまざまな主動的な措置を講じた。

このように、総書記の思索と活動はすべて、主席の遺訓を継いで社会主義偉業の達成をめざす事業に決定的な転換をもたらし、金日成民族の尊厳を世界にとどろかせることに帰着していた。

3　先軍革命指導

人民軍を革命の柱、主力部隊に

金正日総書記は主席の軍重視思想を具現していく過程で独創的な先軍政治方式を編み出し、人民軍を無敵の強兵に育て、その威力をもって社会主義の旗を固守した。

朝鮮革命は銃砲をもってはじまり、銃砲をもって祖国の解放を

かちとり、祖国の尊厳と自主権も銃砲をもって守りぬいてきた。銃砲をもって社会主義を固守し、あくまで完成させようというのは総書記の不動の信念であり意志である。

東欧諸国における社会主義の挫折を奇貨として強化されてきた帝国主義連合勢力の反社会主義、反共和国孤立・圧殺策動と、それに加えてのうちつづく厳しい自然災害のため、朝鮮革命はさらに困難をきわめることになった。

1990 年代中期のこのような内外情勢を分析した総書記は、軍隊はすなわち党、国家であり人民であるという思想、銃砲の上に社会主義があり平和があるという軍事重視思想を提示した。そして軍人のあいだで発揮されている革命的軍人精神を全社会が学ぶよう導いた。

総書記は 1995 年の初頭、人民軍某区分隊を視察し、2 月初旬には東海岸最前線の女性沿岸砲区分隊を訪ね、その砲兵たちを女性革命家だと称揚した。こうして、それまで知られていなかったこれらの区分隊は全国に知れ渡る区分隊となり、先軍政治の初の足跡が刻まれた歴史の前哨となった。

ついで総書記は各級部隊や区分隊の前方指揮所、最前線の民事警察の陣営にいたるまで、兵士のいるところであれば険しい道もいとわず訪れた。その過程で、いたるところに脈動する人民軍軍人の気高い思想・感情を感得した。かれらの中には、指導者のためには自爆をもいとわぬ英雄戦士もあり、「敬愛する最高司令官の命令を貫徹するまでは祖国の青い空を仰ぐな！」というスローガンをかかげ、地下用水路の工事場で決死の突貫工事をくりひろげた安辺（アンビョン）青年発電所の軍人建設者のごとき領袖決死擁護精神の

体現者たちもいた。

総書記はこうした領袖決死擁護精神、決死貫徹の精神、英雄的犠牲精神を革命的軍人精神として顕彰し、全社会がこれを見習うよう導いた。

総書記は 1997 年 3 月 17 日の党中央委員会責任幹部との談話『革命的軍人精神を見習おう』で、すべての部門、すべての分野で革命的軍人精神を見習うための課題と方途を示した。そしてこれを見習う雰囲気が全国的に盛り上がり、軍隊の威力がいちだんと増した時期の 1999 年 2 月 8 日、総書記は自分の指導は先軍指導であり、政治方式は先軍政治であると言明した。

先軍政治とは、革命と建設で提起されるすべての問題を軍事先行の原則で解決し、人民軍を柱とし、それに依拠して社会主義偉業全般を推進していく政治方式である。

先軍政治は、金日成主席の先軍革命指導を継承し発展させたものである。

先軍政治の生命力は如実に実証された。1998 年 9 月 5 日の最高人民会議第 10 期第 1 回会議では、国防委員会を国家機構体系における枢軸として位置づけた新社会主義憲法を審議、採択した。

総書記は先軍政治の要求に即して人民軍を革命の主力部隊、国の柱として強化することに第一義的な意義を付与し、その実現のための事業を賢明に導いた。

総書記は軍人にたいする政治・思想教育を重要視し、太陽節や建軍節など主な記念日を契機に、建軍偉業達成過程における党と領袖の業績について宣伝するようはからった。また各年代に輩出した呉仲洽、李寿福、吉永祚（キルヨンジョ）〔37〕など英雄の偉勲を広く宣伝する

とともに、その模範を全軍に学ばせる措置を講じた。

こうして、人民軍内での思想活動は軍人を領袖決死擁護精神、銃弾・爆弾精神、自爆精神で武装させることに向けられ、「全軍が革命の首脳部を決死擁護する今日の第 7 連隊になろう！」というスローガンのもとに「呉仲洽第 7 連隊称号獲得運動」が全軍に燃え広がった。

総書記は人民軍の戦闘力を強めるため、指揮メンバー陣容の強化と、その軍事技術的資質の向上に大きな力を注いだ。また、人民軍の武力装備の現代化にも深い関心を払い、国防科学と軍需工業の発展に力を注いだ。そして、朝鮮の自主権を侵害する者にたいしては、それが地球上のどこにあろうと断固として痛撃を加えうる現代兵器を造るよう導いた。

総書記は人民軍を社会主義祖国の守護者としてだけでなく、人民の幸せの創造者、強盛大国建設の第一の柱としておし立てた。

主席の遺訓貫徹のための重要工事をすべて人民軍に任せ、それをりっぱに完成させるようにした。主席が生前に構想した平壌の清流橋（2 段階）、錦綉第 2 トンネル、安辺青年発電所、月飛山（ウォルビサン）発電所、平壌—香山間の道路などの建設、そして九月山（クウォルサン）を文化休養地として整備する事業など、重要な建設対象を軍人に受け持たせ、その建設過程で発揮されたかれらの思想・精神世界を高く評価した。

また、強盛大国建設の構想を示し、その主要対象である農業、石炭、電力部門にも軍人を派遣して、その突破口を開いた。人民軍将兵は「祖国防衛も社会主義建設もわれわれが受け持とう！」というスローガンのもと、総書記から託された重要対象に駆けつ

け、進撃路を開いていった。

このように、総書記は先軍政治方式を編み出し、先軍革命指導によって人民軍を朝鮮革命の主力部隊に育て、社会主義を固守し、強盛大国建設の確たる展望を開いた。

前線から前線へ

総書記は、自衛的国防力の中核であり、チュチェの革命偉業達成の柱であり主力部隊である人民軍の強化を国と革命の命運にかかわる重要な問題とし、人民軍各部隊にたいする現地指導の道を歩みつづけ、革命武力強化の最盛期を開いた。

最前線に位置する区分隊をはじめ各部隊や連合部隊、それに軍事教育機関を訪れ、人民軍の強化と戦闘準備の完成のためにエネルギッシュな活動をつづけた。その路程は戦線東部から西部へ、西部から中部へと数百里に及び、東海地区と西海地区の陸・海・空軍全般を包括していた。

総書記は荒波をついて椒(チョ)島の防御隊を訪ね、戦闘力強化の指針を与え、軍人の生活に不便のないよう配慮した。また 1996 年 11 月 24 日には、敵前わずか数十メートルの朝鮮人民軍板門店代表部を訪れ、全将兵が党と領袖、社会主義制度を死守する覚悟で敵の一挙一動を注視し、警戒軍務に鋭意専心していることに満足の意を表し、かれらの偉勲を高く評価した。そして主席の親筆碑、板門閣、統一閣、停戦会談当時の会議場、停戦協定調印場など板門店地区を一巡し、全将兵が敵と容赦なく戦い、必勝の信念を抱いて母なる社会主義祖国を断固防衛するよう励ました。

総書記は各部隊視察の日々、軍人の訓練状況を目のあたりにし、全将兵が敵のいかなる侵攻をも一撃のもとに粉砕できる一当百の精鋭に育ったことに満足の意を表し、人民軍を不敗の革命武力に強化するための綱領的指針を提示した。また、部隊の管理から戦闘・政治訓練にいたる諸状況をつぶさに見聞きし、軍人の素朴な芸術サークル公演を観覧し、さらには食卓にのぼる汁や副食物の味見をしたり、兵士と野戦食をともにすることもあった。そして革命の武器を握りしめ、党と領袖、社会主義祖国の防衛に万全を期することを願って機関銃、自動小銃、双眼鏡などを贈り、記念写真も撮った。

総書記は前線視察の日々、国が厳しい試練をなめている実状にあっても、勝利の信念と革命的楽観にみちて生きる人民軍将兵と軍人家族の精神状態を高く称揚した。

1997 年 3 月 4 日、軍人が軍務生活の余暇を利用してつくった数十種の動植物の標本や美術作品を見て、これは祖国の富強繁栄と安全のため一命を賭して戦う覚悟と勝利の信念に徹した朝鮮人民軍兵士ならではの行いだとし、党と運命をともにする不動の意志をもって生きかつ戦う人民軍の精神道徳は実にりっぱなものだと激賞した。

また、1998 年の朝鮮人民軍第 1 回軍人家族芸術サークルコンクールに参加した家族サークルの公演を観覧し、党と革命のため夫と同じ塹壕で生死、苦楽をともにしようとする軍人家族の精神状態と闘争気風は非常にりっぱなものだとし、彼女たちの模範を全人民が見習うべきだと指摘した。その後、1999 年と 2000 年におこなわれた第 2 回、第 3 回の軍人家族芸術サークル公演も観覧

し、それを高く評価し、軍人家族を女性革命家と呼称した。

人民軍各部隊にたいする総書記の現地指導は、革命武力と社会主義祖国の防衛の強化において新たな転機となった。

総書記の現地指導に励まされた人民軍将兵は、「偉大な金正日同志を首班とする革命の首脳部を死守しよう！」というスローガンを高くかかげ、青春も生命もささげてたたかう最高司令官の第一近衛兵、第一決死隊となり、全軍に領袖決死擁護精神、銃弾・爆弾精神、英雄的犠牲精神がみなぎるようになった。

折重なる難局打開の道を開いた総書記の先軍指導は、帝国主義者の共和国圧殺策動を粉砕し、社会主義祖国をかたく守るべく革命武力強化の最盛期をもたらした偉大な指導であった。

4　政治的・思想的陣地の強化

金正日総書記は、朝鮮式社会主義の政治的・思想的陣地の強化をチュチェの社会主義偉業を達成するためのキーポイントとし、その事業を賢明に導いた。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「社会主義を守り勝利に導くためには、思想活動を強化しなければならない。

人民大衆を社会主義思想で武装させ、社会主義の思想的陣地をかためてこそ、社会主義を強化、発展させ、いかなる狂風に見舞われても社会主義をかたく守りとおすことができる」

社会主義の変質は思想の変質からはじまり、思想が瓦解すれば

社会主義を総破産させる。

　とくに、帝国主義者が朝鮮の社会主義制度を内部から切り崩そうと思想的・文化的浸透をつづけている状況のもとで、社会主義の思想的陣地をかためることはいっそう切実な問題として提起された。

　総書記はこのような分析にもとづき、現実発展の要請に即して社会主義思想をさらに深化、発展させるための思想・理論活動に大きな力を注いだ。

　総書記は 1994 年 11 月 1 日、朝鮮労働党中央委員会機関紙『労働新聞』に『社会主義は科学である』と題する論文を発表した。そしてチュチェの社会主義思想と理論を全面的に解明し、唯物史観にもとづく社会主義運動から、人間にたいする主体的観点と立場にもとづく社会主義運動への方向転換の道を明示した。

　論文は、多くの国で社会主義は挫折したが、科学としての社会主義は依然として諸人民の心のなかに生きているとし、社会主義は日和見主義によって一時的に心痛にたえない曲折を経てはいるが、その科学性、真理性によって必ず再生し、最終的勝利を達成するであろうと指摘した。

　ついで、社会的運動の主体である人間本来の要求は集団主義であり、したがって人間の自主的要求は集団主義によってのみ実現するということを科学的に論証し、個人主義にもとづく資本主義が集団主義にもとづく社会主義に移行するのは社会・歴史発展の合法則的過程であるとした。

　そして、社会・歴史の発展、社会主義建設の担い手は人民大衆であるため、人間改造を優先させ、革命の主体を強化し、その役

割を高める方法で社会主義の勝利を達成すべきであると強調した。

論文はまた、朝鮮の社会主義は人間の本質にたいする科学的解明にもとづき、人間の地位と役割をいちだんと高めるもっともすぐれた、生命力のある社会であると指摘した。

そして、人民大衆中心の朝鮮式社会主義は社会生活の各分野で同志的団結と協力、愛と信頼の関係を具現しているので、社会主義政治は本質において人民にたいする愛と信頼の政治、仁徳政治であるとした。また、党の仁徳政治は不敗の生命力を発揮している、もっとも強固かつ威力ある社会主義社会の政治方式であることを解明した。

総書記は 1995 年 6 月 19 日に『思想活動を優先させるのは社会主義偉業遂行の必須の要求である』と題する著作を発表し、社会主義偉業遂行における新たな転換の道を開いた。

著作では、多くの国での社会主義の挫折が残したもっとも深刻な教訓は、社会主義の変質が思想の変質からはじまり、思想戦線が瓦解すれば社会主義のすべての戦線が瓦解し、結局は社会主義を総破産させるということであると指摘した。また、社会主義は思想を堅持すれば勝利し、思想を失えば滅びるというのが、歴史によって証明された真理であるとし、自主性のためにたたかう人民大衆が社会主義思想で武装し、社会主義への確たる信念をもつようになれば、社会主義は必ずや新たな勝利の道を切り開いていくであろうと確言した。

総書記は、党と革命隊伍の一心団結の強化を、社会主義の思想的陣地をさらにかためるための重要な課題の一つとみなし、この事業を力強くおし進めた。

1997 年 2 月 17 日と 3 月 5 日をはじめ多くの機会に革命的信念と良心について強調し、幹部と党員が革命的信念と信義を重んじるよう導いた。また、全社会に共産主義的道徳気風を確立することの意義を明らかにし、とくに育ちゆく新しい世代にたいする道徳教育を強化するため、全社会的に画期的な措置を講じるようはからった。

総書記はつねに青年活動に深い関心を払い、青年が党と領袖のまわりに一心団結し、社会主義建設の各部門で先頭に立つよう導いた。

1995 年 10 月、朝鮮労働党創立 50 周年慶祝平壌市青年学生のたいまつ行進に臨席し、青年前衛に聖火を渡した。そして 1996 年 1 月、社会主義労働青年同盟創立 50 周年に際してその名称を金日成社会主義青年同盟と改称する措置を講じ、金日成主席の肖像入りの同盟旗を授与した。

総書記は 1996 年 8 月 24 日、青年デー5 周年に際して『金日成同志の青年運動に関する思想と指導業績を輝かせていこう』と題する談話を発表した。談話では、青年同盟は永遠に主席の青年同盟となり、朝鮮青年運動は主席の示した道にそってチュチェの青年運動として発展すべきであるとし、それはとりもなおさず青年運動に関する主席の思想・理論と業績を断固擁護し輝かしていく道であると述べた。

また、「青年を愛せよ！」というスローガンを提示し、青年活動にたいする全党的・全国家的・全社会的関心を高めるようはからった。そして、すべての青年は党の指導に忠実にしたがい、チュチェの革命偉業を継承し完成するたたかいで革命の継承者とし

ての使命と任務をりっぱに遂行して、朝鮮青年の栄誉と革命的気概をとどろかすべきであると強調した。

総書記はまた、全社会に軍民一致の思想を具現するようはからい、一心団結の威力をいちだんと強めた。

5　党と国家の首位に推戴

金日成主席の逝去 100 日追悼会がとりおこなわれた後、朝鮮人民は金正日総書記を党と国家の首位に推戴して新たな歴史的進軍をはじめることを熱望した。また、それがいつなされるかは全世界の関心事となっていた。それは往々にして、一国の元首が死亡すると政局が混乱し、新しい指導者が登場すると従来の政策に修正が加えられたり変化が生じるからであった。

総書記を一日も早く党と国家の首位に戴くことを請う数千、数万通の人民の手紙が連日、党中央委員会に寄せられた。

人民の願いであれば何でも叶えていた総書記であったが、この願いだけは聞き入れず、ひたすら主席の生前の志を実現することに専念した。総書記は、幹部たちが推戴問題はこれ以上遅らせることのできない問題となっていると進言するたびに、推戴を急ぐ必要はない、主席の霊前で慟哭した人民がまだ悲しみにうち沈んでいるというのに、党と国家の新しい指導機関を選出して万歳を唱えるのは戦士の道義にもとるとたしなめた。

総書記を朝鮮労働党総書記に戴こうという朝鮮人民の願いは、主席の 3 周忌追悼行事がとりおこなわれた後に、ようやく叶えら

れることになった。

朝鮮労働党創立 52 周年をひかえた 1997 年 9 月から 10 月上旬にかけて、朝鮮労働党朝鮮人民軍代表者会議、道（直轄市）代表者会議、道党の機能を果たす党組織の代表者会議が開催された。これらの会議では金正日将軍を朝鮮労働党総書記に推戴する問題について討議し、当該決議を全会一致で採択した。これを受けて、朝鮮労働党中央委員会と朝鮮労働党中央軍事委員会は 10 月 8 日、特別報道を通じて金正日将軍が朝鮮労働党総書記に推戴されたことを告げた。

1998 年 9 月 5 日に開かれた朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第 10 期第 1 回会議では、総書記を朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長に推戴した。

主席の死去後、共和国の国家主席として総書記が推戴されることは既定の事実とされていた。しかし総書記は再三再四、金日成主席を共和国の永遠なる主席として戴き、その思想と業績を擁護し、継承、発展させなければならないと述べたのであった。

こうして、最高人民会議第 10 期第 1 回会議で採択された金日成憲法には、金日成主席を共和国の永遠なる主席として戴くということが明記された。また、この会議では、新憲法により総書記を、共和国の国家機構体系の中枢をなす国防委員会の首位に推戴した。

全朝鮮人民は総書記を党と国家の首位に推戴したことを熱烈に支持し歓迎した。

1998 年 9 月 9 日の共和国創建 50 周年祝賀行事を通じて、朝鮮人民は総書記を党と国家の首位に戴き、その指導のもとに社会主義を固守、完成し、チュチェの強盛大国を建設すべく確たる信念

と意志を内外に誇示した。
　実に、総書記が党と国家の首位に推戴されたことは、主席の思想と指導を変わることなく擁護し、チュチェの革命偉業を完成するための決定的保証を取り付けた意義深い出来事であった。

6　強盛大国建設をめざし

「苦難の行軍」、強行軍を陣頭指揮して

　金日成主席の死去後、社会主義建設をめざす朝鮮人民の前途には幾多の障害と難関が横たわっていた。
　帝国主義者は朝鮮での「国家首班の空白状態」について喧伝し、内部になにか「変化」が生じるのではないかと勘ぐった。そして、共和国にたいする政治的・外交的圧力と軍事的威嚇の度を強める一方、経済封鎖をつづけた。
　また、この時期に社会主義市場が消滅し、朝鮮は社会主義建設に必要な原料や資材、設備などを資本主義市場を通じて解決せざるをえなくなった。経済封鎖がつづくなかで資本主義市場を利用するということは至難の業であった。
　かてて加えて、数年来の大天災による食糧難に見舞われ、90 年代の中期からは文字通り「苦難の行軍」[38]をしなければならなかった。
　全国が「苦難の行軍」を開始したとき、総書記は人民大衆の力を信じて万難を排していった。

総書記は人民を力づけるため、1994 年の秋、自力更生の精神で経済管理を模範的におこなっている平安南道孟山（メンサン）郡や咸鏡南道端川（タンチョン）市の広泉（クァンチョン）食品工場などを党と国家の責任幹部が参観し、その成果を称えるようはからった。

社会主義を圧殺しようとする帝国主義者の策動が悪辣の度を加えてくると、総書記は「『苦難の行軍』精神で生き、たたかおう」というスローガンをうちだし、立ちはだかる難関を果敢に乗り越えていくよう全人民を導いた。

1996 年 10 月 14 日の党中央委員会責任幹部との談話『幹部は「苦難の行軍」精神で生き、働くべきである』をはじめ多くの談話で、「苦難の行軍」精神、革命的楽観主義の精神をさらに強く発揮して当面の難局を打開し、社会主義建設で新たな高揚を起こすべきであると述べた。

総書記が示したこのスローガンには、全党員と勤労者が、「苦難の行軍」で発揮された抗日革命烈士の領袖決死擁護精神、自力更生の精神、困難克服の精神、革命的楽観主義の精神を見習い、立ちはだかる障害と難関を乗り越え、革命と建設のすべての分野で新たな高揚を起こそうという深い意図がこめられていた。

総書記は、1996 年 1 月 14 日の党中央委員会責任幹部との談話で「今日のための今日に生きるのでなく、明日のための今日に生きよう」という革命的人生観を示し、人民がこれを信念のスローガンとし働くよう導いた。

総書記は、すべての幹部が革命的軍人精神を見習い、「突撃進め！」ではなく「わたしに続け！」の号令のもとに、突撃の旗手、進撃のラッパ手となり、率先して困難に当たるべきだと指摘した。

そして、政治活動を展開して大衆の革命的熱意と創造的積極性を呼び起こすよう導いた。

総書記は人民経済の各部門を現地指導しながら、強盛大国建設の突破口を開いていった。

先軍革命指導によって強盛大国建設の軍事的基盤をかためる一方、人民経済全般の活性化を促すため慈江（チャガン）道の事業に深い関心を払った。慈江道は朝鮮で自然・気候条件が一番不利であるにもかかわらず、「苦難の行軍」の時期に真っ先に革新ののろしをあげたからであった。

総書記は慈江道をもり立て、それをモデルにして「苦難の行軍」、強行軍をりっぱにしめくくることにした。その指導により、道内の住民は、自力で道の経済管理をおこなううえで全国の模範となった。

1998 年 1 月 16 日から 21 日にかけて、および 6 月 1 日、10 月 20 日と 22 日に慈江道の各部門を現地指導した総書記は、道内の住民が発揮した自力更生の精神を高く評価した。

総書記は、道内の労働者は耐えがたい食糧難に見舞われながらも、食糧や外貨ではなく仕事を与えてほしい、飢え死にするとしても機械だけは手放さないと言っている、そして随所に中小発電所を建て、工場、企業所、街や村をきれいに整備しているとほめ称えた。そして、かれらは、いまのような困難な状況において、党をいかに支えていくべきかを実践によって示していると語った。

そして、慈江道の人たちのように奮闘するならば、国の経済をもり立て人民生活を向上させることができるという確信を得たとし、慈江道の住民が発揮した精神を「江界（カンゲ）精神」と呼び、全国が

これを見習うようにした。

こうして、江界精神は朝鮮の時代精神として全国に一般化され、新たな革命的大高揚をもたらす原動力となった。

第 2 のチョンリマ大進軍へ

総書記は、社会主義経済建設における懸案の解決に全力を集中する措置を講ずることによって、国の経済全般をもり立てていった。

総書記は冶金工業、機械工業など主要工業部門に大きな関心を払い、この部門の生産を正常化するよう導いた。

江界精神を見習って経済をもり立てるうえで基幹工業部門の労働者が先頭に立つようにするため、1998 年 3 月 9 日に城津（ソンジン）製鋼連合企業所を現地指導した総書記は、チョンリマを駆る勢いで前進し、全国に新たなチョンリマの大高揚を起こす先駆者となるよう労働者に呼びかけた。こうして、江界精神についで城鋼（ソンガン）（城津製鋼連合企業所）ののろしが上がり、新たなチョンリマ大進軍が開始された。

また、1998 年 11 月には咸鏡北道内の各部門を現地指導し、冶金工業部門の労働者が城鋼の模範にしたがって鉄鋼材の生産を正常化すべく課題を示した。その後にも、鴨緑江（アムロッカン）タイヤ工場、勝利自動車総合工場をはじめ数多くの工場を現地指導し、主要工業部門を軌道に乗せるための課題と方途を示し、その事業を精力的に指導した。

総書記は、電力不足を解消することに全力を尽くすよう指導し

た。大規模水力発電所の建設に国家資金をつぎこむ一方、大衆的運動によって中小発電所を随所に建設する方針を示した。こうして、安辺青年発電所や泰川（テチョン）発電所など大規模水力発電所の建設が推進され、新たに多くの中小発電所が設けられた。

総書記は食糧問題、食の問題を円滑に解決する土台を築くことに深い関心を払った。

1998 年 10 月 1 日に両江道大紅丹（テホンダン）郡を現地指導し、ジャガイモ栽培で革命を起こして食の問題の解決において転換をもたらす方針を示した。こうして、大紅丹精神、大紅丹気風を見習い、ジャガイモ栽培で革命的転換をもたらす運動が全国的規模で力強く展開された。

1997 年 3 月 26 日の党中央委員会責任幹部との談話では、草食家畜を多く飼育すべきであるという金日成主席の教示を実行するための積極的な措置をとるべきだと指摘した。また、同年 6 月 30 日には龍淵（リョンヨン）郡総合農場龍井（リョンジョン）分場の養魚場を視察し、養魚を発展させて人民により多くの鮮魚を供給する課題を示した。

総書記の意を体して、農業勤労者は天然牧草地を基本とする牧草地を造成し、草食家畜を大々的に飼育してその数を増やした。同時に、随所に養魚場を設け、その生産量を高めた。その結果、食の問題を解決するうえで大きな成果が達成された。

総書記は江原道の耕地整理を推進し、それを平安北道、黄海南道をはじめ全国に一般化させるとともに、その事業を現地で指導した。

「苦難の行軍」をつづけるなかでも、総書記は全軍、全人民を国土管理事業に立ち上がらせ、国土建設全般に転換をもたらした。

1996 年 8 月 11 日に発表した著作『国土管理事業に新たな転換をもたらすために』で、国土管理事業を改善する課題と方途を示し、全人民をこの事業に奮い立たせた。また龍門（リョンムン）大窟や九月山、正方（チョンバン）山、七宝（チルボ）山などの名勝を休養地として整備することにも深い関心を払い、数回にわたって現地指導をおこなった。

総書記は全国に科学重視の気風をうち立て、発展する現実の要請に即して国の科学技術的土台を築くよう導いた。

1995 年 4 月 28 日の現地指導をはじめ国家科学院をたびたび現地指導し、近い将来に朝鮮の科学技術を最先端の水準に引き上げる展望を示した。1998 年 2 月 8 日には全国プログラムコンテスト・展示会に出品されたプログラムを見て回り、コンピュータ工業を発展させ、朝鮮に切実に必要なプログラムをより多く開発すべきであると指摘した。

総書記の指導に励まされた科学者、技術者は、自国の力と技術で 1998 年 8 月 31 日に初の人工衛星を成功裏に打ち上げ、各部門で多くの成果をおさめた。

総書記は強盛大国建設に革命的転換をもたらすため、全人民を第 2 のチョンリマ大進軍へと立ち上がらせた。

1999 年 1 月 1 日の党中央委員会責任幹部との談話『今年を強盛大国建設の偉大な転換の年として輝かせよう』で、1999 年を強盛大国建設に新たな転換をもたらす総進撃の年と定め、人民を第 2 のチョンリマ大進軍へと奮い立たせた。

総書記はこの年にも、1 月 11 日の科学院にたいする現地指導にはじまり、泰川水力発電総合企業所、江原道の耕地整理、新設された光明（クァンミョン）星（ソン）製塩所、拡充された食品工場など、各部門にたい

する現地指導をつづけた。

朝鮮人民は第 2 のチョンリマ大進軍の火の手を上げるため、第 2 のチョンリマ大進軍先駆者大会、全国農業部門活動者会議、全国科学者・技術者大会、金日成社会主義青年同盟模範末端活動家大会など全国的規模の会議を開き、「苦難の行軍」、強行軍にたえて、強盛大国建設に転換をもたらした。あらゆるものが不足し、勤倹節約しなければならない困難な時期であったが、かれらは総書記の指導にしたがい、国の経済を一つひとつもり立てていった。

このように、朝鮮人民は総書記の指導のもと、「苦難の行軍」、強行軍の時期にただ困難を堪え忍んだのではなく、社会主義強盛大国建設の強固な土台を築いたのである。

7　平壌での歴史的な対面

金正日総書記は、金日成主席が示した祖国統一の 3 大憲章の旗のもとに国の統一を実現するため積極的な活動を展開した。

主席が最期の瞬間まで心血を注ぎ心を痛めていた問題は、分断された祖国を統一することであった。

総書記は 1997 年 8 月 4 日、『偉大な領袖金日成同志の祖国統一遺訓をあくまで貫こう』と題する著作を発表し、祖国統一の 3 大憲章を定式化し、その実現のための原則的立場と方途を明らかにした。

金正日総書記はつぎのように述べている。

「祖国統一の 3 大原則と全民族大団結 10 大綱領、高麗民主連

邦共和国創立方案は、金日成同志が偉大なチュチェ思想と祖国統一をめざす闘争の過程で積んだ貴い経験にもとづき、祖国統一の根本原則と方途を全一的に体系化し集大成した祖国統一の 3 大憲章である」

著作では、3 大憲章にもとづいて祖国統一の偉業を実現するための朝鮮労働党の原則的立場を明らかにした。

まず、朝鮮の統一問題はあくまでも民族自主の原則で解決しなければならないとした。祖国統一は朝鮮民族自らの問題であると同時に、民族の自主権にかかわる問題であるため、朝鮮民族が主人となり、民族の自主的意思と要求に即して民族自らの力で実現しなければならない。

つぎに、祖国統一を武力行使によらず、平和的方法で実現しようというのは、朝鮮労働党の一貫した路線であるとした。思想と体制は強要するからといって受け入れられるものではなく、また強制的方法では北と南の思想と体制の違いをなくすこともできない。北と南が争うならば、惨禍をこうむるのは朝鮮民族であり、そこから漁夫の利を得るのは帝国主義者である。ゆえに、国と民族を愛し、平和を貴ぶ人であればすべて国の平和的統一のためにあらゆる努力を尽くすべきである。

総書記は、朝鮮の統一問題をスムーズに解決するもっとも合理的な方途は、連邦制方式にもとづいて統一を実現することであると述べた。朝鮮民族は、誰にも受け入れられる合理的な方式で、一日も早く統一を実現することを望んでいる。北と南に相異なる体制がうち立てられてから半世紀が過ぎたこんにちにいたって、どちらか一方の体制による統一を実現しようとするならば、統一

はおろか、かえって分裂を深め、取りかえしのつかない民族的災難をもたらすであろう。朝鮮民族のさし迫った要求と現実にてらして、統一の最善の方途は、一つの民族、一つの国家、二つの体制、二つの政府にもとづく連邦制方式の民族統一国家を創立することである。

総書記は、北南関係を改善し、統一の転機を開く方途を明示した。

なによりも、南朝鮮当局者が外部勢力に依存し「共助」するのではなく、民族自主の立場で同族と力を合わせて外部勢力を排除する道に立たなければならないとした。そして、北南間の政治的・軍事的対決を解消するとともに、南朝鮮の社会・政治生活が民主化されなければならないと指摘した。

総書記は 1998 年 4 月 18 日、南北朝鮮政党・大衆団体代表者連席会議 50 周年記念中央研究討論会に送った書簡『全民族が大団結して祖国の自主的平和統一をなしとげよう』で、民族大団結の 5 大方針を提示した。

民族大団結 5 大方針の内容は、民族自主の原則と愛国愛族の旗、祖国統一の旗のもとに全民族が団結し、北南関係を改善し、外部勢力の支配と干渉に反対し、北と南、海外の連帯・連合を強めるというものである。

総書記は、祖国統一の 3 大憲章と民族大団結の 5 大方針にもとづいて民族大団結を実現するため精力的な活動を展開した。

総書記は、北南間の往来と接触、協力、交流が活発になるにつれ、平壌を訪問した文益煥牧師の未亡人朴容吉（パクヨンギル）、ホワイトハウス出入り記者である在米同胞女流ジャーナリスト文明子（ムンミョンジャ）、現代グ

ループ名誉会長の鄭周永（チョンジュヨン）など、南朝鮮と海外の各界人士に会い、政見や信教、経歴にかかわらず、民族的良心があり、統一を願う人であるなら、ともに手をたずさえて統一の道に進むよう導いた。

統一への民族の熱望が高まるにつれ、北と南、海外の同胞は祖国統一運動を全民族的運動として展開するようになった。

1995 年 1 月 19 日の共和国の各政党・団体合同会議では、祖国解放 50 周年を機に民族統一大祝典を開こうというアピールが採択された。これにもとづき、同年 8 月 15 日、北と海外の代表はもとより汎青学連（祖国統一汎民族青年学生連合）南側本部「韓総連（韓国大学総学生会連合）」の代表、南朝鮮の「民家協（民主化実践家族運動協議会）」後援会会員などの参加のもとに、祖国解放 50 周年民族統一大祝典が盛況裏におこなわれた。また、1999 年 3 月から 4 月にかけて平壌とソウルで「統一念願北南労働者サッカー大会」が、同年 8 月には第 10 回汎民族大会が開催され、民族の統一熱をさらに高めた。

こうした時流のなかで、南朝鮮の金大中（キムデジュン）が平壌訪問の意思を公式に表明した。そして 2000 年 4 月 8 日に、南朝鮮当局者の平壌訪問と北南最高位級会談開催に関する北南合意書が採択、発表された。その後の数回にわたる予備接触にもとづき、6 月 13 日から 15 日にかけて、北南首脳間の平壌での歴史的な対面が実現することになった。

総書記は空港へ出向いて南側一行を同胞愛の情で迎え、数回にわたって接見し、会談をおこなった。

こうして 6 月 15 日、国の統一問題を、その主人である朝鮮民族同士が互いに力を合わせて自主的に解決すること、統一のため

の北側の連邦制案と南側の連合制案には共通性があると認め、この方向で統一を志向すること、離散家族・親戚訪問団の交換や非転向長期囚の送還など人道的問題を早急に解決すること、経済協力を通じて民族経済を均衡的に発展させ、社会、文化、スポーツ、保健医療、環境など各分野の協力と交流を発展させ、相互の信頼を築いていくこと、以上の合意事項を早急に実践に移すため、双方が近いうちに当局間の対話を開催することなどを明記した北南共同宣言が採択、発表された。

　その後、北と南の家族・親戚訪問団が平壌とソウルを相互訪問して肉親間の感激の対面を果たし、63 名の非転向長期囚の共和国への送還が実現した。同時に、北南間には各分野における対話と接触が頻繁におこなわれ、一連の実践的な措置が講じられた。

　実に、2000 年代に入って、平壌での対面と北南最高位級会談の実現により、統一を早めるための朝鮮人民のたたかいには新たな歴史的転換がもたらされた。

8　対外関係の拡大

　金正日総書記は自主、平和、親善の理念を一貫して堅持し、対外活動を積極的に展開して共和国の国際的威信と影響力をかつてなく高めた。

　総書記は、苦難にみちた革命闘争のなかで築かれた伝統的な朝中友好のさらなる発展に大きな力を注いだ。

　総書記は 2000 年 5 月 29 日から 31 日にかけて、中華人民共和

国を非公式訪問した。

江沢民総書記は、金正日総書記が世紀が変わる重要な歴史的時期に中国を訪問したことを高く評価し、今回の訪問は両党、両国の相互理解と信頼、友好と協力を増進させ、新しい世紀に向かう朝中友好関係の発展を促すうえで重要な意義をもつと強調した。

総書記の中国訪問は、朝中両国の党と人民の団結と連帯を強めるうえで新たなページを開いた。

総書記は、朝鮮の隣邦であるロシアとの友好・協力関係の発展に大きな力を傾けた。

総書記は、2000 年 7 月 19 日から 20 日にかけて、朝鮮を訪問したロシア連邦のプーチン大統領と真摯な会談をおこなった。

会談の結果、朝ロ共同宣言が採択、発表された。共同宣言には、両国間の伝統的な親善・善隣関係、相互信頼、多方面にわたる協力を発展させること、あらゆる侵略と戦争政策に反対し、軍縮と世界の安全を保障するため極力努力すること、「人道主義的干渉」などの美名のもとに強行される他国への内政干渉に反対することなど、共通の関心事となる問題についての双方共通の立場が具体的に明記された。

プーチン大統領の朝鮮訪問は、朝ロ関係を新たな段階に発展させるうえで大きな意義をもつ重要な出来事であった。

総書記は、長い間持続した朝米間の敵対関係を解消し朝米関係を改善するうえで画期的な局面を開いた。

1994 年 8 月から 10 月にかけてジュネーブで再開された朝米会談では、双方が朝鮮民主主義人民共和国の黒鉛減速炉と関連施設を軽水炉発電所に切り換えるために協力すること、政治および経

済関係の完全な正常化を志向すること、そして朝鮮半島の非核化、平和と安全のためにともに努力することを確約した基本合意文が採択された。

合意文では、アメリカが責任をもって計 200 万 kw 発電能力の軽水炉発電所を 2003 年までに朝鮮に提供すること、朝鮮は黒鉛減速炉と関連施設を凍結し、それによるエネルギーの損失は毎年 50 万トンの重油によって補償を受けること、朝鮮とアメリカは貿易・投資障壁を緩和すること、アメリカは核兵器を使用せず、核兵器で朝鮮を威嚇もしないと公式に保障することを確約した。

1994 年 10 月 20 日、アメリカのクリントン大統領は金正日総書記にこれと関連した保証書簡を送った。かれは保証書簡で、職権を行使して、朝鮮に提供される軽水炉発電所対象の資金調達と建設のための措置を推進すること、1 号軽水炉発電所が完工するまで朝鮮に提供される代替エネルギーの保障に必要な資金調達とその履行のための措置を講じることを確言した。

2000 年 10 月 9 日から 12 日にかけて、総書記はアメリカに特使を派遣し、大統領に親書と朝米関係についてのメッセージを直接伝達させた。こうして、10 月 12 日には過去の敵対感情を脱した新たな関係樹立、経済協力と交流、ミサイル問題など各分野における関係改善を確約した共同コミュニケが発表された。

その後、総書記は朝米関係改善についての大統領の意思を直接伝達するため訪朝した国務長官オルブライトを接見し、共通の関心事となる問題について幅広い意見を交換するなど真摯な話し合いをおこなった。

総書記の積極的な対外活動は国内外で大きな反響を呼び、各国

との対外関係発展にも新たな変化をもたらした。こうして、イタリア、イギリス、オランダ、スペイン、ドイツなどの西欧諸国やオーストラリア、ニュージーランドなどが朝鮮と外交を樹立、または再開した。これは、「苦難の行軍」、強行軍にたえて強盛大国建設に立ち上がった朝鮮人民にとって大きな励ましとなった。

9　社会主義勝利者の大祝典

金正日総書記の指導のもとに社会主義偉業を擁護し、チュチェの強盛大国の建設を進めていた朝鮮人民は、2000 年に朝鮮労働党創立 55 周年を迎えた。

総書記は党創立 55 周年を盛大に、かつ意義深く記念する事業を賢明に導いた。

20 世紀最後の年に迎える党創立 55 周年を盛大に記念することは、朝鮮人民にとって大きな意義を有するものであった。

金日成主席の没後、朝鮮人民は帝国主義のたえまない政治的・経済的・軍事的封鎖と圧力、それに加えて自然災害による食糧難のため耐えがたい苦痛をなめながらも、「苦難の行軍」、強行軍に耐えぬいた。党創立 55 周年は、苦難にみちた闘争を繰り広げてきた人民に勝利者としての誇りを抱かせ、かれらを社会主義強盛大国建設にいっそう力強く立ち上がらせる重要な契機となった。

総書記は、2000 年の新春に際しての『労働新聞』『朝鮮人民軍』『青年前衛』3 紙の共同社説「党創立 55 周年を迎える今年を、

チョンリマ大高揚のなかで誇らしい勝利の年として輝かせよう」を、この年に全党、全軍、全民がかかげていくべき基本スローガンと定めた。そして同年 7 月 31 日、党創立 55 周年に際して発表された党中央委員会のスローガンを新聞、放送をはじめマス・メディアを通じて解説・宣伝し、各級党組織と勤労者団体組織がこれを実行するための討議を高い水準でおこなうよう指導した。

また、革命伝統を継承、発展させることを党と革命隊伍の一心団結を強める重要なカギとみなし、革命伝統教育をいちだんと強化するようはからった。そのために、2000 年 3 月下旬、数日にわたって両江道内の革命戦跡を視察し、その遺跡、遺物の保存・管理を改善し、これを通じての革命伝統教育を強化すべきであると指摘し、必要な対策を講じた。そして、道内の革命戦跡と革命史跡をよりりっぱに整備する構想を示し、その実現に向けて全党、全軍、全民を奮い立たせた。

総書記は党創立 55 周年を機に、社会主義経済建設の各部門において新たな高揚を起こすよう導いた。

2000 年 1 月 27 日、楽元機械工場を訪れた総書記は、生産状況を調べた後、労働者に、苛烈な祖国解放戦争と戦後の復興建設の時期に勤労の偉勲によって主席を喜ばせたこの工場の 10 人の党員の精神を受け継いで、新たな大高揚ののろしを上げるようにと訴えた。こうして、楽元ののろしが上がり、それが全国に燃え広がった。

また、亀城(クソン)工作機械工場や金鐘泰電気機関車工場をはじめ主要工場、企業所の生産状況を随時聞き取り、生産の正常化と製品の品質向上、それに設備現代化の具体的な方向と方途を示し、必要

な対策を講じた。これに励まされた亀城工作機械工場の労働者は、毎月の生産課題を狂いなく遂行しながらもその品質を高い水準に引き上げ、金鍾泰電気機関車工場では電気機関車の生産および修理課題を期限前に遂行した。

総書記は、人民により安定した文化的な生活をさせるため、各部門の事業をエネルギッシュに指導した。

年初から平安北道の耕地整理の現場、両江道の大紅丹郡総合農場、胞胎（ポテ）総合農場、それに人民軍軍人によって建設された家禽牧場やナマズ養殖場などを視察する一方、价川（ケチョン）―台城湖用水路工事を発議し、全軍、全民が総がかりでそれに取り組むようはからった。また、寧辺（ニョンビョン）絹織物工場と博川（パクチョン）絹織物工場を現地指導し、絹織物を増産して人民に供給する課題を与え、必要なさまざまな措置を講じた。

総書記は 1998 年に、党創立 55 周年までに平壌―南浦高速道路を建設することを発議し、この建設を青年に任せた。不足するものが多く困難な状況であったにもかかわらず、青年建設者は石のみやハンマーで岩を砕き、人力で膨大な土を処理し骨材を運搬し、期限内に工事を完成させた。

総書記は、もっとも困難な時期に高速道路をりっぱに建設したかれらの偉勲を高く評価し、この道路を「青年英雄道路」と命名し、記念碑も建てるようはからった。

総書記は、党創立 55 周年祝賀行事が成功裏におこなわれるよう賢明に導いた。

大マスゲームと芸術公演『百戦百勝の朝鮮労働党』の創作活動を指導し、一心団結の威力で万難を排して勝利した党の歴史を生

き生きと描き出す傑作として完成させた。そして、祝賀夜会やたいまつ行進をはじめ各種のイベントが、「苦難の行軍」をりっぱに締めくくり、強盛大国建設の突破口を開いた勝利者の意義深い祝典となるようにした。

こうして党創立 55 周年を迎え、閲兵式や大衆パレード、大マスゲームと芸術公演、青年学生の夜会とたいまつ行進などすべての祝賀行事が盛大におこなわれた。

朝鮮人民は党創立 55 周年を契機に、厳しい試練や曲折も多々あった「苦難の行軍」、強行軍をりっぱに締めくくった誇りを抱き、強盛大国建設をめざす 21 世紀の進軍路を力強く踏み出したのである。

注　釈

〔1〕　**楽元の 10 名の労働党員**　朝鮮戦争の時期、戦時生産に励んで戦争の勝利に寄与した楽元機械製作所鋳鉄職場党細胞の党員たちを指す。

1952 年 6 月下旬のある日、主席はこの党細胞会議に参加し、戦後復興建設の準備について話し合った。そのとき一人の女性党員が、日本帝国主義者にあれほど破壊されたにもかかわらず 2、3 年で復旧してよい暮らしができるようになったのだし、戦争が終わればまた復旧してよい暮らしができるからあまり心配なさらないように、と主席に話した。彼女の確信にみちた飾り気のない言葉を聞いて朝鮮の労働者階級の強靭な意志を読みとった主席は、大きくうなずき、このような労働者階級がいるかぎり朝鮮は必ず勝利するという信念をかためた。後日、主席は「わたしはあのときの彼女の言葉を一生忘れることができません」と述懐している。

〔2〕　**『祖国のふところ』**　牡丹峰に映える　朝やけのよう／大同江にかかる　虹のよう／朝やけのように　美しい／祖国は　われらのふるさと

ツツジの花咲く　春のよう／ヒバリさえずる　空のよう／春のように　あたたかい／祖国は　われらのお母さま

海に昇る　朝日のよう／夜空にきらめく　星のよう／日ざしのように　明るい／祖国は　将軍のふところ

〔3〕　**『祝福の歌』**　暗い山河に　春を呼び／朝鮮を輝かす父なる将軍／はるかかなた　砲煙けむれば／人民はご無事を祈ります

　国の運命　身にになう／父なる将軍は　人民の領袖／きびしいいくさで　無事なるは／われらが国の　幸せです

　ヤンキー倒した　英雄の地に／楽園きずく　父なる将軍／明るい朝鮮の　未来のため／人民はご無事を祈ります

〔4〕　**馬東熙**　朝鮮人民革命軍の指揮官。歴史的な普天堡戦闘の際、市街の偵察任務を遂行。1937 年 11 月、国内工作の任務遂行中、日本警察に逮捕されるや、舌を噛み切って司令部の秘密を守った。1938 年 1 月に死刑に処される。

〔5〕　**李寿福、朴元振**　朝鮮戦争の時期、敵の銃眼をわが身でふさぎ、部隊の突撃路を開いた朝鮮人民軍の英雄。

〔6〕　**チョンリマ作業班運動**　チョンリマ運動を深化、発展させた運動。この運動の参加者は、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」というスローガンのもとに、助け合い導き合いながら作業班を共産主義的に働き、学び、生活する集団にし、とくに共産主義教育を第一の課題として、立ち後れた人は先進分子に、消極分子は積極分子に教育、改造していった。このようにチョンリマ作業班運動は、生産における集団的革新運動であるだけでなく、勤労者を共産主義的に改造する大衆教育の学校でもあった。

〔7〕　**「プエブロ」号事件**　1968 年 1 月 23 日、朝鮮の領海に深く侵入してスパイ行為を働いたアメリカの武装情報収集艦「プエブロ」号が朝鮮人民軍の自衛的措置によって拿捕

されると、アメリカ帝国主義が朝鮮で新たな戦争を引き起こそうと情勢を極度に緊張させた事件。

朝鮮はアメリカ政府から謝罪文をとりつけ、1968 年 12 月 23 日に板門店を通じて乗組員を境外に追放した。現在、船体は平壌の大同江畔に係留されて参観に供されている。

〔8〕 **「EC－121」事件** 1969 年 4 月 15 日、「EC－121」大型偵察機が共和国の領空を侵犯し、朝鮮人民軍の空軍によって撃墜された際、アメリカ帝国主義が朝鮮で情勢を極度に緊張させた事件。

〔9〕 **金一** 本名朴徳山。朝鮮人民革命軍の軍事・政治幹部。解放後、党と国家および軍事部門の要職で活動。1972 年 12 月から政務院総理。1976 年 4 月から朝鮮民主主義人民共和国第一副主席。1984 年 3 月に死去。

〔10〕 **呉振宇** 抗日革命闘士。朝鮮人民軍総参謀長、人民武力部長（朝鮮人民軍総政治局長兼任）。朝鮮人民軍の強化に大きな貢献をなし、1992 年 4 月 20 日、朝鮮人民軍元帥称号を授与される。1995 年 2 月に死去。

〔11〕 **林春秋** 抗日革命闘士。反日共同戦線活動と朝鮮人民革命軍内の党活動を担当。解放後、党と国家の要職で活躍。1983 年 4 月から朝鮮民主主義人民共和国副主席。1988 年 4 月に死去。

〔12〕 **「学びの千里の道」** 金日成主席が 12 歳のとき、朝鮮革命を遂行するには朝鮮をよく知らなければならないという父の志を体して踏破した 1000 里（日本の里で 100 里）の道程。1923 年 3 月 16 日、中国の長白県八道溝を出発し、

3 月 29 日に故郷の平壌万景台に到着した。

〔13〕　**「解放の千里の道」**　金日成主席が、朝鮮の解放実現の日まで帰らないというかたい決意を抱き、1925 年 1 月 22 日、故郷の万景台を発って中国の長白県八道溝まで歩いた 400 余キロの道程。

〔14〕　**金赫**　金日成主席とともに初期革命活動に参加した青年共産主義者。新聞『ボルシェビキ』主筆。金日成主席をたたえた初の革命頌歌『朝鮮の星』をはじめ詩や歌を多数創作し普及させた。1930 年 8 月に戦死。

〔15〕　**呉仲洽**　抗日武装闘争期、朝鮮人民革命軍第 7 連隊長。苦難の行軍（1938・12～1939・3）のとき、第 7 連隊を司令部に装って日本軍を誘引し、司令部の安全を守った。1939 年 12 月に戦死。

〔16〕　**7・4 南北共同声明**　金日成主席によって示された自主、平和統一、民族大団結の祖国統一 3 大原則を骨子とする北南高位級会談の合意事項にもとづき、1972 年 7 月 4 日に発表された共同声明。

〔17〕　**車光秀**　金日成主席とともに初期革命活動に参加した青年共産主義者。朝鮮人民革命軍の創建に貢献し、その指揮官として活躍。

　1930 年の秋、革命同志たち、人民とともに、朝鮮革命の領袖（金成柱）に朝鮮の太陽になってほしいという願いを込めて、金日成という尊名を贈った。1932 年 10 月に戦死。

〔18〕　**テアンの事業体系**　金日成主席が 1961 年 12 月に大安電

機工場を現地指導する過程で創出したチュチェの経済管理体系。この体系は、工場、企業所が党委員会の集団的指導のもとにすべての経営活動をおこない、政治活動を優先させ、生産者大衆を奮い立たせて提起された経済課題を遂行し、上部が責任をもって下部を援助し、経済を科学的、合理的に管理運営する体系である。

〔19〕　**崔賢**　本名崔得権。抗日武装闘争期から有能な軍事指揮官として活躍。朝鮮戦争期、朝鮮人民軍師団長、軍団長。戦後、人民武力部長、国防委員会副委員長を歴任。1982年4月に死去。

〔20〕　**許錟**　長期間、外交部門で活躍した政治活動家。政務院副総理兼外交部長、党中央委員会書記、最高人民会議外交委員会委員長、祖国平和統一委員会委員長。1991 年 5 月に死去。

〔21〕　**沈昌完**　党と武装力の強化にあたって功労を立てた政治活動家。社会安全部政治局長。1981年5月に死去。

〔22〕　**金策**　朝鮮人民革命軍の指揮官。解放後、内閣副首相兼産業相。朝鮮戦争期には軍事委員会委員兼前線司令官。1951年1月に死去。

〔23〕　**安吉**　抗日武装闘争期、朝鮮人民革命軍第 3 方面軍参謀長。解放後、朝鮮人民革命軍を正規武装力の朝鮮人民軍に発展させるうえで傑出した貢献をした軍事指揮官。1947年12月に死去。

〔24〕　**姜健**　抗日武装闘争期、朝鮮人民革命軍の連隊政治委員、支隊政治委員。解放後、民族保衛省副相兼朝鮮人民軍総参

謀長。朝鮮戦争期、前線司令部参謀長。1950 年 9 月に戦死。

〔25〕 **柳京守** 本名柳三孫。抗日革命闘士。解放後、初の戦車部隊の指揮官となり、朝鮮戦争期には戦車師団長、軍団長として勇名を馳せた。戦後、集団軍司令官として活躍。1958 年 11 月に死去。

〔26〕 **趙政哲** 抗日武装闘争期、朝鮮人民革命軍連隊政治委員。解放後、建軍事業に貢献。朝鮮戦争期、朝鮮人民軍南海旅団政治担当副旅団長。1950 年 10 月に戦死。

〔27〕 **金京錫** 抗日武装闘争期、朝鮮人民革命軍で政治工作と出版物の発刊を担当。解放後、建軍事業に貢献。戦後、朝鮮労働党平壌市委員会委員長。1962 年 9 月に死去。

〔28〕 **崔春国** 抗日武装闘争期、朝鮮人民革命軍独立連隊の連隊長、独立旅団の政治委員。解放後、建軍事業に貢献。朝鮮戦争期、師団長。1950 年 7 月に戦死。

〔29〕 **梁世鳳** 1920 年から反日闘争に参加。1930 年から国民府（1929 年、中国の東北地方に組織された朝鮮人の民族主義連合団体）傘下の独立軍総司令。1932 年夏、金日成主席に会い、反共から連共へと方向転換をし、朝鮮人民革命軍との合作に乗り出す。日本帝国主義の謀略にはまり、1934 年 9 月に殺害される。

〔30〕 **鄭準沢** 解放後から経済部門を担当した国家活動家。国家計画委員会の初代委員長。戦後、内閣副首相、政務院副総理を歴任。1973 年 1 月に死去。

〔31〕 **姜永昌** 解放後から朝鮮の金属工業の発展に貢献した科

学者。城津製鋼所技師長、金属工業相、科学院院長を歴任。1965 年 8 月に死去。

〔32〕　**朴英順**　第 33、34 回世界卓球選手権大会の覇者。人民スポーツマン（1975 年）、労働英雄（1985 年）。1987 年 7 月に死去。

〔33〕　**金鐘泰**　朝鮮の統一のためにたたかった南朝鮮の革命家。統一革命党（現「韓国民族民主戦線」の前身）ソウル市委員会委員長として活動中、南朝鮮警察に逮捕され、1969 年 7 月に死刑に処される。「祖国統一賞」（1990 年）、国際ジャーナリスト賞（1969 年）受賞。

〔34〕　**崔徳新**　愛国烈士。反日独立運動家の家庭に生まれ、1936 年、中国の黄埔軍官学校を卒業。その後、朝鮮の民族主義者の武装組織である光復軍の将校として服務。解放後、南朝鮮で軍団長、外務部長官を歴任し、反共の大立て者として活躍。1977 年 1 月、アメリカに亡命し、1986 年 9 月、朝鮮民主主義人民共和国に永住。以後、天道教青友党中央委員会委員長、祖国平和統一委員会副委員長を務め、1989 年 11 月に死去。

〔35〕　**崔東旿**　愛国の志士。朝鮮の反日独立運動家によって中国の東北地方に設立された軍事政治学校―華成義塾（1926 年 6 月～12 月に金日成主席が在学）の塾長。解放後、南朝鮮で米軍政庁過渡立法議院の副議長を務め、朝鮮戦争期に入北して在北平和統一促進協議会常務委員として活動。1963 年 9 月に死去。

〔36〕　**柳東悦**　愛国の志士。日本帝国主義者による朝鮮軍隊の

強制解散を機に、1907 年から反日運動に参加。解放後、南朝鮮で米軍政庁統衛部長を務め、南朝鮮軍の創設にも関与。朝鮮戦争期に入北し、祖国統一のために献身。1950 年 10 月に死去。

〔37〕 **吉永祚** 朝鮮人民軍飛行士。1992 年 12 月、飛行訓練中、不慮の事故で住民地域に墜落しそうになったとき機首を海上に向けて犠牲となる。

〔38〕 **「苦難の行軍」** 抗日武装闘争期の 1938 年 12 月上旬から 1939 年 3 月にかけて、朝鮮人民革命軍の主力部隊が南牌子から鴨緑江沿岸の朝中国境一帯へ向かって断行した 100 余日間の厳しい行軍。この行軍は零下 40 度の酷寒と厳しい食糧難、執拗に追い迫る日本軍との熾烈な戦闘のなかでおこなわれた。朝鮮では、この苦難の行軍の精神にのっとり、1990 年代の後半期の難局を打開するために展開された人民の闘争を「苦難の行軍」と称した。

印刷＝朝鮮民主主義人民共和国
ㄱ－183174